山口洋司（狩場台）

INDEX

（平和を願って）

世の中、不思議ですね　（2015.2）
怖い“集団の意見”　（2015.6）
安倍退陣の声を　（2015.9）
安倍総理退陣を　（2015.10）
立憲主義を蝕むシロアリ　（2015.11）
キケンな政権に待った！の年に　（2016.1）
偏向という空気　（2016.2）
曲がり角に太い棹を　（2016.3）
外遊より新安保法の考え直しを　（2016.5）
吾輩は憲法である　（2016.6）
気をつけよう、甘い言葉と安倍さん　（2016.7）
沈黙はダメ　（2016.10）
浮かれている場合ではない　（2016.11）
キケンな“積極平和主義”　（2017.2）
冷静さを失っている国会委員会　（2017.4）
教育勅語、ゾンビが舞い戻ってきた　（2017.5）
いっぱいの疑問の波風を　（2017.8）
（知らん顔）の果てに　（2018.8）
夏の終りに　（2018.9）
軍事より被災者保障を　（2018.10）
責任をとる政治に　（2018.11）
もし、神がついていれば戦争なんか必要ない　（2018.12）
言論人、強い発信を　（2019.1）
意見がひとつに染まった！　（2019.2）
わからない、分からない　（2019.3）
地球温暖化、トランプ説得を　（2019. 4）
忘れてはならないこと　（2019.5）
歯止めが必要　（2019.7）
日米安保の解消を　（2019.8）
神戸市、TRANS の腰くだけ　（2019.9）
　～アートシンポジウム中止～
メディア、ちゃんとして！　（2019.10）
地に堕ちた文化庁　（2019.11）

安倍さんの在職最長は悪夢	（2019.12）
＜みんなはひとりのために＞のワンチーム	（2020.1）
ワタシはシュレッター	（2020.2）
笑いのネタがいっぱい	（2020.3）
安倍さんNO！	（2020.4）
銃やミサイルでウイルスは死なない	（2020.5）
政権に、与党に緊急事態宣言を	（2020.6）
＜こんな人たち＞が法務大臣	（2020.7）
敵基地攻撃とは戦争するということ	（2020.8）
憲法より国歌を変えたら―	（2020.9）
失政を引き継ぐ新政権	（2020.10）
異なる意見排除の菅さん	（2020.11）
科学は軍事に協力を！　ホンネが出た	（2021.1）
政党交付金これでよいのか	（2021.2）
政治家と官僚	（2021.4）
8月15日	（2021.8）
改憲阻止今年は正念場	（2022.1）
ふたたび「敵基地攻撃能力」のこと	（2022.2）
〈核共有〉議論の必要なし	（2022.4）
限りなき軍備増強、これでいいのか	（2022.12）
軍事費抜本的増大は必要なのか	（2023.1）
ふるさとの山、人の情	（2023.2）
恐い夢を見ました	（2023.3）
異次元の軍拡にストップを。	（2023.5）
分断をひろげたG7	（2023.6）
クラスター弾の嘆き	（2023.8）
〈過ちは繰り返しませぬ〉に逆行	（2023.9）
マッチに火をつけて！	（2023.10）
いのちの軽視	（2024.1）
カナリア諸島の九条の碑	（2024.4）
恐しいアメリカの軍事ブロック入り	（2024.5）
岸田さん、法の支配に従って－	（2024.6）
ケンポハップの思い出	（2024.8）
青空と笑顔	（2024.10）
キケンな石破新政権	（2024.11）

（改憲論議をめぐって）

これはえらいこっちゃ　（2016.12）
アクセル踏んで血迷う安倍さん　（2017.6）
トランプ＆安倍　（2018.1）
今度は放送で悪だくみ　（2018.5）
首相案件まかり通って国滅ぶ　（2018.6）
5月3日　（2019.6）

（ワンダフルライフ）

画家　小松益喜さんのこと　（2015.10）
叙勲って何　（2017.12）

（子育ち、親育ち）

音楽会で　（2015.12）

（読んだ見た聞いた）

今も鮮明なラストシーン　映画「明日」　（2015.9）
時代と対峙する笑いを　（2016.4）
国の盾にNO！　（2016.8）
想像力をもって一　（2016.9）
こどもの絵画展から　（2017.1）
木津川計さんのひとり語り舞台をぜひ　（2017.3）
忘れられない一冊『死の商人』　（2017.7）
日常が一瞬になくなる　（2017.9）
　野坂昭如『一九四五・夏・神戸』
新開地に出来る落語の定席　（2018.4）
少数派に思いを　（2018.7）
地方局がつくる映画「はりぼて」　（2020.12）
芸人マルセ太郎のこと　（2022.3）
藤山寛美33回忌に寄せて　（2022.5）
戦時と演芸　（2022.10）
大義よりひとりひとりの命　（2022.11）
60年ぶりの夢　（2023. 4）
政治を身近にしたワイドショー　（2023.7）
3本のドキュメンタリーを見ました　（2023.11）
唐十郎と大島新　（2025. 2）

噺家 桂米朝師生誕百年　（2025. 4）

（エッセイさまざま）

必勝、日の丸の鉢巻　（2015.8）
自転車への思い　（2017.11）
森友・加計問題はどこへ行った　（2018.2）
オリンピックの浮かれから現実に　（2018.3）
放浪の俳人ぼうふらさんのこと　（2021.3）
俳優田中邦衛さんの思い出　（2021. 5）
オリンピック、マインドコントロールを解いて ！　（2021.6）
いのちは平等　（2021.7）
拡大導火線になったオリンピック　（2021.9）
もうすぐ総選挙です　（2021.10）
つながり過ぎの不安　（2021.11）
教科書、これでよいのか　（2021.12）
存在感をなくしている野党　（2022.6）
「いったい、どうなっているの」　（2022.7）
安倍さんの国葬納得できません　（2022.8）
安倍さんの国葬、反対です　（2022.9）
ディレクターKさんのこと　（2023.12）
ハガキ、手紙の文化をつぶさないで　（2024.2）
価値観が変わった～阪神淡路大震災　（2024.3）
緊急異常事態の自民党　（2024.7）
オリンピック気になることいっぱい　（2024.9）
国民民主党、パフォーマンスはやめて！　（2024.12）
裏金“センセイ”は即辞職を　（2025.1）
縮んでいく最後の安全網　（2025.3）
いま、安倍政治の検証を　（2025.5）
＜お米政策を見直すべきです＞　（2025.6）

（平和を願って）

世の中、不思議ですね　（2015.2）

山口洋司（狩場台）

世の中、あれれ、と思うことが多いのですが、これもそのひとつ。先日の阪神・淡路大震災20年のメモリアルの日、普通なら安倍晋三氏は一国の総理として何を置いても神戸へきて20年の歳月に思いをいたすのが責務ですが、夫婦で中東に旅をしていました。

その出先イスラエルのホロコーストの記念館では、特定の民族の差別、憎悪はあってはならない、とかつてのナチス・ドイツの大量虐殺を嘆いていました。不思議ですね。いかにも正義の人ですね。この同じ人が日本のかつての南京台虐殺について虐殺した数字が違うと異議を唱え、あたかも虐殺がなかったかのような発言をしているんです。何を思っているのでしょうかね。
従軍慰安婦のことでも、強制連行した公文書がない、学者の研究を待たねばと。これも軍が関与した事実があるにもかかわらず、全てを否定するような発言にとれます。教科書からもこれらの問題を政治的に抹殺していっています。不思議ですね。

ユダヤ人を虐殺したドイツは、心からの謝罪と徹底した補償でヨーロッパの一国として復興してきました。政治の指導的立場にいる人が、ヒットラーの墓参りを、など言い出したら大変な問題になるでしょう。A級戦犯もまつられている靖国神社に政治の指導者が隣国の反対を押しきって参拝するなどとは大いに違います。せっかくの多額の経費を使って外遊したからにゃドイツの戦後処理も勉強してきて欲しいものです。

これもあれれ、です。総理はパレスチナの議長にイスラエルとの和平の直接交渉再開に向け自制と柔軟な対応を要請したそうです。日本の隣国との問題は一体どうなっているのですか。国益という言葉は大嫌いですが、敢えてつかうとすれば、いちばん国益を損なっているのは、安倍総理自身です。隣国のいちばん嫌悪する行為を敢えて信念、と強行する。

おのれの為、国益を損なってもらってはたまりませんね。あれれ、が多すぎる昨今です。

怖い“集団の意見”（2015.6）

山口洋司（狩場台）

今いちばん怖いこと－。
例えばの話です。尖閣問題で＜領土などどっちでもいい。棚上げしたらいい＞と言ったら、多くの人から白い目でみられ、非難され、あげく反日的というレッテルを貼られかねません。実際にそうなってきています。みんなナショナリストになるんですね。

政治のやることは巧いんです。ちゃんとブレーンがいて、国民が国民を指弾するようなかたちをあの手この手で作り上げていき、政権の思う“世論“をつくりあげていくんです。そのつくられた”世論“に反したら、”世論“に排斥される。
かつての大戦のときも少しずつ”世論“がつくられ、気がついたら世の中ひとつの意見にぬりつぶされて戦争に突入していきました。新聞などのメディアもこぞってひとつの意見に呼応し扇動していきました。
政治が何か巧もうとしたとき、かならず世は集団（マス）ヒステリーの状態になる。政治がそういう状態をつくるんですね。今まさにそんな状態になってきていませんか。＜強い日本を取り戻す＞の時代錯誤の人、安倍さんとそのお仲間はにんまりとほくそえんでいます。権力を持つことは素晴らしいこと－と。
それに対峙するにはやはり私たちひとりひとりが“集団の意見”に丸め込まれず屈せず異論を大いに唱えていくことが大事なことだと思います。政治の用意するナショナリストだけには絶対になりたくありません。

安倍退陣の声を（2015.9）

山口洋司（狩場台）

「立憲政治をアジアで最初にうちたてた日本・・・
安倍晋三さんの総理談話です。なんだか継ぎはぎだらけのことがだらだらと解説風に書かれていましたね。同じような内容が繰り返され、文章としても、心を込めて伝わってくるものが何ひとつないのが実感でした。

このだらだらは安倍さんの特徴、持ち味ですかね。持ち味といったら褒めことばになってしまいますが、いつも意味をずらせたり、意味不明のことをながながとしゃべる、それを本人は丁寧な説明、と誤解している。いつもの国会答弁がそうです。

談話は、村山談話を水で薄め、ほんとの心から、という気持ち、いわば魂を抜き取ったようなものでした。しかしそれが安倍さんのほんとの狙いなのでしょう。
立憲政治が今、危機にたっています。談話で言及する、最初にうちたて、その誇りとするという意味の立憲政治が、それを述べる総理によって潰されようとしているのです。こんな皮肉なことはありません。安倍さんは聞く耳を持たずに突っ走っています。

昭和史の半藤一利さんと保坂正康さんが青木理さんに答えて「サンデー毎日」で安倍さんを厳しく断罪していました。耳に入ったことを組み立てて、うすっぺらで論理がない、こんな総理のもと、国の命運を変えるようなことをまかせられない、と。全く同感です。

今、保守的な人をも含めておかしい、安倍アカン、という声が一斉にあがっています。 あらぬ方向へ日本を、引っぱっていこうとしていることに皆んなごまかされないようにしないと取り返しがつかないことになってしまいます。安倍さんは別荘でゴルフやバーベキューをやって、一見余裕があるように見えますが、頭をかかえ込んでいるのです。支持率が下がっているうえにいろいろなところから想定外の批判の矢が飛んでくる―。

安倍退陣の大きな声をそれぞれの持場で今あげることが大事、機は熟してきています。

安倍総理退陣を　（2015.10）

山口洋司（狩場台）

まるでヤクザ映画か何かを見ているようでした。

民意を無視して力づくで安保法案を成立させた安倍晋三さんは、早速、山梨の別荘にこもり、祖父の岸信介さんの墓参をすませ、次の日には外交の相談役故岡崎久彦さんと法案を通すため引っ張ってきた故小松前法制局長官の都内の自宅に報告に行っています。ほんとに律儀です。墓参では60年安保を強行して辞職に追い込まれた祖父に＜仇を討ってきました＞と報告しているようでした。

あれだけ問題があり、反対があった法案です。普通ならまず何をおいても国民へ、どぶ板を踏んで説明してまわるべきです。しかもことあろうか連日のゴルフ三昧、一週間前には関東などが水害に

見舞われ、大災害が起きて、途方にくれている人達がいっぱいいるのです。何を考えているのでしょうかね。国民の方をむいていません。不可解です。

国民はバカにされています。総理は公人です。365日公につくさなければなりません。人格、品位、構想力、知識、判断力がそなわっていなければなりません。それに言葉が大事です。政治家は言葉が命ともいわれます。しかし安倍さんの言葉はぺらぺらです。
今回の法案は国民の平和と命をまもるためのーと-、コピーのように、心ここになく枕ことばのごとくしゃべっていました。安倍さんが平和という言葉を発するとまるで陳腐なものになってしまいます。実がともなっていないからでしょう。法案の名称にも平和と名付ける、まるで詐欺です。

こんな総理、戦後最悪といってもよいうすっぺらな総理のもと、遠ざかっていくのは真の平和です。早く退陣をすべきです。そのためにみんなが声を発するべきだと思います。

立憲主義を蝕むシロアリ　（2015.11）

山口洋司（狩場台）

安倍晋三さんは今、夫人同伴で中央アジアに漫遊しています。
野党や国民の臨時国会開催要求をそでにしてです。代わった閣僚にいくつかの不祥事があり、国内にはTPPなど問題が山積しています。新安保も国民が理解不足なので丁寧に説明していくことが大事と言いながら、何一つ実行せずにの行脚です。

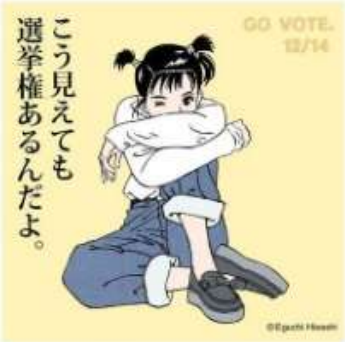
中央アジアへ旅するのは、大企業の投資がやり易いようにとの環境作りをする為、だと言っています。何も差し迫ったことではありません。もしどうしても必要とあれば外務大臣か通産大臣あたりが行けばいいのです。国会を放っぽり出して行くことはないのです。臨時国会で民主主義をけちらかして暴走しているのを糾弾されるのが恐くて逃げている、としか言いようがありません。中央アジアでは援助の大金をぶらさげて行くので、そりやぁ大歓迎です。毎日の晩餐会, 観劇、それは国会にいるより、ずっといい心地でしょう。

先日「安全保障関連法案に反対する学者の会」という会のシンポジュウムが東京であり、そこで共催したSELDs（シールズ）のメンバーの1学生が「空気を読んでいては空気は変わらないんです。それをデモで教えられました」、と発言したという新聞記事を読みました。そうです。まったくそうなんです。空気を読んで言いたいことを控えるのがつつましい、という日常生活にはそんな一面もありますが、お上、権力に対してはそんなことをしていてはだまされるだけです。空気をつぶしていくことこそが大事と思います。

安倍さんら権力を持った一軍は、シロアリのようです。マスメディアを使ったりあらゆる方法で世の空気を巧妙に作ります。国会や民主主義などなんのその、深いところに入り込み屋台骨を蝕んでいっているのです。空気を詠んで黙っていては倒されます。立憲主事に巣くうシロアリです。
空気を変える強力スプレーでも持って早く退散させないとえらいことになります。

キケンな政権に待った！の年に（2016.1）

山口洋司（狩場台）



＜早くしろよ＞、与太ものじゃなく、総理大臣のヤジです。
昨年の安保法案の委員会で、安倍さんは野党の質問の最中ヤジったのです。
総理大臣が法案の審議中にヤジるのは前代未聞のこと。憲法解釈を大きく転換する法案を審議している大事な一場面です。何たるおごり、品格のかけらもありません。
国会の今の状況はこのヤジにすべて象徴されているようです。
国の形を変えてしまいかねない新安保法案、十分な審議もせず、鴻池さんと元イラク派兵隊長が最後にピエロを演じて締めくくる、まるで喜劇を見ているようでした。軽く、あまりにも軽く学園祭の乗りのようで、戦後政治でもっとも政権が安易で、ボロボロの醜態を晒した国会です。

この恥を拭い去ろうと政権が考え出したのが一億総活躍社会というスローガンです。一億総なんとか―、もってのほかです。先の戦争中、一億総決起、一億総動員のあのスローガンを思い起こさせます。日本を取り戻す！と言っている安倍さんですから不思議なことではありませんが、デリカシーに欠けすぎます。
内容も何のことはない、各省庁がやってなければならないことを，まとめただけの話です。わざわざ担当大臣までつくり、委員会をつくり、屋上屋を重ねただけです。各省庁不要みたいな話ですね。で、出てきたのが低年金者に3万円をバラまく―。聞き心地がいいんです。そう、この夏、参議院選があるんです。イメージ悪いヤジや＜喜劇＞の残像を消さなければならないんです。政権はすでに参議院選挙に向けて、あらゆる手を使いながら走っています。選挙に勝ったら憲法改悪がゴールです。

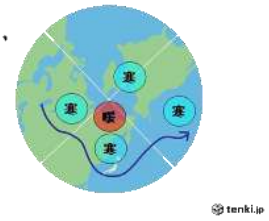
新安保法案のかけつけ警護を実行するのは予定を変えて参議院選の後にすると言います。 国民に理解されていないのがわかっているのなら、やめるべきなのです。でもそうはしない、これではだましうちです。

軽減税率の与党の協議をはじめほとんどのことが選挙にどう有利にはたらくか、すべて国民にではなく選挙に向いているんです。不遜なヤジに代表される危険な政権はまっぴらです。選挙は私たちにも待ったをかける大きなチャンスです。いい年にしたいものです。

偏向という空気（2016.2）

山口洋司　（狩場台）

東京に「放送人の会」という会があり、放送に携わったOB有志の会ですが、数々の実績を残し放送の草創期を支えた人たちの集まりであるだけにその発言力は大きなものでいつも注目されております。その会の企画のひとつが年間の放送作品の褒賞制です。



毎年、その会に入っている先輩が贈賞式のもようのビデオを送ってくれて見るのですが、昨年は東北の局が作った「花は咲けども」という歌（NHKのキャンペーンのもじり）をうたうフォークのグループ「影法師」を追ったドキュメンタリーなどのほかに関口宏の「サンデープロジェクト」（TBS－MBS）がありました。
これは政治や社会の今を知的に冷静に論じるもので、その放送はぼくもよく見るのですが、「放送人の会」の表彰の場で関口宏とプロデューサーが話していたことが印象的でした。「中庸にいることを意識して番組を始めたが、いつの間にか、置いてきぼりをくった、世の中がおかしくなったんではないか」と。

集団的自衛権の法案審議の最中では、番組は法案に対する疑義が貫かれており、ふつうの常識の目線です。それが偏向になってしまうんですね。なにしろ政権と意見を違えたら偏向となる昨今です。安倍さんはよく批判者に対し＜レッテル張り！＞と非難しますが、逆に政権が偏向のレッテルを張って回っている。そんな恐い空気が今世間にみなぎっています。政権が限りなく右へ右へ舵を切っていく、普通のことがだんだん遠退いていく。
こうして空気が少しずつ変わり、そうなれば、政権の思うツボです。普通に感じる疑義が偏向になっては言論の自由も何もあったものではありません。
「サンデープロジェクト」の評価は、昨今のメディアの危機に対する警鐘でもありました。

曲がり角に太い棹を（2016.3）

山口洋司（狩場台）

＜しっかりー＞＜まさにー＞＜未来志向―＞、なんだか分かりますか。ボキャブラリーの少ない安倍さんが繰り返しいつも使うことばです。安倍さんが使うとなんだかうすっぺらい言葉になってきて、うすら寒い思いがする昨今です。
年明けから早々に、改憲が現実的なものになってきた、挑戦の年にする、と安倍さんは挑戦的です。戦争に対してのリアリティや想像力をもたない軽々しい総理が軽々と改憲を豪語する、この不条理、聞いていて怒りがこみ上げてきます。

安倍さんは昨年、こんなことも言っています。＜世界の中心でいちばん輝く国にしたい＞と。一見、いいやないか、と思わせます。アブナイ、危ない、安倍さんの真意はアメリカと一緒になって世界を牛耳っていこうと言うものです。富国強兵して国力をあげる、まるでかっての戦時のスローガン＜八紘一宇＞を思わせます。天皇を中心にしてアジアを、世界を治めて平和の秩序を作り上げていこう、という正気の沙汰と思えないものなのですが、国民はマインドコントロールされていたのです。

今年は国の正真正銘の曲がり角になっています。安倍さんは国民の命と財産を守るために、と言って、人を殺したり、殺されたりする現実に国民を引っ張り込もうとしています。世界の平和に深くかかわっていく、日米同盟を世界に向かってより強力にしていく、とも言います。世界を強調します。なんのことはない、せがまれて低下してきたアメリカの軍事力の手助けをするということです。平和という言葉も安倍さんが使うと陳腐なものになってしまいます。
私たちは、政権の何でもありの今の暴走にだまされてはなりません。曲がり角に太い杭をさす年、と強く自覚したいものです。　　（カット写真、ちょっと違うかな？編集子）

外遊より新安保法の考え直しを （2016.5）

山口洋司　（狩場台）

ゴールデンウィーク、安倍総理はヨーロッパへ外遊するそうです。ゴルフと外遊がストレス解消法だという安倍さんにとって願ってもない休息のようです。
新安保法を昨年強引に成立させたおり、まだ国民には十分に理解されていないことを認め、これから丁寧に説明していくのできっと国民は分かってくれるだろうと、言っておきながら何ひとつ丁寧な説明はなく、＜通してしまえば、こちらのもの＞の状態です。
施行はしたものの実際に弾薬を運んだり駆けつけ警護などの後方支援行動は参議院選挙がすんでからにする、と言っています。無茶をするので世論がこわいのです。選挙には何が何でも勝って憲法改悪を進めたいからです。国民をだまし、矛盾だらけです。

しかし、事は“粛々”と進められています。今年、4月半ばの朝日新聞の写真を見て目がテンになりました。海上自衛隊の護衛艦がベトナムのカムラン港に寄港したというニュースの写真です。ひるがえる旭日旗と艦の写真（次ページ左）です。＜どこかで見た光景＞、と思い読売新聞発行の「報道写真に見る昭和の40年」を繰っていると、これと同じような写真がありました。昭和16年、太平洋戦争への道を決定づけた日本軍の武力南進政策で、日本海軍がベトナムのサイゴンに入港した時のものです（右次ページ）。80年近くを隔てていますが、やがて同じようことが起こっても不思議ではない、と思えてくるのです。

海上自衛隊

海軍

今回のカムラン港は“南シナ海防衛”の最重要拠点と言われ、日本の政府は極めて戦略的な寄港地選定であり、歴史的訪問だとさえ言っています。この護衛艦はここの寄港前にフィリピンにも寄港し、南シナ海で中国を刺激しつづけています。ひとつひとつ積み上げていっているのです。軍事の行動というものは限りなく拡大していくのが世の常です。

横暴すぎる安倍さん、国民は納得していません。環境が変わったからのひとことで暴走されてはたまりません。外遊を控えて新安保法への疑義を受け考え直す時です。

吾輩は憲法である（2016.6）

山口洋司　（狩場台）

漱石にならって、吾輩は憲法である。日本国憲法というちゃんとした名前がある。あるじは国民である。
＜アメリカのGHQから押し付けられたものだから変えてしまえ！＞と安倍さんたちが叫び、邪険に取り扱われ、今、抹殺されかかっているが、吾輩の九条は当時の幣原喜重郎首相からマッカーサーに懇願して成分化されたものである。決して押し付けではない。マッカーサーも、戦争放棄が世界の範になればとの強い思いをこめて共感し実現したものと聞いている。それより何よりあるじに支持され平和に貢献してきたと自負している。

吾輩は国の最高法規である。日本は法治国家である。たとえ潰したいと思っても今の吾輩を総理は一国の長として率先して尊ぶのが責務である。記念日には吾輩の古希を祝い、さらなる平和への誓いをたてるべきである。にもかかわらず、その誕生日に吾輩の魂を抜き取って、吾輩を死に体にしてしまおうという一部の改憲勢力の集会にエールを送って激励している。許せない。裏切り行為である。総理が法を壊そうとして　いるものとしか思えない。
安倍ヒットラー　　昨年の春だったか、沖縄の反対を押しきって政府が開いた主権回復記念とかいう集会で一国の総理大臣、安倍さんは天皇の前でテレながら、バンザイを唱えていた姿を想い出すが、吾輩は見ていられなかった。時代錯誤とはこのことなのか。＜日本を取り戻せ＞の真意がにじみ出ていたではないか。
夢うつつ、富国強兵で祖父の幻を追うあたりは隣国の若大将の姿とWってきて仕方がない。保守派にもかつては吾輩を大事にしようとしたハトたちが結構いたが、今はスキあらば、といやしい目をキョトキョトさせながら吾輩をいためつけるタカが巾をきかせている。ハトは死んでいる。昨年はそのタカのご仁たちに吾輩、めったうちにされたが、叩かれれば叩かれるほど強くなるのだ。あるじのみんなが心配してくれるのである。

今年は吾輩と寄り添う、つまり立憲主義を守る人たちの国にするのか、そんなの関係ない、と吾輩を葬る一握りのタカたちの国にするのか、分れ目の選挙の年でもある。今回も吾輩は世界に注目されノーベル平和賞の候補になっている。不死身でありたい。

気をつけよう、甘い言葉と安倍さん（2016.7）

山口洋司（狩場台）

舛添騒動に世間の目が奪われているなか、安倍晋三さんはひたすら参議院選のため全国を走り回っていました。何が何でも憲法を変える3分の2を獲るため、それは必死です。

先々で“アベノミクス”の成功を吹聴しまくっています。まるで戦時中の大本営発表のようでした。ボロボロに負けているのに成果があった、頑張れ、と大うそをついて国を滅ぼしたやり方です。安倍さんは経済政策で行き詰っているのをごまかしているのです。

また、日米同盟強化の実績を上げてきた、と危ない実績を誇っているのも目にあまります。しかしアメリカと機密をいっぱい作ったり、武器輸出を督励している。こんな危険な実態はあまり表には出しません。そこまでいくと3分の2が危ないからです。

先日、朝日新聞に中道左派の党が3分の2をとって大勝し、憲法を改正したハンガリーのことが出ていました。政権のチェック機関の憲法裁判所を権力のコントロール下に置いたり、メディアを規制する法律を作ってバランスを欠いた報道には罰金を科する、といったもので、個人の自由より、民族や国家を優先するという憲法改正です。与党の数の力がモノを言ったようです。政権を縛るのではなく、国家が国民を都合よくまとめ上げる道具として新憲法が使われようとしているそうです。

なんだか、安倍政権の先をシミュレーションしているようで、どきっとします。安倍さんのやってきたことや自民党の憲法案がそっくり重なります。“大本営発表”の甘言にだまされてはなりません。憲法改正いのち、安倍さんはたくらみをいっぱい秘めて突っ走っています。「気をつけよう、甘い言葉と安倍晋三」。

沈黙はダメ（2016.10）

山口洋司（狩場台）

集団的自衛権を認める法案があんな暴力的なかたちで通って憲法九条が骨抜きにされてきています。しかし事が過ぎれば、＜ニッポン、ニッポン＞とオリンピックで合唱し、残念ながら何事もなかったかのように日々が過ぎていっています。
一方、安倍さんは国内のさまざまな問題を置き去りにして、ケニヤやキューバやロシアへ多額の札束を抱えて人気とり外遊に出掛けています。

あまりにもわれわれはおめでた過ぎませんか。楽観的過ぎませんか。集団的自衛権の行使でアメリカの要請を受ければ、たとえ後方支援といっても、銃をもって戦地へ生死をかけて自衛隊は行かなければならないことが現実となっているのです。
想像してみてください。《わが子が銃をもって戦地へ行く》《夫が、父が戦いで死線をさまよう》《米国に協力した仕返しで日本の国内が爆弾やテロに見舞われる》―。ゲームの中でなく現実の世界になるのです。決して昔あった話ではないのです。
しかし、きっとまだ自分には関係ないことだ、と思っている人が多いのではないでしょうか。これは絵空ごとではないのです。自衛隊員だけの話だと思っている人もあるでしょうが、自衛隊への応募が少なくなってくれば次は徴兵制になるのです。志願とは関係なく、兵隊になってお国のために国家のために戦う人にされるのです。
銃　そうなってくると多くのメディアは、きっと出征する人を称え、美談をいっぱいつくるに違いありません。憲法九条は昔話になります。

今、社会全体が政治や戦争を話題にすることがよくないことである、という風潮が広がってきつつあるようです。現政権の考えが正義であり、それから踏み出すと中立を損ねる、と。みんなどこかで忖度している。
世の中がおかしくなるのは気がついてからでは遅いのです。今、井戸端会議でもどんな場でも、生活している場でおかしいことは＜おかしいー＞と、ことあるごとに言うことです。発言することです。声高々にだけが意志表示ではないのです。黙っていることは後世への罪悪です。僕は自分のできる範囲のこととして、誰かに会って話すとき、今の政権おかしいーと話題にするようにしています。

浮かれている場合ではない（2016.11）

山口洋司　（狩場台）

パラ・オリンピックの祝勝者パレードに80万人が参加したといいます。たしかに銀座は普段の銀座ではなく人、人で埋まっておりお祭りムードでした。新聞やテレビのはしゃぎ方も、こんなのでいいのかな、と考えさせられる程でした。
メダル、メダルとはやしたて、メダルを獲ることにのみに関心が寄せられたパラ・オリンピックでしたが、そのメダルも選手個人というより国の力、国威を示すバロメーターのようになっていたのではないかと思います。選手にしても＜ニッポン！ニッポン！＞と国を背負わされている重圧があったにちがいありません。

これらの現象はやはりメディアの影響が大きかったといえます。メディアの報道で特に気になったのは勝つと＜やってくれました！＞と絶叫する。＜やった！＞であるべきです。常套語になっている＜勇気をもらった＞という言い方も、本当か、と言いたくなります。競技はあくまでも個人の限界への挑戦という真摯なものです。それに対する称賛です。

しかし何より気になったのは、男子マラソンで2位になったエチオピアのリレサ選手です。レースの最後、ゴールの直前、両手を高く上げてバツ印をして駆け込んできた（写真）。エチオピア政府が自分たちのモロ族の虐殺を続けている、自分も国に戻れば殺されるか、逮捕される。まだ決めていないけど自分は他の国に行くつもりだ、どいうことが、朝日新聞に小さく載っていました。バツ印はSOSのサインにちがいない。その後どうなったかホローの記事は見ていません。パレードで浮かれる後ろには世界ではこんな現実があります。

2020年の東京は今からもうメダルをいくら増やすか、とかまびすしい、しかしそんなことより戦闘状態の南スーダンに何としても実績づくりのため駆けつけ警備隊を派遣しようと白紙領収書をいっぱい張り付けた旗を振り勢い立つダテ眼鏡の稲田防衛大臣や＜現地は永田町よりは危険＞とうそぶく安倍さんの危うい動向をチェックすることが今、大事なことではないでしょうか。浮かれている場合ではありません。

キケンな“積極平和主義”（2017.2）

山口洋司　（狩場台）

＜積極平和主義＞＜世界の真ん中で輝きたい＞。安倍さんのホンネがいよいよ丸出しになってきました。
外国行きとゴルフがストレスの解消になる、という安倍さん、新年も早々にフィリピンやベトナム、インドネシアなどに夫人同伴ででかけています。赤ジュウタンを歩んでの大歓迎、そりゃ気持ちのいいことでしょう。

フィリピンではシナ海の問題でしっかりやれというのと引き替えに一兆円規模の支援をポンと土産にしました。インドネシアでは沿岸強化の協力を約束したり防衛装具の売り込みを、ベトナムでは大型巡視船の供与と多額の経済支援を約束しました。すべて南シナ海をにらんでのものです。

この安倍さんがやっていることは中国を挑発してケンカを売っているようなものです。
日本に面してない南シナ海問題に当事国よりしゃしゃり出てアメリカと一緒になってけしかける。
なぜ日本が率先して前に出ていかなければいけないのか、安倍さんは地域の平和を守るため、ときれいごとを言います。地域の盟主になったような傲慢さです。
安倍さんの行動は新安保法案を強行してからは特に目に余るものがあり、中国と一触即発の状態です。
この中国対処で防衛関係の予算は大きく増えています。一隻の海上保安庁の巡視艦が、一機の防衛省のオスプレーが削られればどんなに社会保障の予算がうるおうか、とつい考えてしまいます。

安倍さんのもくろむ＜積極平和主義＞は危険そのものです。戦争加担の道をひた走っています。
ほとんどの戦争は“平和と安定”のため、という言い方ではじまっているのです。
外で挑発、うちに「テロ等準備罪（共謀罪）」案、野党は首相のキケンな行動にもっとブレーキをかけるべきではないですか。

冷静さを失っている国会委員会（2017.4）

山口洋司　（狩場台）

3月の半ば、ふとラジオを付けたら参議院予算委員会で社民党の福島瑞穂さんが質問しだしたところでした。
安倍総理が舌足らずで異様にけしきばんで答えている。答えているというより、がなっている。福島さんは国家戦略特区委員会（安倍晋三委員長）の事業として安倍さんがお友達の「加計学園」（岡山市）の経営者に便宜を計ったのではないかとただしている。以前から獣医師業界などが反対してきた案件にもかかわらず、今治での獣医学部の新設を短期間の間に土地の無償提供までして認めた経緯についての疑惑です。第2の森友事件とも噂されているものです。
安倍さんは少ない福島さんの質問時間を奪うように質問に関係ないことも延々ペラペラ喋る。あげく＜個人の名前を出して印象操作している。あなたの質問が事実でなければ責任を取るか！＞と、激しく恫喝している。正直、聞いてはおれなかった。安倍さんは、これまでにも予算委員会ではヤジ飛ばしの常習犯でした。品位のカケラもありません。

野党は政府行政の政策が歪められてないか絶えず監視していくのが使命です。それを施政者が謙虚に受け止めずに委員会でわめきたてて脅したりするのはもってのほかです。
最近の国会の委員会を見ていると、政府は数の力に甘んじて驕っているとしか言いようがありません。総理たるものやましいことがなければ堂々と冷静沈着に質問を受けねばなりません。相手をやっつけることではありません。予算を審議してもらっているのです。冷静さを失っているのを見るとやっぱり何かある、と思わないわけにはいきません。

こんなにすぐカッカとなる人が自衛隊の最高指揮命令権をもっているのだと思うと、何かあるときに末恐ろしい思いがします
同様に10年少し前、森友学園の初回の訴訟に顧問弁護士として出廷したかどうかさえも覚えていないというダテ眼鏡の防衛大臣も自衛隊の指揮権をもっているのです。
この国はどうなっているの、普通の国ではもはやないんだ、と思わざるをえません。

教育勅語、ゾンビが舞い戻ってきた（2017.5）

山口洋司　（狩場台）

＜朕（天皇）オモウニ　ワガ皇祖皇宗―＞。教育勅語です。小学校1年で全部暗記していました。今から考えるとおぞましい思いです。

その勅語が70年あまりを経て息を吹き返しています。ゾンビが舞い戻ってきたようです。実に恐ろしいことです。
教育勅語は明治天皇が国民に精神のあり方を説いたもので、これが昭和に入って戦争時の精神基盤になりました。孝養など道徳を説く一方、君や国家に何かことあれば、一身を捧げなさい、まさに忠君愛国思想で基本的人権をまるきり否定します。
森友学園疑惑の中、園児に暗唱させたという超ウルトラ右翼教育で問題になって注目されているわけですが、問題はこの勅語を、政府が教材として使うならいい、と閣議決定までしたことです。
戦後間もなくの衆・参両院で戦争への反省から排除、失効決議された死に体でもあります。それを海の底から不発弾を引っ張り上げたみたいなものです。息を吹き返そうという人が今の安倍政権にはいっぱいいます。容赦なりません。世界からも笑いものにされています。勅語によって若者を戦争に引きずりだし、＜天皇陛下バンザイ！＞と死んでいった過去をどう考えているのでしょうか。

大臣の資質なしと辞任をつきつけられている稲田防衛大臣は、勅語の核（中心部分）はいい、と礼賛しています。勅語の核は道徳ではなく、臣民は天皇の赤子（子供＝国民）として個人より君と国家に尽くせ、ということです。弁護士にもなっていてそんなことも分かっていないようです。文科大臣も教材としてならいい、と。なんの疑問も抱かず言います。教育勅語は憲法の精神とはもっとも遠い存在です。
その勅語を認めたり、＜日本を取り戻す！＞と憲法無視の多くの政策を数の力で押し通すことより、現実を憲法に合わせるべく努力するのが政権の義務ではないですか。

あさっては憲法記念日です。

朕惟フニ我カ皇祖皇宗國ヲ肇ムルコト
宏遠ニ德ヲ樹ツルコト深厚ナリ我カ臣
民克ク忠ニ克ク孝ニ億兆心ヲ一ニシテ
世世厥ノ美ヲ濟セルハ此レ我カ國體ノ
精華ニシテ教育ノ淵源亦實ニ此ニ存ス
爾臣民父母ニ孝ニ兄弟ニ友ニ夫婦相和シ
朋友相信シ恭儉己レヲ持シ博愛衆ニ
及ホシ學ヲ修メ業ヲ習ヒ以テ智能ヲ啓
發シ德器ヲ成就シ進テ公益ヲ廣メ世務
ヲ開キ常ニ國憲ヲ重シ國法ニ遵フ一旦
緩急アレハ義勇公ニ奉シ以テ天壤無窮
ノ皇運ヲ扶翼スヘシ是ノ如キハ獨リ朕
カ忠良ノ臣民タルノミナラス又以テ爾
祖先ノ遺風ヲ顯彰スルニ足ラン
斯ノ道ハ實ニ我カ皇祖皇宗ノ遺訓ニシテ
子孫臣民ノ倶ニ遵守スヘキ所之ヲ古
今ニ通シテ謬ラス之ヲ中外ニ施シテ悖
ラス朕爾臣民ト倶ニ拳々服膺シテ咸其
德ヲ一ニセンコトヲ庶幾フ
明治二十三年十月三十日
睦仁

いっぱいの疑問の波風を（2017.8）

山口洋司　（狩場台）

いつも新聞を広げて真っ先に見るのは首相の前日の動きです。朝日新聞ならば「首相動静」です。誰と会っているかということが中心の記述ですが、それによって何がどう動いているか、動こうとしているのかが憶測できます。
なかでも夜、誰と食事をしているのかが気になります。7月半ば朝日、毎日、読売、NHK, 日本テレビなどの大手メディアの編集、論説、解説の幹部と高級レストランで食事をしました。内閣の支持率が大きく下がったと報じられた直後です。

またか、と思いました。安倍さんはメディアをどう利用したらよいか、をいつも考えています。いちゃもんをつける常習犯です。この席で直接にはどうしてくれ、とは言わないと思いますが、メディア側が目に見えないプレッシャーを受けるのは当然です。参加した方はちょっとでも総理の真意を探るためと弁解するでしょうが、こんな場で総理は本心を吐露する筈がありません。世間は、当然、これでは真っ当な批判ができないのでは、とメディア側に疑問を持ちます。
メディアと権力の関係は絶えず緊張した関係であらねばならないのです。政権が一番怖いのがメディアの監視とメディアがつくる風、メディア側が総理と睦まじく会食するのは間違いです。
＜安倍総理を信頼できない＞と支持率でレッドカードを突き付ける世間を欺くことでもあります。
他の先進国でこんな関係は聞いたことがありません。

新安保法制はじめ共謀罪法、ここ数年で安倍さんのやってきたことは民主主義に逆行する施策とやり方です。それにこれだけ資質を欠いたいい加減な人達で構成された内閣はこれまでならばとっくにひっくり返っているところです。メディアの追及が弱いのです。
ところが、都議選で都民のしっぺ返しをくって政権は大慌てです。安倍政権が否定されたことでもあります。菅官房長官は加計問題で前川前文科事務次官に、恋々と地位にしがみつき執着していたとボロクソに個人攻撃をし、世間の批判をかいましたが、地位に執着して政権を維持しようとしているのは安倍さんです。安倍さんこそ見苦しいのです。
溺れるもの藁をもつかむ。メディアは手をかすことはならず、社会の木鐸であれ、です。会食をしている場合ではありません。安倍さんは地位に執着せず、即刻即退陣すべきです。

（知らん顔）の果てに　（2018.8）

山口洋司　（狩場台）

昭和史研究の作家、半藤一利さんの近著『歴史と戦争』（幻冬舎新書）が3月に発刊されて、たちまちのうちに5万部を突破したといいます。
半藤さんのこれまで書いてきたり対談してきたもののエッセンスを拾い上げてまとめたものです。日本民族は世界でいちばん優秀であると驕って戦争に突っ走り、メディアもそれを煽り、国民も熱狂した、その過ちを繰り返してはならない、歴史から何を学ぶべきか、と問います。
戦争は急に空から降ってくるものではない、ながい間の国民の（知らん顔）の果てに起きるもの、日常生活を怠ってはならない、と強く説きます。
そう、戦争は気がついたときにはすでに遅いのです。

木津川　計さんがひとり語り舞台「私は貝になりたい」で今年も語ります。ドイツの哲学者の話としてですが、ナチスがユダヤ人を虐殺したりしてきて、問題だとしながら、教会を弾圧しにかかってはじめて、わが問題として捉えたが遅し、と。「二度と飢えた子供の顔を見たくない」と発信し続けた作家の野坂昭如さんも戦争は気がついた時はもう手遅れ、日々が肝心なのだ、といい残して亡くなりました。

私たちが（知らん顔）をしてとり過ごす間に、こつこつと、ことをすすめていくのが政権側です。安倍さんはひとつひとつ（日本を取り戻す）ことを積み重ねてきています。
特定秘密保護法、新安保法制、防衛装備移転三原則、共謀罪―、これらみんな私達の自由度を狭め、政権側が自由度を高める法案です。今また憲法を変えて緊急事態条項の新設というかっての悪法、治安維持法を思わせる条案を自民党は考えています。同時に北朝鮮、中国など“敵”を作って危機感を煽ります。私達はだんだん戻れないところへ追いやられてきています。
（知らん顔）をしている余裕はありません。まずは安倍さんを退陣させることです。

半藤一利さんはこうも言います。コチコチの愛国主義者ほど国を害するものはない。また（あきらめ）が戦争を招き寄せるんだ、と。

安倍夫妻が深く関わる森友・加計問題はまだ終わっていないんです。

山口洋司さんが元町「こうべまちづくり会館
地下ギャラリー」での 展覧会に15点ほど出展
されるそうです。（編集委員）

夏の終りに（2018.9）

山口洋司（狩場台）

今年の夏も、過ぎ去ろうとしています。
ジャン、ジャンとせかえるようなセミしぐれに僕はなぜか、日々のありがたさを意識します。疎開先で迎えた終戦の8月15日、あの日もセミがはやしたてていた記憶があります。作家野坂昭如さんは《戦争は終わったという蝉しぐれ》と詠んでいます。

JR東の労働組合が今年の春闘でスト権をたて経営者側に迫ったのですが、力負け、終わってみれば敗北と総括。組合員の7割がストで迫った組合に反発して組合を脱退したそうです。ストライキをやっていればJRになって初めてのことだったんです。かって怒りをぶつけて激しかったあの<国労>時代を知るものとしては理解できません。

これも理解できないことです。ある世論調査で安倍政権を支持するのは、10代が一番多く、続いて20代、年齢が上がるにつれ減少とのこと、世の中どうなっているのか。若者、どうなっているのか。こちらが立ち後れているのか、全くわかりません。
大学の門前に政治的メッセージいっぱいの立看板がずらっと並んでいた往年の風景がなつかしくもあります。若者は直感で機敏に世の動きを捉えるものです。かっては若者はいつもイラついて怒っていました。それが社会の原動力でもありました。

森友・加計疑惑を残したまま国会はふたを閉じました。期日が来たらどんな悪法も通ってしまいます。参議院の議員を増やす法案もあっという間でした。民意にそむいたこんな手前勝手な法はかってならば大モメして少なくとも継続審議になっていました。
アメリカから買わされる4千億余りの新ミサイルも国会で審議がほとんどないまま進んでいます。この予算を豪雨や地震の被災者にそっくり充てられれば、とつい思います。
しかしこれらはよく分かることです。選挙で国民の方を向いていない人を選んでしまっているからです。無茶をする安倍さんの勢力を選んでしまった私達の責任でもあります。

アイドルグループAKBの人気総選挙、握手会に列を作る若者―
すべて2年先のオリンピックに向けて走る社会―

去りゆく夏、夜空に花火が華麗に開きこの夏を締めくくります。
セミが全身をふるわせてはやします。次の夏は安倍政権消えていろ、と。

軍事より被災者保障を （2018.10）

山口洋司（狩場台）

この夏から秋にかけて豪雨、台風、地震と多くの災害が襲いかかってきました。
北海道地震の被災地ではこともあろうに安倍さんが天皇と同じようにひざをついて被災者の手を握っていました。しかしこれはどう見てもパフォーマンスです。
安倍さんが何をやっても信頼できないのです。森友・加計問題対応でみせた、あの強引な逃げきりの姿が安倍さんの本性だからです。

パフォーマンスは見たくもありませんが、自然災害は今後さらに増え、規模も大きくなっていくことが予測されています。
国民ひとりひとりを守る、といつも軽々しく常套句のように言う安倍さん、もしほんとうにその気があるならば、社会保障費を悪玉にして軍事費を異常に膨らます政策はとうていとれないと思います。被災者を保障するのは社会保障です。

軍事費は最小限の防衛費だけでいいのです。こちらが敵対行動を取らない限り相手が攻撃してくる可能性は、災害で国民が犠牲になり壊滅していくよりはるかに少ないのです。
ならば近隣に脅威を与えて敵をつくるミサイルシステム購入や南シナ海での海自の無謀な訓練などをやめて災害対策費を増やすべきです。被災はこれまでの生活が破壊されることです。ひとり

ひとりに100%補償して生活を再興させること、そしてそれを法律にすることです。これが国民ひとりひとりを守るということです。

災害がおこれば急遽予備費から捻出して対応し、東北大震災ではあらたに復興税をかける、こんなつぎはぎの政策をするより災害に対応する部署を作って、そこで毎年一定の予算をちゃんと組む、あまれば次の年度のプールにしていく、自衛隊も防衛省をなくしてその災害を一括する部署の一部所にしてしまえば、と思います。

災害の長期対策はやはり地球温暖化防止です。安倍さんは空疎なことばでパフォーマンスするより、パリ協定からぬけてひとりわが利益を追求するアメリカのトランプさんを本気で説得することの方がはるかに大事です。
しかし、安倍さんでは刃が立ちそうにありません。まだ3年も安倍さんが首相の座にあることに絶望しながら―。

責任をとる政治に（2018.11）

山口洋司（狩場台）

10月に内閣の改造があり、麻生財務大臣がそのまま居残りました。
驚くと同時にあきれはてています。まさに政治が劣化してきている現状を象徴しているようです。森友問題であれだけ財務省が公文書改竄したり、でたらめの答弁を繰り返し国民を欺いたのに官僚の首をすげかえただけで、責任をとろうとしていません。
大きな犯罪行為です。民主主義社会は組織が犯した不正に最高責任者が責任をあきらかにして責任をとること、つまり辞職することが大前提です。給与の返済ではありません。
諸外国からみたら国家としては三流以下でしょうね。

正当な野党も激しく辞職を迫りましたが、数の力でおごる安倍さんの傲慢さの前にはあまりにも非力でした。そして何よりメディアの非力が如実でした。
麻生さんが内閣に残ることが組閣の前から取りざたされていたのに、閣僚人事の予測だけを興味本位でとりあげ＜それはないぜ＞といった批判はほとんどありませんでした。
こういう国民に背を向けた動きを、国民に分かるように解き、NOをつきつけてこそ、権力の監視です。もし、既存のマスメディアが挙って事前に大きな問題であることを提示していたら、麻生さんは居残ることはできなかったと思います。
メディアは政局への関心よりも政治がどう動いていこうとしているかに、迫ってこそのジャーナリズムです。

わたしたち国民も総じて無関心でした。関心があっても火がつきませんでした。無関心をよいことに安倍さんはさらに傲慢になっていきます。恐ろしいことです。
ひと時代前のどこかの国のマフィアの風貌、まんがチックな麻生さん、と笑ってはおれません。過ちを犯したことに政治責任を取ろうとしない政権にわたしたちは100%なめられているのです。政治までがまんがチック、は許されません。トップが責任をとるちゃんとした普通の国になってほしいものです。

森友疑惑はまだ終わっていません。

もし、神がついていれば戦争なんか必要ない　（2018.12）

山口洋司（狩場台）

＜まさかあの男が、大統領に！＞

アメリカのマイケル・ムーア監督の映画『華氏119』を見ました。水道汚染の市民運動や教師のストライキなどさまざまな動きをめぐっての混乱などを追いながら、トランプを産み出したアメリカの社会のいま、を怒りをもって描くのですが、いつものことながらムーアの情念には圧倒されます。

ムーアが創った映画の後もトランプさんの狂気は止まりません。先のアメリカの中間選挙直後にトランプさんは司法長官を更迭し、CNNの記者をホワイトハウスへの出入り禁止にしました。言うことを聞かない長官、嫌な質問を繰り返す記者を排除したのです。司法、報道は民主主義の根幹をなすものです。それを強権でもって斬るのは独裁です。ムーアはヒットラーを産んだ当時のドイツと土壌が似ているとも警告しています。
中間選挙の結果は周知のように下院は民主党が勝ち上院とのねじれになりました。一抹の救いです。日本でもかつて参議院と衆議院でねじれ現象がありましたが、ねじれは民主主義にとってはよいことです。政権の横暴を防ぎ、議論を重ね妥協点を見つけていく、これが民主主義です。

アメリカ社会にも似て今、得体のしれない空気が日本の社会を覆っています。あきらめムードというか、意志表示をしても受けとめられない、虚無感蔓延です。政治が民の意志を掬い上げていないのです。安保法制がそう、沖縄がそう、働き方改革、“移民法”・・・加計・森友疑惑、麻生財務大臣の居残り一。世論調査では拙速するな、説明不足、やってはならない、反対だ、が多いにもかかわらず、政権は強引です。民の声と逆を向いてひた走ります。そして、憲法改悪も同じように強行しようとしています。無茶苦茶です。安倍さんの任期内でなにがなんでも、とはほとんど財界の要望か、個人的な妄念からです。

国会のねじれがない今、ですが歯止めが先細ってはなりません。
マイケル・ムーアは言います。＜民衆があきらめたとき独裁が始まる＞＜今からでも遅くない＞。
そして＜行動を＞と。
映画でのエンドロールの音楽に歌詞のスーパーが流れます。＜もし、神がついていれば戦争なんか必要ない＞―

言論人、強い発信を（2019.1）

山口洋司（狩場台）

トランプさんが自由で開かれたインド太平洋構想、といえば安倍さんも呼応して同じことを常套句のように言う。中国を囲い込む構想です。
アジア太平洋地域のインフラ整備のためアメリカは6兆8千億円の支援を表明し、日本も1兆3千億円という気の遠くなるような大金を出すそうです。日米が盟主になってこの地域を支配してしまおうというのです。なんだか戦時の大東亜共栄圏構想のようです。

実際海上自衛隊は昨年、インド洋でアメリカなどと軍事訓練を繰り返しています。あの強行した安保法制以降とくに際だちます。護衛艦を改修して空母にし（写真「いずも」）トランプさんから買わされたF35戦闘機をそこに配置する計画まで進んでいます。となると日本海から離れた所で空母を拠点に先制攻撃が思うまま。憲法に規定された専守防衛は完全にふっ飛んでしまいます。すこしづつ後もどりの出来ないところに足をふみいれているのです。

こんな状況が潜行して逼迫しているのに社会に危機感はありません。むしろオリンピック、万博と世は浮ついています。
メディアも報道はすれど問題意識をそんなに持ちません。言論人も沈黙にちかい状態です。時代が変わってきて戦争体験者が居なくなったためなのでしょうか。
若い人たちの反応も、労働組合の反応も聞こえてきません。暴走する安倍さんに今ほど歯止めが必要なときはないと、思えるにもかかわらずです。
社会全体が沈黙しています。

年をあらたに思います。今の安倍政権をNOとする影響力のある人、言論人はいっぱいいると信じます。社会に影響力のある人が今こそ強い発言をしてほしい。その発信が火つけのマッチになってやがて束になって燎火のように広がっていくのです。発信してください。
沈黙は後悔を残します。かってがそうでした。

意見がひとつに染まった！（2019.2）

山口洋司（狩場台）

ちょっと熱しすぎではありませんか。
韓国の元徴用工が損害賠償を求めた訴訟問題です。韓国大法院の判決に安倍さんや外務大臣らがはげしく抗議しました。国際法からみて、間違っている！と。政府の論調に合わせてほとんどのメディアもいっせいに声をあげました。街の声の多くも熱をこめて韓国を非難します。

専門的なことはわかりませんが、政府は日韓請求権協定締結という国家間の約束で、すでにこの問題は解決済み、ということです。しかし、それはあくまで国家間のものでそれでもって全ての個人の考えや訴訟権をも縛ってしまうようなものではないのではないでしょうか。
また、すべてを解決したからといって、日本が韓国を植民地化した事実はゼロになるわけではありません。永久に道義的責任は残ります。消えるものではありません。そういったことを含めて、もっともっと、謙虚な対応が必要ではないでしょうか。
近代民主主義国家は三権分立でなりたっています。韓国ももちろんです。それを勘案しないような無謀な発言も多々ありました。そんな発言をする人の国には民主主義はありません。日韓とも政府は国民にそれぞれ都合のよいように情報を出します。それに惑わされては両国民の反日、反韓の感情が高まるばかりです。

ショッキングだったのは今回、韓国文在寅大統領の年頭記者会見を受けて日本中が反韓の色に染まってしまったことです。テレビは連日コメンテータからキャスターまでごく一部を除いて政府の論に合わせて韓国を非難しました。この人までもが、と思う人もそうでした。もちろん新聞もそうです。国中が燃え上がって反韓になりました。ちょっと気持ちが悪いほどでした。すぐ熱してナショナリストになってしまうんですね。
ちょっと立ち止まって個人の訴訟権までもがほんとに消えてしまっているのか、政府の対応、論法をまるごと信じていいのか、考える冷静さがまるで消えてしまっていました。

大きな流れに合わさないと“非国民”として非難されてしまう、そんな怖さが社会をおおいつつあるのを感じた新年そうそうでした。

わからない、分からない　（2019.3）

山口洋司　（狩場台）

分からない、分からない、国会議員さんの考えることさっぱり分からない～

ゴルフ場の利用税を廃止せよ、と超党派の議員連盟と自民党ゴルフ振興議員連盟が廃止法案を国会に出そうとの企らみ。自治体の収入が減る分は秋から上げる消費税をあてる、と。消費税の値上げはすべて福祉にあてるからなんとか協力をしてくれ、と言っていきている同じ自民党の人たちがです。
その議員さんたちは公務員の利害関係者との接待ゴルフ禁止も、自費でやるなら解禁するという案を同時に出すそう。かっての大蔵省の過剰接待で行政がゆがめられた反省からできた規範をなぜ今崩そうとするの。

分からない、分からない、議員さんたち、さっぱり分からない～
オリンピック候補の水泳選手が病気になり治療に専念するため候補を外れることの無念を語る。五輪担当大臣の“がっかりした”の氷のようなひとこと。メダルをいくつ取るか、しか頭にない人たち。
外国訪問が多いので専用飛行機を買え、と言う河野外務大臣。おもちゃの飛行機とはちがうんです。何様の積りか。

ああ、さっぱり分からない、その感覚が～。
いつもしつこく、質問される記者にキレて内閣記者会に、事実に基づかない質問は慎め、と文書を出し、総スカンの菅官房長官。事実を確かめ真実を露わにするのが記者会見の場。苛立っています。

苛立ちでは負けていないのが安倍晋三さん。さっぱり分からないの代表です。
憲法改悪が思うように進まない。しまいには自衛官募集に都道府県の6割以上の協力が得られていない、憲法を改正して自衛隊を明記せよ、という。この飛躍に自民党からも疑義。またその安倍さんの発言を忖度して、選挙区の自治体に現状確認して“圧力”をかけよ、と全自民党所属議員に提灯持ちをするいつもの人達。

分からない、分からないはまだいっぱいー　“こんな人達”に予算審議はまかせられない。
♪　　添田唖蝉坊・新わからない節・土取利行（唄・演奏）　♪
https://www.youtube.com/watch?v=SNxTg7KYAvA

地球温暖化、トランプ説得を （2019．4）

山口洋司　（狩場台）

＜あなたたちは私たちの未来を奪っている＞　地球温暖化をくいとめるためのスウェーデンの16歳の少女が昨年3月15日、たったひとりで抗議行動をしました。学校ストライキです。
それがまたたく間にヨーロッパ中心に広がり、今年の3月15日は世界120か国200か所で＜地球温暖化を止めろ＞の若者たちの声がたからかに呼応したのです。数十万人の参加で、授業をボイコットしてのストライキです。
アメリカではやはり16歳の少女が、「温暖化の影響を受ける最初の世代、そして対処できる最後の世代、政治家はわれわれの声を聞け！」と連邦議会議事堂前に1500人が集まったそうです。日本でも東京で若者のデモがあり、連帯しました。

この若者たちの行動は大人たちの鈍い行動への不信です。痛烈な批判です。
2015年のパリ協定で温室効果ガス排出削減の国際的枠組を決めて、遅遅とだが対策をしてきているのですが、自国第一主義を掲げるトランプさんはその協定から脱退して、協定を骨抜きにしました。これに対する抗議でもあります。
トランプさんのアメリカはまたこの3月ナイロビで開かれた国連環境総会で、使い捨てプラスティック製品を大幅に削減しようという文言を入れた閣僚宣言の合意に不参加を表明しました。なんと、それよりアジア諸国の廃棄物管理を優先するべきだと言ったそうです。地球温暖化は待ったなしです。“大国”アメリカの堕落、目にあまる無責任さです。

そのアメリカにいつも言いなりになっているのが安倍晋三さん。トランプさんからも“信頼”されているという安倍さん。もし、安倍さんが“世界に輝く日本”を目指すなら、今こそ“相棒”としての出番です。姑息な自国第一主義を押さえて温暖化防止の連帯に戻るようトランプさんを説得することです。憲法を変えるとか、市町村は自衛隊に協力しろとか、危険なことにひた走るのをやめて、パフォーマンスでなく全霊で説得することです。
言われるまま武器を気前よく買うことだけが日米友好ではありません。
“大国”アメリカの影響力は大です。地球の未来がかかっているんです。せめてひとつぐらいは真摯に民に寄り添って世界の若者の思いに呼応して欲しいものです。

森友・加計問題はまだ終わっていません。

忘れてはならないこと（2019.5）

山口洋司　（狩場台）

戦後最悪の暴走政権、安倍内閣にわたしたちは悔しい思いをしてきました。歯ぎしりをしてきました。議員の数の力で何でも非民主的に押し切られてしまいました。
半数以上の世論が反対している重要法案であるにもかかわらずです。それを忘れてはなりません。数の力でおごりも満開でした。ブレーキを壊して暴走する政権を今、止めなければ、右に傾いて座礁している日本という船は沈没してしまいます。

＜安倍政権がごり押しした忘れてはならない国の根幹にかかわる法案ワースト＞

新安保法制
反対する法制局長官を、言うことを聞く長官に変えてまで憲法違反の法案を採決。集団的自衛権を認めて、どこへでも自衛隊が出かけて戦争のできる国にした。

特定秘密保持法
内部告発すると秘密をもらしたと罰せられる。テロを口実に拡大解釈して、情報公開するオープンな社会に逆行。市民が市民を監視する社会になっていく。

共謀法
歴代内閣で廃案になっていた悪法、戦前の治安維持法のようなもの。話し合うことが謀議と判断されれば罪。しかも事前に拘束される。自由を奪われる市民活動。

武器輸出三原則
平和主義のもと、禁じてきた武器輸出を可能にし、禁止三原則を崩す。装備移転三原則と姑息にも言い変え世界の紛争に加担していく危険増大。崩れる専守防衛。

1機100億円越えのF35戦闘機を105機、しめて1兆円越え、加えて3セットのイージス・アショアをトランプさんからゴルフをしながらの爆買いです。この予算を社会保障にまわせばどれだけの人が救われるでしょうか。
言うことを聞かない放送局に電波停止命令の可能性にふれたり、教育勅語を否定しきれない内閣、そして、沖縄の民意完全無視。議員の数があるからの高姿勢です。
数々の反民主主義的施策、数の力の横暴にはもうこりごりです。参議院選挙。安倍さんと安倍さんを支持する勢力に数をあたへてはなりません。

もう悔しい思いはしたくありません。

歯止めが必要（2019.7）

山口洋司　（狩場台）

「文句があるなら対案を出せ！」。与党・政権が言ういつもの決まり文句です。
「そりゃ、そうや」と思う人もいます。しかしこれはひとつの脅しです。批判封じの脅しです。対案なくとも間違っていればどんどん批判すべきです。批判のないところには民主主義は成りたちません。

先日の国会の党首討論を後で聞いたのですが、ちょっとがっかりでした。野党党首はみな政権の脅しにからめとられているとしかいいようがありませんでした。年金問題の対案を説明するだけで四苦八苦。当然です。30分や5分の短い時間で年金問題の熟した議論ができるはずがありません。
対案を出すより、年金問題でも出てきた、隠したり、なかったことにしたりする政権のどうしようもない体質を具体的に一問一答で追求していき、いかに今の政権がちゃらんぽらんであるかを浮き彫りにすべきだったと思います。
非常識なたった45分の党首討論はどう考えても、予算委員会を逃げ回る政権の抜け道でした。

政権・与党は今年に入ってすべて参院選に向けて動いています。元号を変えるプロセス、トランプさんの異常接待、イランへのパフォーマンス外遊、すべて保守的な空気をつくりあげるためです。選挙にマイナスになる森友・加計疑惑をなかったことにしてリセットしようとしているのです。安倍晋三さんが吉本コメディーの舞台に立って、テレビでつくり笑いをしたりするのを見ると寒気がします。
いつものように広告代理店を使ってマーケット調査もし、あまーい、心地よい自民党の見せかけの政策や広報の、悪魔のささやきがもうすでに聞こえてきています。ゾンビは静かににじりよってきています。とくに若い人たちが好きです。

今月の参議院選挙はほんとに大事です。なにかと口実をつけて軍事を強化していく危険な政権への歯止めが必要なんです。綱引きで引きずっていかれている綱をふんばって引き戻さなければならないのです。対案の脅しにまどわされている余裕などありません。
政権のつくる空気に惑わされたらえらい目にあいます。後悔はしたくありません。

日米安保の解消を（2019.8）

山口洋司　（狩場台）

もう、ここらでアメリカと手をきったらどうですか。
日米安保同盟の解消です。トランプさんは盛んに、不公平を口にします。アメリカがピンチになっても日本は一緒になって戦ってくれない、と。
安倍さんはへりくだってトランプさんに＜そんなの嫌よ＞と抱きつきます。

ヨーロッパの国々のように対等でないのが日米の同盟です。核の傘のもとアメリカの軍事戦略優先でどれだけ日本は被害をこうむってきたか、いつもアメリカの顔色を見て、国連の核禁止条約にさえ同意できません。
日米安保があるために安倍さんはトランプさんに言われるままです。イージス・アショアやF35戦闘機の爆買い、この間のG20サミットの時の日米会談ではトランプさんは安倍さんを目の前にして＜我々は日本による大量の米国製の武器購入について協議する＞と宣言したそうです。とめどもなくアメリカの言うままにエスカレートしていきます。イージス・アショアなんて北朝鮮からアメリカへ向かうミサイルを落とすのが第一の目的で、秋田、山口に設置するのはそのための適地だからといわれています。

日米安保を破棄するのは現実的でない、と反論があると思います。しかし考えて見てください、アメリカの基地があることがいちばん危険なことなのです。特に沖縄はアメリカのアジア・太平洋戦略の最大の拠点です。もし、ことが起きれば真っ先に狙われるのは基地がある日本です。このまま日米安保が続けば、いわゆる60年安保の闘いで杞憂したことが現実になってくるのです。アメリカと一緒になってつくり上げた“大義”を掲げて戦争に加担していくことになるのです。

トランプさんはいろんな思惑があって発信していることでしょうが、いい機会です。決して空論ではありません。アメリカの核の傘の下にいるのがあたりまえという思いにわたしたちはあまりにも毒されてきているのではないでしょうか。
今、いちど立ち止まりたいです。
日米安保を解消して、自衛隊は国土を防衛することと災害救助だけに徹し、戦争をしない、加担しない国である、とあらためて世界にたからかに宣言することこそが、いちばん安全な道ではないでしょうか。

神戸市、TRANS の腰くだけ　（2019.9）

～アートシンポジウム中止～

山口洋司　（狩場台）

生きものがみんなカンカラカンになって干上がってしまうような日々が続いた8月でしたが、久しぶりに暑さを吹き飛ばして大笑いすることがありました。
神戸市とTRANSというところが主催するアートシンポジウム「2019－2020年アートは異物を受け入れるのか」の企画が突然中止になったことです。
さきに中止になって波紋をひろげた名古屋の「あいちトリエンナーレ2019」の部分企画である「表現の不自由展・その後」の芸術監督津田大介さんがパネラーの一員になっているからということでした。

異物を受け入れるのを議論するもなにも、それ以前に“異物”を拒絶し、その前におののいているのです。仰々しくテーマを掲げてこのへなちょこぶりは何でありましょうかね。笑わずにはおれません。こんな主体にアートイベントを展開する資格はありません。
中止を決めた要因は、津田さんが来るとあいちの話ばっかりなってしまうから、ということですが、こんなときこそ表現の自由について議論をすべきなのです。しかし実際は、自民党と維新の市会だか県会だかの議員が、津田を変えろ！と激しくプレッシャーをかけたということです。これこそ許せないことです。憲法違反です。
税金が入っているから議員が口出しをするというのなら、TRANSは百歩ゆずって、補助をもらわない形になってでも中止すべきではありません。こんなタイトルを掲げた以上覚悟が必要です。

しかし笑ってばかりおれません。今後の表現の自由に大きな悪影響を与えます。あいち展の場合は、従軍慰安婦を表現したものや天皇を含む肖像画が燃える映像があるから、＜日本国民の心をふみにじるものだ＞と河村名古屋市長が抗議し、これがSNSで広がったのが発端でしたが、国民の心をだれが規定するのか、といいたくなります。
よほどの生理的に嫌悪をもよおすような残酷な表現は別にして、表現は自由であるべきです。憲法もちゃんと保証しています。
表現の自由をなしくずしにして奪おうということに対して、わたしたちは毅然と向き合っていかないとえらいことになります。民主主義の根幹です。

今回の神戸市とTRANSの対処はあまりにもお粗末です。なさけないです。
（上記写真は、筆者が元町「モトマチギャラリー」での企画展に出品中の1点「表現の不自由展・その後・その後ー」と題したはり絵。「美術館から作品消える社会　誰がした」は朝日新聞の見出し。編集委員）

メディア、ちゃんとして！（2019.10）

山口洋司　（狩場台）

今日から消費税が上がります。
すでにいろんなものが便乗して、ものの値段があがっています。家計直撃です。政府は社会保障に使うのが目的と言っていますが、怪しいものです。族議員らがうの目鷹の目で分捕ろうとねらっているんです。政権にだまされないよう野党とメディアは厳しく使い道の監視の目を光らせる義務があります。

9月には内閣の改造がありました。本当に代ってほしいのは当の安倍晋三さんですが、まあひどいものでした。森友疑惑の責任者の麻生さんが居残ったり、加計問題で安倍さんに忖度した疑惑のおともだち萩生田さんを引き入れたり、言うことを聞かないと電波を停止する、と問題発言をした高市さんらで、どう見ても国民に挑戦的です。安倍さんには反省というもののかけらもないのですね。
加えて、人権より皇室尊崇、憲法改正、軍事強化、愛国教育などを掲げる右派の日本会議の面々が居並びます。その先に憲法改悪の強行があります。

そのひどすぎる改造人事を国民の目から覆い隠すために保守層中心に若い人に人気があるといわれる小泉進次郎さんを入れました。
案の定、政権の狙いどおりにメディアは小泉さんに集中しました。小泉さんの一挙手一投足を追い、さかんに“期待”のメッセージをおくります。森友・加計問題などまるでなかったかのようです。
そのメディアの効果で、改造内閣の支持率は少し上がりました。政権の思惑どおりです。

民主主義がどう機能しているかどうかを視る原点が、今は具体的に森友・加計問題です。その犯罪行為の責任者が居座り、忖度した“加害者”が新たに入閣してくることはあってはならないのです。
わたしたちは安倍さんに馬鹿にされているのです。
メディアはまずそこをとり上げ発信していくのが筋というものです。もう少し権力監視の精神に立ち返ってほしいものです。

台風被害の千葉に入って小泉さんが被害者と握手するだけでは何も変わりません。その小泉さんを追うだけでは何も変わりません！（2019．9．23）

地に堕ちた文化庁（2019.11）

山口洋司　（狩場台）

容赦なく襲いかかる災害、無情です
その最中、首相主催の花見の宴に、例年の3倍の5700万の予算を決める政権―
あいちトリエンナーレの補助金7800万円を取り消す文化庁―
不可解なことが相変わらず続いています。

知名人を2万人ちかく集めて税金で花見をする宴会、安倍さんの求心力をたかめたいのなら自前でやればよい、無駄遣いの最たるものです。国民はシラけます。
文化庁もこのていたらく、あいちトリエンナーレ「表現の不自由展―その後」の再開はよかったのですが、文化庁はいったん決めた補助金を出さないという。中止がきまったとき、内容が気にくわないので補助金は精査して見直すと官房長官が発言、それを文化庁の役人が忖度、卑屈にも手続きの不備を後づけして取り消しを決めました。誰がみてもとって付けた言いわけです。
予算委員会で文化庁の宮田亮平長官が野党にただされると、私は取消の決済をしていない、と答弁。担当（役人）が決め審議官が認めたものであるとのこと。
どうなっているのですかね。こんな表現の自由がかかった大事なことが役人の官邸への忖度で簡単に決まってしまう。宮田さんは金工の作家でもあります。いちばん表現の自由に敏感であらねばならぬ人です。また文化庁は表現の自由を擁護する立場の役所です。
これでは国の文化行政は地に堕ちたものです。

安倍さんも文科相も今回のことでは文化庁がきめたことと逃げまわっています。役人の忖度がはばをきかせ、森友・加計問題と相変わらず相通じるところがります。
それにしてもいちばんひどかったのは、自ら実行委員会の会長代行をしておきながら文句をつけた河村名古屋市長でした。公人であることを忘れたのか、日本人の心をふみにじるな、と火に油をそそぎました。再開の折にも反対のプラカードを持っての座り込み。
権力を持った人が内容にこれだけはっきり介入したのは笑っておれませんが、マンガチックでもありました。

表現の自由は民主主義の命綱です。現代美術は従来の概念にゆさぶりをかけます。豊かな発想で想像力を刺激します。当然政権の思惑を越えます。
旧態依然の首相の花見という、貧弱な発想、現代美術で吹き飛ばして欲しいものです。

安倍さんの在職最長は悪夢（2019.12）

山口洋司　（狩場台）

＜わたしは一切、招待者の取りまとめ等には関わっていません＞が＜事務所から相談をうければ意見を言うこともあった＞と、突然変わる。変わらざるを得なくなる。

「桜を見る会」で安倍さんは野党に追及されると少しづつ発言を修正して繕っていく。森友・加計問題の時と同じ対応で、おかしくなってきます。
真相をしゃべらないで嘘ばっかりを並べ立てて公私混同をかさねていく姿に、もういいかげんにしてくれ、と言いたくもなります。

そんないい加減な安倍さんが11月20日で首相在職歴代最長になったと言い、保守層の人たちがめでたい、とはしゃいでいます。
何がめでたいものですか、その間どんなひどいことをやって来たか、消費税を2度上げ、社会保険料も上がり続けて格差も広がる、いいこと何もなしです。
極め付きは＜日本を取り戻せ＞と、戦争ができる集団的自衛権を可能にした新安保法制や特定秘密保護法、共謀罪など多くの世論の反対を押し切っての強行採決、さらに武器輸出禁止3原則を反故にしたり、国を愛する義務を加えて教育基本法を変えるなど右派政策をごり押ししてきました。限りなく日本丸という船を右へ右へと傾けていっています。
そしてそれに呼応しているのが北朝鮮の金正恩さんではないですか。ミサイルを次々に打ち上げて脅す。安倍さんはそれを口実に軍備強化に走る。渡りに船、と突っ走る。ひょっとして裏で金さんと手を結んでいるのではないか、と思いたくもなります。

安倍さんの国会軽視、公私混同も極めりで、その典型が森友・加計問題と今回の「桜を見る会」にはっきりと表れてきています。「桜を見る会」はまさしく安倍さんの選挙のためのファンクラブの集いです。それを税金を使ってぬけぬけとやる神経、そしてぬけぬけと言い逃れようとする神経、これが首相在職最長の実態です。
安倍さんの最長記録はわたしたちには、いかに政治的不幸が、政治的悪夢が続いてきたか、忌むべき記録なんです。

＜みんなはひとりのために＞のワンチーム（2020.1）

山口洋司　（狩場台）

ラグビーの観戦が好きで、年1、2回はユニバ競技場かノエビアスタジアムへ出かけます。厳しいルールのもとで激しくぶつかり合って、終わればノーサイド、きわめてメンタルな競技でもあります。見終わって、なんともスカッとします。

昨年の流行語大賞にそのラグビーの日本代表チームが掲げたスローガン＜ワン・チーム＞が選ばれました。“ひとりはみんなのために、みんなはひとりのために”という意味だそうです。
朝日新聞に「ラグビー学」という連載コラムがあり、元日本代表の平尾剛さんが述べていたのですが、大事なのは“みんなはひとりのために”の方。自立した個がお互いを認め合いながらひとつになっていくことで、集団の論理に従うことでなく、あくまでも個の尊重、と。それがスローガンがひとり歩きして、個より集団、滅私奉公という意味に矮小化されてしまわないか危惧するとも言っていました。
今にも政権が国家のためのワンチームになれ、と逆に捉えて利用しそうです。用心用心。

ラグビーは国籍を厳しくしないのも他のスポーツと違います。
したがって、外国チームとの試合でも観客が国旗を振り回し、顔に日の丸のワッペンをはり＜ニッポン！ニッポン！＞とはやしたてたりしません。選手も国旗を背にしたりするようなことはありません。
しかし昨年のワールドカップではそれが少し乱れました。ラグビーに初めて接する観客が増え、応援の仕方が乱れました。パブリックビューイングの場でもそうです。ラグビー人口が増えるのは喜ばしいことですが、試合そのものより国旗を掲げて国を全面にだすのには閉口します。素晴らしいプレーそのものに応援を、といいたくなります。

私は日の丸にいまだ強い違和感を持ちます。消えることなく持ち続けるでしょう。疎開先で出征する村のおっちゃんを日の丸の旗を振ってバンザイ！三唱を唱えて見送り、その人が戦死した記憶に重なってくるからなのです。

★

森友・加計問題、桜を見る会の疑惑はまだ終わっていません。

ワタシはシュレッター（2020.2）

山口洋司　（狩場台）

ワタシは悲しいシュレッター。
ワタシは証拠隠滅の責任をすべて被せられました。桜を見る会がうらめしい。
官僚のエライ人が安倍さんを庇うために、ワタシに飲み込ませたのです。ワタシはそのままかんで粉々にして吐き出しました。
そこには安倍さんの都合のわるいことがいっぱい書かれていたそうです。夫妻ともどもの公私混同、非社会勢力との関係など表にでると安倍政権がひっくりかえるらしいんです。そんなこと分からないものですから、国民に取り返しのつかないことをしてしまいました。申し分けありません。

ワタシがいただくにはちゃんとした手続きがいるのに、それさえしないでワタシに強引に押しつけたのです。よほど慌てふためいていたんでしょう、菅官房長官ははじめ適切に手続きした、と豪語していたのですが、ウソで逃げられないと分かって開き直りました。ワタシに法律違反して“誤飲”させたのを認めたのです。
それにしてもワタシを管理する部署のいちばんエライ人である菅さんの対応のシドロモドロさは何なんでしょうね。再調査すると言ってたのを急にやめたと言い出したり、首相枠の推薦をとりまとめた国会提出文書の内閣官房の部局名を削除してかくしたり、血迷っているとしか思えません。
ワタシはいつも内閣府の部屋の片隅で来るものを拒まず噛んで砕いているだけですが、今回急に脚光を浴びて、とまどっています。手を貸したうしろめたさに今は安倍さんの桜を見る会への対応をじっと見ています。

相変わらずあの人らしく、会の参加者の名簿が破棄されたので分からない、と逃げています。また突っ込まれると、プライバシーのことになるので答えられない、といいます。税金で公に招待した人のことは表に出て当然です。隠すのがおかしいと思いますね。
たかが桜を見る会、と見過ごしては大変です。このいい加減さが国を滅ぼすのです。ワタシは今回で懲り懲りしています。責任をなすりつけられたのです。ワタシに拒否する意思がないのが悲しいです。
あれ、昨日もないといっていた文書の一部が出てきています。でも再調査はしない、と安倍さんはシラをきります。よほど都合が悪いようですね。
（右上写真は筆者が企画展に出展したはり絵「春のシュレッター」）
編集委員から
こよなく元町高架下界隈を愛してきた山口さんの個展が開かれます。

元町高架下界隈展（油彩展）
山口洋司
■2020年2月27日（木）～3月3日（火）
　12:00～18:00（最終日は 17:00）
■自在空間　ArtStep
　神戸市中央区中山手通1－5－10
　東門街リカーマウンテン横3F
　TEL　　078（331）3134

笑いのネタがいっぱい（2020.3）
山口洋司　（狩場台）

＜鯛なんてほめてやるから付け上がる＞（鈴木雄二）
思わず吹き出しました。
先日の衆議院予算委員会で野党の辻元清美議員が質問の締めくくりに＜鯛は頭から腐る＞と安倍さんを批判し、すかざす翌日の朝日新聞の「朝日川柳」（西本空人選）に寄せられた一句です。
桜を見る会では安倍さんがあきれはてるような屁理屈な答弁を繰り返しています。おまけにひとりヤジまでとばしてのーてんきぶりです。それに対して笑いで一喝。
次の日にはさらに続きます。
＜ただ聞けば桜だ鯛だ目でたやな＞（遠藤昭）
＜ヤジだけははぐらかさない律義者＞（渡部米助）
＜人格に惹かれた総理もいた昔＞（山本武夫）
日をおいて＜頭からより口からも腐りそう＞（佐藤国喜）
＜降りかかる火の粉を躱（かわ）す二枚舌＞（桑原清）
川柳だけでなく、同じ朝日の「かたえくぼ」という囲みの風刺スケッチにも安倍さんを揶揄する笑いが満載です。

笑いは権力を痛撃する強力な武器です。桜を見る会の、会そのものや不正を突っ込まれてあたふたとする安倍さんや菅官房長官、官僚のふるまい、どれを取っても喜劇です。かってロッキード事件の時、証人喚問された人たちが＜記憶にございません＞を連発し、それが流行語になり、それを

皮肉ったレコードが自民党の圧力で潰されたことがありました。権力にとって、笑われそれが蔓延していくことが何をおいても怖いことなんです。

一般の投稿者の諧謔精神のはつらつさに比べて、笑いの芸を届けるプロはどうも鈍感に見えます。落語のマクラぐらいにちょっとふれるぐらいで、漫才にいたっては関係者に聞いたところではほとんど無縁、取り上げられていないようです。ことに漫才にとっての格好の材料なのにもったいないことです。
豊富なネタの畑、今を笑いにして届けるのがいのちの漫才、漫才はもっと今を生きて、投稿者の一句を越えて、生き生き見るものの感性に飛びこんできてほしいものです。

安倍さんNO！（2020.4）

山口洋司　（狩場台）

安倍さんの総理就任が7年に及び歴代最長だといいます。
こんな、考えられないことがどうして続くのか、いくつか考えられます。
ひとつは野党が少数なことと、まとまっていないこと。二つ目は制度の問題です。小選挙区制であるため自民党も候補者がひとりにしぼられ、そのひとりになるため、安倍さんに異論をはさむことができないからです。
中選挙区だった時は自民党内で派閥が競い合い複数の候補を擁立し、まだ総理への異論も見られました。しかし今は、すべてのことが官邸に集約され、候補者にしてもらうため安倍さんに右へ並へになります。異論が閉ざされているのです。これまでなら公文書改竄や自衛隊の日報隠蔽問題、森友・加計問題など、あれだけ野党に突っ込まれたら党内でも見切りをつけられ総理が交代しているほどのことでした。

三つめは安倍さんが恥ということを感知しない人だからです。
「桜を見る会」疑惑では政治資金法違反を逃れるため、自らの後援会の夕食会を主宰して自らが中心であるにもかかわらず、その会に足を踏み入れただけで関わってない、と公然と国会で言い逃れ、誰が聞いてもおかしいことを平気で言い通す、恥ということを全く感じない特異な人なのです。＜募っているが募集はしていない＞と国会での詭弁もでてくる、こんないいぐさ、常人なら恥ずかしくて耐えられないはずです。自ら身を引きます。安倍さんは恥を知覚しないから平気で長続きできる。

こんな安倍さんに対して、各メディアのアンケートでは安倍さんを支持しない人の理由に、＜人柄が信用できない＞というのがトップです。

政治は信頼の上に成り立ちます。それを支えるのがことばです。ことばが命です。なのにことばがなっていない、たらたらと論点をはずして屁理屈。果ては軽々と解釈変更。
検事長の定年延長、桜を見る会、長きにわたってひっきりなしに続く疑惑、今、国家の底がぬけ、社会もコロナで崩れかけています。まさに非常事態です。そしてその間隙に人権を制約するアブナイ法が成立しています。
今、言えるのは安倍さんにだけは非常事態を委ねたくありません。何に利用されるか、信頼できないからです。

銃やミサイルでウイルスは死なない（2020.5）

山口洋司　（狩場台）

コロナウイルス禍で地下鉄で街にでることを自粛している日々です。もっぱら近隣を歩きます。20分も行けば農業公園、秋葉神社、福谷の集落です。頭を垂れた雪柳の白い花びらがほろほろ落ちて地面を染めます。枯草の間から黄緑の新芽が顔をのぞかせます。すべての命が蠢動してくる大地。春の陽差しをいっぱい浴びます。

黙々と歩きます。見上げれば無数の電線が青い空をよぎり、電柱には蛇のようにどくろを巻く物体が覆いかぶさります。まるで怪鳥のようです。
ふと思います。AIやIPS細胞、遺伝子組み換え、科学がとめどもなく進んできている今、一片のウイルスに世界が翻弄されているこの不条理、2メートル離れて並べ、手すりを持つな、国からマスク2枚の配給―、悲劇がまるで喜劇の様相です。
どこかの国でこんなことも言っていました。多分アメリカだったと思います。外出の自粛の指示のなかで、但し、余命一年内の人は除く、というのです。どういうことなんですかね。余命を制限された人は感染されて死んでもいいと見放すのか、せめて残された日々を制限なしで自由に、との思いやりなのか。制限された人が感染して人に染すこともあるのに―。分けのわからない不思議な条件です。

銃やミサイルでウイルスは死にません。不死身のウイルスの前で防衛費過去最多、5兆円越えの今年度予算がどさくさの中、通っています。アメリカから買わされるイージスアショア、F35戦闘機―に加えて高額空中給油輸送機、攻撃戦闘機を搭載する護衛艦、「いずも」の莫大な改修費、安倍政権は軍事大国に向けてひた走ります。
コロナで緊急非常事態宣言を発した政権です。要請だけでなく、まずは安倍さんが自らこの事態に発想を変えることが大事です。従来の考えを変えて事の重大さにのぞむのが緊急事態です。莫大な軍事費を組み替えてコロナ対策にまわすべきです。

一律10万円支給の予算も赤児国債を積み上げて、という安易な考えでなく、必要以上に膨らんだ軍事費を見直し、それをまずは財源にあてるべきです。犬を抱いてくつろいでいる場合ではありません。銃やミサイルより生活といのちです。

うららかな春の野、うぐいすが空気を引き裂きます。
森友、加計、桜を見る会、黒川高検検事の定年延長問題はまだ終わっていません。

政権に、与党に緊急事態宣言を（2020.6）

山口洋司　（狩場台）

「法の解釈を変えました」
野党に黒川検事長の定年延長を問われての国会答弁です。この一言が安倍晋三さんのすべてを物語っています。「私が法律である」ということです。
なんということを、と怒るのを通り越して、呆然としていたら、元検事総長らロッキード事件で田中角栄元首相を逮捕、起訴した検察 OB らが政府に異議を申し立て、「フランスに絶対法制を打ち立て君臨したルイ14世の“朕（ちん）は国家である”という言葉をほうふつとさせる」と国家の私物化を批判しました。この元検事長らの異例の行動に喝采でした。
検察庁法案は世論の猛反対を受けて、今国会では引っ込めざるを得ませんでしたが撤回したわけではありません。次の国会には再提出するのは目にみえています。“朕はわが道をゆく”とばかりに牙を研いで満を持します。

法の解釈を勝手に軽々と変える。そういえば安保改正の時もそうでした。これまで憲法が禁じてきた集団的自衛権を、あっさりと解釈を変えて、それに同意してくれる法制局長官の頭をすげかえて意を通しました。その時も元法制局長官らが強く反対の声をあげたのですが、完全無視でした。森友・加計問題、検事長定年延長問題、みんな、根は一緒です。法律なぞ自分で解釈したらよい。問題視されると，言い分けたらたら、逃げ回って最後は数の力で封殺する。

いったいどうなっているのでしょうか。国会が立法府が国民が馬鹿にされています。国家の底が抜け、バケツの水がじゃじゃ漏れ状態です。コロナもそうですが国家の危機です。検事長の定年延長問題が三権分立を揺るがす危険をはらんでいるのと同時に今の国会のありようが危機です。昨年、野党が国会閉会中に予算委員会の緊急招集を憲法で認める人数を集めて請求しても数の力で無視です。

「法の解釈を変えました」には公明党を含む与党も怒らねばなりません。しかし、怒るどころか擁護です。まるで戦時中の翼賛国会のようになっています。立法府、国会は死に体です。重篤です。国民は今、政権に、与党に緊急事態宣言を出したいほどです。「新しい日常」以前の問題です。「鯛は頭から腐る」、ならば腐った頭は切り落とさねば。

＜こんな人たち＞が法務大臣（2020.7）

山口洋司　（狩場台）

「法の解釈を変えました」、まるで＜われ、が法律＞のごとくの安倍晋三さん。
法を軽く扱う安倍さんを象徴するのが法務大臣の人事です。
法務大臣は、以前は内閣の筆頭で、政治経験豊富なベテランがなり、内閣の重責のような存在でした。法が適正に施行されているのか、のお目付役です。捜査にたいしてそれを停止させる指揮権という大きな政治的権限も持っています。法を破って非道を働いた人に死刑を執行する、人を殺す権限も持っています。法務大臣は大きな権限を持ち法治国家の要です。
ところが安倍政権になってからの法務大臣は軽量級がずらり、そればかりか、自ら法律をふみにじって問題になる人続出です。

多額の金で議席を買収した容疑で先日逮捕された河井克行さんは新しいところですが、さかのぼってはウチワを配って公職選挙法違反に問われて辞任した松島みどりさん、頼りなさではピカいちの金田年勝さん、自らの管轄の共謀罪法の内容の理解ができず、国会答弁で醜態をさらし、笑いものになったのは記憶に新しいところです。
賭けマージャンをやっていた前黒川高検検事長の処分問題で迷答弁を続けて、舞い上がっているのは森雅子さん。安倍さんの答弁とくいちがうと、うそをついてでも合わせようとする。涙ぐましいその迷走ぶりが見苦しい。法務大臣としてあるまじきです。そういえば、あの悪法、特定秘密保護法案をしどろもどろの答弁をしてごり押しした担当大臣もこの森さんでした。
在特会との深い関わりが問題になった山谷えり子さん、今後の国際情勢によっては核も検討すべきだ（毎日新聞アンケート）、と表明した山下貴司さん、法相就任後靖国参拝した岩城光英さん―、問題の人は尽きません。＜こんな人たち＞が安倍政権の法務大臣の顔ぶれなのです。

今回の、法務大臣だった人が逮捕されるというのはきわめて異例なことです。安倍さんの法務大臣職軽視のつけがきています。

「桜を見る会」で公職選挙法の疑惑に問われてまだ追及されている安倍さん、同じ穴のむじななのかもしれませんが、責任を痛感していると、いうなら即刻辞職をするべきです。
いつかの朝日新聞の朝日川柳です。＜正直を嘘で訂正する法相＞（三神玲子）
施政者は国民から見事に嗤われているのです。

敵基地攻撃とは戦争するということ　（2020.8）

山口洋司　（狩場台）

敵基地攻撃という言葉が飛び交わっています。安倍さんは前向きに議論していきたい、と前のめりになって雰囲気づくりをします。

＜敵基地攻撃＞、聞くだけでぞっとする言葉です。自民党の国防議員からさえもあまりにどぎついんで＜自衛反撃能力＞、と言い変えたらどうか、と提案しているそうです。
ごまかして言い変えたら済む問題ではありません。敵基地攻撃するということは戦争を始めるということです。情報分析して“敵”が武力攻撃に着手しているとみなしたら先制攻撃をして相手基地を叩こうというものです。相手はだまってはいません。
なんとおぞましいことか、そうなった事態を想像力をはたらかせて考えて見てください。ゲームの世界ではありません。戦争です。戦争を放棄して専守防衛に徹する憲法を完全にないがしろにするものです。

先日麻生副総理がコロナ禍の最中、政治資金パーティを開き「今の憲法が緊急事態に対応できるのか、憲法改正に向けた議論をしっかりやるべきだ」といい、安倍さんも「憲法改正への挑戦を自民党総裁として任期中に成し遂げたい」とビデオメッセージで呼応しました。維新の会の幹事長も「コロナの問題は緊急事態条項を考える、まさしくいいお手本」と政権をヨイショして憲法改悪を叫びます。

すきあれば憲法をないがしろにする人たちは、きっかけをつかんで憲法改正を合唱する。今、なぜ憲法改正なのか。今はコロナに全力をあげて対応すべき時です。なのに安倍さんは西村さんに対応を丸投げしたままで、国会の閉会中委員会に出てくることもなく、ちぐはぐなことばかりをやっている。麻生さんは森友問題の文書改竄で自殺した公務員の遺族の涙の訴えを無視する。施政者の言動は民意とはあまりにもかけはなれています。

そんな痩せ衰えた土壌で軽々しく敵基地攻撃を囃したてる。なんと恐ろしいことか。わたしたちはもっとこの＜敵基地攻撃＞に敏感に声をあげていかねば後悔するのではないでしょうか。（イラストは「産経ニュース」から）

憲法より国歌を変えたら―（2020.9）

山口洋司　（狩場台）

大相撲7月場所で照ノ富士が優勝しました。
以前から応援していた力士です。けがと病気で大関から序二段にまで転落していたのが気力で蘇ってきたのです。優勝の瞬間思わず手をたたきました。
相撲は鍛えた大の男が体をぶつけあって一瞬のうちに勝負が決まるところに醍醐味があります。

一方、相撲界は暴力沙汰が続いたり、きわめて保守的な世界です。またそれを取り上げるメディアも相撲になるととくに保守的です。こぞって強烈なナショナリストになります。“日本人力士”を強調して“日本人大関誕生”、などと叫び、ことさら日本人を強調するのは目にあまるほどです。特にNHKはひどいものです。モンゴル力士にうらみがあるのではないか、と思わせるほど“日本”にこだわります。

7月場所の表彰式では冒頭が君が代斉唱です。場内マイクがコロナ禍のもと＜国歌斉唱、声を出さずに心で歌ってください＞と告げると観客が一斉に立ち上がります。カメラがフルショットの時、誰か立たない人はいないいか、と目を釘ずけにして見ていたら、居た居た、ひとり居た。Tシャツを着た中年ぐらいの男性、たったひとりでした。もしボクがこの場にいたらどうしただろう、もちろん立たない。あまりにも昔ですがラグビーの試合でだったと思います、ユニバスタジアムで、起立要請に従わなかったのを思い出しています。

＜君が代は、千代に、八千代にさざれ石の、巌となりて、苔のむすまで―＞これを心で歌え、という。国民ひとりひとりの代でなく君の代、あきらかにずれている。
国家を必要とするならば、心からひとりひとりの生きていることを喜べる歓喜と希望の歌であって欲しいと思います。

憲法を現実に合わないからなにがなんでも自分の在任中に変える、と叫ぶ安倍さん、そんなことより、この時代ばなれしている国歌を変えるのが先ではないですか。

失政を引き継ぐ新政権（2020.10）

山口洋司　（狩場台）

やっと安倍晋三さんが辞任しました。
5年あまりこのホームページで、安倍さん退陣せよ、の趣旨でずっと書いてきましたが、やっと、という思いです。
全面的に病気のため、と本人は言い、メディアも同調しますが、どう考えても追い込まれ辞任です。森友・加計問題、「桜を見る会」、検事長延長問題、国会無視などで完全に国民の信頼をなくした上にコロナ対策で迷走が決定的になり、内閣の支持率も大きく下がり、行き詰っての辞任です。病気もひとつの要素かもしれませんが全面的ではありません。どうしようもない大きな病気にかかっていたのはむしろ安倍政権です。辞任は第一次政権の時の投げ出し辞任と変わりありません。

7年あまりの安倍政権は日米同盟の強化を旗印に対等というよりアメリカに従属する政権でした。アメリカのプレッシャーで憲法の解釈を強引に変え、集団的自衛権を容認して新安保法制を成立させたのが一番の国民に対する背信行為です。高価な武器もトランプさんに爆買させられもしました。
アメリカの流れにならって資本主義が行きつくところまでいっての新自由主義的政策も推進されました。雇用の規制緩和で労働者派遣法を企業の都合のよいように改正、正社員を減らしてパート化する。効率だけがものさしの社会、富めるものはますます富み、貧富の差がとどまることなく拡大していくという政治です。
アメリカ、大企業にほいほい、対外、国内、このふたつが安倍政治の悪性の象徴です。

新しい菅さんは安倍政権の継承がスローガン。何たることですか。政策や政治姿勢が批判され行き詰まったその失政を引き継ぐという、国民をばかにしていませんか。
官房長官当時は記者会見で＜それは関係ありません＞と、批判にシャッターをガシャンと下ろしてきた冷酷な人です。公金を使っての不倫スキャンダルまみれの安倍さんの和泉補佐官をそのままにしたり、官房長官はじめ安倍さんのお友達や縁故を丸抱えにしたままの新政権です。携帯電話の通信料を大幅に下げる。と耳障りのよいことにだまされてはなりません。

早々から憲法改正に挑戦していくと公言しています。森友・加計、「桜を見る会」は再調査をしないと言います。初めから国民に背を向ける内閣に私たちは今まで以上に監視が必要です。

異なる意見排除の菅さん（2020.11）

山口洋司　（狩場台）

日本学術会議の新委員6人が菅総理に任命されませんでした。
菅さんははじめ、たかをくくっていましたが、世論の関心がたかまってくると問題のすりかえにやっきになっています。
はぐらかす、異論をみとめない、菅さんの本性がまる出しになってきています。

わたしたちは学術会議が提出した新委員の105人のうち6人がなぜ認められなかったのかその理由を聞きたいのです、ただそれだけです。簡単なことです。
6人は新安保法案や共謀罪など政府の方針に異議をとなえてきました。誰がみても理由ははっきりしています。しかし、菅さんはそれを言ってはおしまい、だから説明ができないのです。記者に問われると、総合的、俯瞰的見解からという。これほど抽象的な言い方は人をバカにしています。内閣府の官僚も口をそろえて答弁マシーンのように繰り返す。まんがチックで思わず吹き出しました。

先日学術会議の梶田会長が菅さんに会いました。どんな話になるのか期待をしました。しかし、要望書を渡しただけで6人の問題は話さず、今後のありかたの話になったという。完全に菅さんの問題をそらせるペースに乗せられてがっかりでした。学問の自由がゆさぶられている時、これでいいのか、学術会議の本気度合が問われます。

世論の関心がたかまり、だんだんボロがでてきます。
学術会議から出された105人の名簿を菅さんは見ていなく、副官房長官が99人に削減したのを見て任命したという。野党が国会で官房副長官に参考人として話を聞きたいというと、事務方の副官房長官が参考人として国会に出た前例がないといい、拒否する。前例を踏襲しないというのが菅さんの大方針だったはず、支離滅裂です。

学術会議には金を出しているから口をはさむのは当然、と話をそらせて開き直る菅さん、傲慢です。異なる意見を強引に排除する姿勢は官房長官時代から変わっていません。記者会見では批判の記者の質問を妨げ規制し、意見が合わない官僚は異動させると、豪語しました。異なる意見を丁寧に聞くことから民主主義ははじまるのです。

こんな総理に国政をまかせてよいのか、先が思いやられます。

科学は軍事に協力を！　ホンネが出た（2021.1）

山口洋司　（狩場台）

昨年は桜にはじまり桜で暮れた一年でした。
そこへ突然春の嵐のように強烈に割り込んできたのが学術会議問題でした。

菅政権は学者に政策に反対する人がいては困ると言わんばかりに学術会議の委員推薦メンバーから6人をはずして任命しませんでした。今回だけでなく、安倍さんの時も推薦名簿に異をとなえ説明を拒否していたことが明るみになっております。
政権を持つとともかく批判者を周りから排除したくなるようです。東京都知事の小池さんもかつて批判者排除を振りかざし権勢を奮おうとしましたが、さんざんな目にあったのが記憶に新しいところです。
権力を握るとあらゆる権限を自分のものにしたくなる誘惑にかられる。今まで問題なかったものをひとつづつもぎとって自分の権限を増やしていく、周りはだんだんものが言えなくなっていく、批判者、異議をもつ人は誰ひとり居なくなり気がつけば忖度してくれる人だけ、行き着くところが裸の王様さまです。

今回の学術会議問題も権力の横暴です。俯瞰的総合的に判断した、人事に関することは説明できない、などと強弁し、聞く耳を持たず押し切る。それどころか菅さんは問題をどんどんすりかえ、学術会議の組織への不満にもっていく。あげく任命拒否したことで結果的に学術会議の見えないところの問題点がはっきりした、と開き直っています。

その調子に乗って聞き捨てならないことがあらたに出てきました。担当の井上大臣が梶田学術会議会長にこう伝えたそうです。「研究成果が民と同時に軍事面にも使えるように検討するように」と。ホンネがでました。学術会議は戦時中科学が軍事体制に組み込まれた反省から「戦争を目的とする科学の研究は絶対に行わない」という声明を出して厳しく歯止めをかけているのです。誰かが言っていましたがまさしく火事場泥棒です。

これは見過ごすことができません。このメッセージで政権は世論の動向を見ているのです。こういうことのためにも政権の政策に異議をとなえた6人の排除が必要だったのでしょう。ひとつひとつ大事にしてきたことが政権によって切り崩されていきます。
学術会議もわたしたちも黙ってはいられません。

政党交付金これでよいのか（2021.2）

山口洋司　（狩場台）

今年も政党交付金を共産党を除く各政党が申請し、申請どおり承認される予定です。
総額、昨年とほぼ同じ317億7300万円だそうです。
たいそうな額です。すべて税金です。日本の人口全員が250円を政党に支払うことになっています。自民党だけでも170億円超えです。もちろん支持しない政党にも渡ります。
交付金の目的は、政治活動の健全な発展に寄与するということです。違法な企業献金、団体献金それに賄賂などを防ぎ、不正のない民主政治を発展させていくという主旨です。
政治家はほうっておいたら悪いことをするという性悪説に立っての考えで議員が自ら立案した政策でもあります。

にもかかわらず、昨年は政治家のカネにまつわる不正がたてつづけに起きています。しかも現職の大臣が率先しています。
西川元農相、吉川元農相、河井元法相夫妻、秋元元内閣府副大臣など目にあまります。
河井元法相夫妻の選挙買収問題では自民党から選挙資金として破格の1億5千万円が出ており、その中の多くは政党交付金だという疑惑です。案里夫人は先日の裁判で有罪判決をいい渡されました。税金が選挙の買収資金になっているということになります。

これは氷山の一角だと思います。政党交付金で恩恵をうけていても、違法の多額の企業献金が巧妙にまかりとおったり、政治とカネの問題が絶えていないのが現実です。
自らが立案した制度が守られないようならば、制度のありようをあらためて廃止も含めて考えていくことが当然ではないでしょうか。
たとえ続けるとしても、主旨に反した政党には罰として半額にするとか、ゼロにするなど具体策が必要です。

コロナの災難に直面して物入りの今、政治家自ら身を切って考え直して欲しいものです。

政治家と官僚（2021.4）

山口洋司　（狩場台）

総務省の不祥事で今また官僚が表沙汰になっています。
森友・加計問題で官僚の忖度が政治を揺るがせて問題になったのはほんこの間のこと。
どうも政治が堕落していくと官僚も緊張感を失い負けじと堕落していくようです。本来官僚は国の政策づくりを担い、国民への奉仕者であることに、プライドをもった専門家の集団の筈ですが、わが身かわいいが、いちばん大事なことになってきているようです。

官僚はイギリスのように政治的には公平、中立であるべきです。その上で政権に忖度せずプロとしての意見をちゃんと言うのがまっとうなあり方だと思います。政権の擁護に明け暮れるのはもってのほかです。しかしわが身かわいさからか政権にすり寄り忖度する。
その最悪の例が森友問題で、安倍さんが私や妻が関与していれば政治家を辞める、と言ったことからその言に合わせようと、嘘の答弁を繰り返し公文書改ざんに走った佐川理財局長です。加計問題で総理の意向だと文科省に圧力をかけて総理の友人の加計さんに便宜をはかった官邸官僚です。そして今回の、総務省官僚の許認可を持つ相手との問題意識をもたずの度重なる会食です。
高級官僚の堕落、国民の方を向いているとは到底思えません。
一方、＜私は国民に雇われている＞と公文書改ざんにあらがい、身を処した赤木さんのような財務官僚もいます。赤木さんは改ざんにいたる経過を記したファイルを残しているそうですが、財務省は隠蔽しています。不思議なのはこのことに周囲の官僚が誰ひとり怒りの声を上げないことです。わが身かわいさからの沈黙は犯罪に加担していることになります。

先日、株主比率で外国人の%が規定を超え法律違反していたことで東北新社が総務省に報告したのに、当の総務官僚が＜記憶にございません＞と何度も繰り返し、顰しゅくを買いましたが、誰が聞いてもそんなはずがないことを押し通す。政治家の言い逃れの方便をそのまま真似たようで滑稽でさえありました。おまけに総務大臣が答弁に立つその総務官僚に、こそっと記憶にないと言え、と言わんばかりの指示をしたおまけがついていました。

今、政治家、官僚の実態はこんなのです。堕落もいいところです。あまりにもおそまつです。野党が問題点を明らかにしていきますが、成果が目に見えて上がらず、達成感がいまひとつ伝わらないので、支持率が上がらない。いいかげんなことがはびこり、コロナを別にしても深い閉塞状況に、春だというのに気分が塞がる日々です。

8 月15日　（2021.8）

山口洋司　（狩場台）

間もなく8月15日です。無謀な戦争に敗れて71年になります。
あの日、国民学校の2年生でした。京都から山陰線で2時間の和知という山村に疎開して1年あまりだと思います。すぐに近所の子供たちに溶けあって真っ黒になって山野をかけまわっていました。ぼくには敗戦の日の記憶がほとんどありません。天皇の玉音放送も覚えていないので、聞いていません。その日、大人たちがどうしていたかも覚えていません。戦争の状況にも特に関心なく遊び呆ける鈍（どん）な少年でした。

作家の田辺聖子さんの18歳の日記が出てきたというので「文芸春秋」の7月号に掲載されています。敗戦の8月15日をはさんで3年間です。
空襲の最中、火の海の大阪の街を歩いて帰ってみると、我が家も全焼、代々の家をなくしたうえ、いちばん多感な青春のすべてを祖国に捧げた、と記し、一億必死の時がきたら刺し違えて死んでもよいと思いつめているのに、全面降伏するとは何事か、謹んで大君（天皇）にお詫び申し上げる、といったようなことが冷静に綴られています。まぎれもなく軍国少女です。
あの聡明な田辺さんをして完全にマインドコンロトールされてしまったのです。原爆を落としたアメリカは空からビラをまき、「諸君、早く陛下に無益な戦争はやめるよう請願せよ」と書かれているのですが、日記は、陛下という尊貴な文字を安直に使っていることに憤慨し、ビラを地にたたきつけたく思った、と怒りをぶちまけます。
しかしそんな中にも田辺少女は勉強をしたい、小説家になりたい思いをふくらませます。

ぼくの疎開先でもビラがまかれるという噂があり、絶対に拾って見てはいけない、という村のお触れが出されました。学校の校庭がさつまいもの畑になったり、何かというと並ばされ、ちょっとふざけただけで＜天皇陛下に申し訳ない＞と殴ることが生き甲斐のような先生もいたりして学校へ行くのが怖くて、ひとつ年下の弟を連れて途中の穴ぐらに学校がすむまで潜んでいたりしたことが8月15日がくると思い出されます。

日常のことごとく破壊した戦争でしたが、幸いにしてぼくは家も焼かれず身のまわりに戦死者もなくの8月15日でした。田辺聖子さんの日記は空襲、敗戦、戦後の食糧不足などの日常を通じて戦争の無残さを考えさせられます。
（山口さんから絵画展「時空・港神戸」の案内ハガキをいただきました。山口さんも 7,8 点出展されるそうです。編集委員）

改憲阻止今年は正念場（2022.1）

山口洋司（狩場台）

〈敵基地攻撃能力保持〉、聞くだけでぞっとする。
イコール、戦争をする、と言うことです。戦後、いちばんおぞましく不快なことばといってもいいと思います。
誰れが、どうGOの判断をするのか、あらたな真珠湾攻撃になります。

前向きに検討する、と岸田新総理は踏み込んでいます。同時に改憲も自分の内閣でめどをつけると云います。自民党の中では岸田さんはハト派の一派ですが総裁選の決戦投票で安倍元総理ら極端な右派の支援で総理になったのでがんじがらめです。安倍さんの傀儡政権でもあります。
敵基地攻撃―、改憲はまさしく安倍さんのやり残した残骸です。

改憲を阻止する運動は今年、正念場です。自民党より右をいく維新の会が夏の参議院選挙と同時に国民投票をやれ、とせっつきます。国民民主党も議論に前のめりになっています。そして立憲民主党までもが追求型より提案型、と政権に対する姿勢の手綱をゆるめていっているように見えます。追求をきちんとやってはじめて、提案と思うのですがー。
いずれにせよ自民党はまず自衛隊明記や緊急事態条項など改憲4項目を突破口にして、一気に岸田政権のもとで国民投票にもっていこうと企んでいます。
緊急事態条項ひとつにしても想像してみて下さい。もし一時的にしても政権にすべての権限を預けてしまったら、あの60年安保の国会前や全国各地で広がった抗議活動などは自衛隊が圧殺、鎮圧することになりかねません、香港の二の舞です。

緊急事態条項は現在の法律でも対応できるし、自衛隊もわざわざ明記しなくっても既に浸透しています。自民党の本音は武器の行使と国の交戦権を認めない9条が邪魔なんです。それより自民党は改憲よりまず憲法を守ることです。国会の開催を要請されて、それを無視するようなことはあってはならないことです。

風雲急を告げる、この年です。阻止のためみんなが何かやらねばと思います。ぼくは小さなことですがハガキや手紙の用件の末尾に〈憲法9条が危ない、守りたいものです〉と書き添えるようにしています。

年賀状には平然と大きな抵抗感もなく発せられている〈敵基地攻撃能力保持〉への不快感を記しました。
ささやかな発信ですが一

ふたたび「敵基地攻撃能力」のこと（2022.2）

山口洋司（狩場台）

前回につづいて、聞くだけでおぞましい「敵基地攻撃能力保持」のことです。
実際に行使して“敵基地”へ先制攻撃したらその局面だけでなく戦争の始まりです。この前の戦争の繰り返しです。壊滅的な犠牲をはらって反省をしたのがなんだったのか。
攻撃能力を保持すること自体が憲法違反です。先の安保法制改定と並んで戦後の日本の国のありかたを根本から変えてしまう逆戻り事態です。

今年に入って早々に日米の2プラス2が開かれました。日米の外交と防衛の最高責任者の話し合いです。そこで林芳正外務大臣が敵基地攻撃能力保持の検討と軍事力強化を約束しました。
“敵基地攻撃能力”はかなり前からアメリカに急がされていたようです。
推測するに、アメリカは日本に基地攻撃を実際に行使させ、紛争状態を作り出そうとしているのではないか、アメリカには軍需産業を背後にもち新自由主義を推し進める勢力が大きな力を持っています。
核保有国がこの前に出した〈核戦争には勝者はいない〉という声明にもアメリカの議会では賛否両論、もめたといいます。世界で紛争状況を敢えてつくりだしてきた過去のあるアメリカ、紛争状況が世界にないと国がもたないアメリカ、日本にあらたな紛争状況をつくりだそうとしていても不思議ではありません。

沖縄の基地ではコロナが急増して、2プラス2の会合以前から玉城知事がアメリカで基地外への外出禁止を強く要請していました。にもかかわらず、会合では善処する、と言うだけ。感染急増で急を要することゆえ、この会合では「こうします」、と具体的に対処方針を出すべきですがそれがなされず、何日もおいてからやっと外出禁止令が出る始末、まともに対応しているとは到底思えません。
日本は沖縄基地の“おもいやり予算”をアメリカの強い要請に応えて今回、年100億近く増額して2110億としました。5年で1兆5511億となり、前5年と比べて10%以上も増えています。
名称もおもいやりから同盟強靭化予算と称し膨大な予算です。

「敵基地攻撃能力の保持」、アメリカと一体になって中国などへの牽引、挑発をこれ以上続けていくのは危険なことです。アメリカの思惑に引きずられていっている実情が怖いです。ゲームをするような“攻撃感覚”でなく、「敵基地攻撃能力保持」の意味するところを冷静に考えたいと思います。

〈核共有〉議論の必要なし（2022.4）

山口洋司（狩場台）

ロシアのウクライナ侵攻のどさくさに紛れて恐ろしい言葉が飛び交っています。
〈核共有〉
安倍晋三さんや維新の議員たちがこの時とばかりにと叫んでいます。維新の松井さんは非核三原則も見直せ、とまで踏込んだのですが世間の反発を受けて三原則は撤回しました。
しかし安倍さんも松井さんも〈核共有〉を議論せよ、と執拗です。風あたりが強いと議論して何が悪い、と開き直っています。また国民民主党の玉木党首まで非核三原則の“持ち込ませず”の妥当性について議論すべき、と血迷っています。

安保法制にしろ機密保護法にしろ悪法ははじめは激しい反対の中で、ともかく議論をしよう、議論をして何が悪い、ということから始まり強行に実現させていったのです。議論と強行はイコールでした。
〈核共有〉はアメリカの核を日本に配備し、有事に使えるようにする、つまり核を持ち込むということです。核を持つということです。核禁止条約が批准され、世界が核を廃絶しようと進んでいることに逆行する行動です。抑止力として核を持とうということは北朝鮮と同じレベルです。
さすがに岸田総理はその議論はしない、と否定していますが安倍さんたち右派は岸田総理にプレッシャーをかけていくことは目に見えています。

さんざん悪法を成立させ、悪事を重ね何ひとつ疑惑が晴れていない安倍さんはもう口出しする資格はありません。権力の座からも降りてなお〈核共有〉を叫ぶ姿を見るとあわれにさえ見えます。
自民党より右派の維新。その維新の松井さんは、核を持っている国が戦争を仕掛けている、昭和のままの価値観で令和もいくのか、だから〈核共有〉を、と寒けのするようなことを平気で言う。

〈核共有〉、ウクライナの戦争に乗じた思いつきのような危険な発想にのってはならないと思います。議論の必要もありません。
わが国は何があろうと非核三原則、持たず・作らず・持ち込ませず、これ国是です。

限りなき軍備増強、これでいいのか（2022.12）

山口洋司（狩場台）

どこまでいけば気がすむのか、とめどもない右傾化。
軍靴の高い響きが聞こえてきます。
安倍さんが集団的自衛権を認めた安保法制関連法を強引に成立させて、憲法9条をないがしろにしてから右傾化は急速に進み、とどまるところがありません。
岸田総理がアメリカへ行ってバイデン大統領に抜本的に軍事を強化すると約束し拍車がかかります。自民党右派はもちろん維新や国民民主党の議員たちもが堰をきったように軍事費強化を叫びだします。
折しも北朝鮮が米韓軍事訓練に抗してミサイルを激しく打ち込み、政府がJアラートで危機感をたかめます。台湾有事では日本が呑み込まれてしまうと吹聴もします。
多くのメディアがこぞってそれらに応じ危機感を煽ります。ウクライナを重ね合わせて今にも日本が侵略されんばかりの論調が拡散しています。心配なことはそんな空気に煽られて世論も軍事強化支持に振れているのです。

政府は12月に防衛大綱等を改定して、敵基地攻撃能力保持の容認を図っています。敵基地攻撃能力で相手の要所を察知するため50の衛星がいるといいます。イラク戦争で猛烈な攻撃能力を発揮したトマホークをアメリカから購入するといいます。とめどもない“抜本的”な軍事増強がきめられようとしています。
そうでなくとも日本の総合的軍事力は現在世界5位にランキングされています。専守防衛の国がです。ヨーロッパのどの国より巨大な軍事力を日本は持っているのです。
一方で自衛隊の志願者は減少に頭いためているそうです。となると国家による徴兵制が現実になってきます。
果たしてこれでいいのか。軍事増強には限界がありません。増強ごっこの果てには破滅があるだけです。今一度こころ冷静にして考えるべき時ではないですか。

世界で唯一の憲法9条を持つ日本はアメリカにくっつくだけでなく、〈戦争できない国〉を世界に大きくアピールしていくべきではありませんか。“敵”と目される国と敵視政策でなく共存していくあらゆる方法を探ることに知恵をしぼるべきではないでしょうか。けっして理想論ではありません。
ところが今は全く逆行しています。
戦争を知る最後の世代“焼け後闇市派”のぼくとしては最近の軍事拡大を大いに憂うものです。

軍事費抜本的増大は必要なのか（2023.1）

山口洋司（狩場台）

敵基地攻撃能力の保持、またしても憲法の理念を大きく踏み外す悪巧みが年末、国民をおいてきぼりにして決められました。以前からのアメリカの要求に屈したのです。
ウクライナでの戦争に重ね、次は日本の姿、とさんざん国民を煽り、抜本的軍備強化を決めたのです。まさにマッチ、ポンプ的悪だくみで、火事場泥棒のようなものでもあります。
岸田総理は決めたプロセスには問題はない、と開き直っていますが疑問だらけです。
臨時国会が終わって1ヶ月、あまりにも拙速です。有識者会議は元外務、防衛次官や安倍さんの安全保障会議のメンバーだった保守派の御用学者、それにメディアのトップらでほとんど異論が出そうにないメンバー。その中で元朝日新聞主筆船橋洋一氏がどんな発言をしているのか知りたいと思ったのですが個人の発言は公表されない密室状態。

NATO に合わせて GDP（国内総生産）2%の軍備費増大、敵基地攻撃ありき、の大前提から議論が始まっています。敵基地攻撃は不可欠、さらに武器輸出禁止三原則の制約を取り除き防衛装備品を積極的に海外へ移転せよ、と勇ましい。岸田さんはそれでお墨つきをもらったとばかり、国会で議論もせず突っ走ったのです。安倍さんの国葬と同じパターンです。
不思議なのは財源のことのみが焦点になって誰も防衛費の抜本的増大が本当に必要なのか、たとえ必要としても分不相応の1.5倍もが必要なのか、憲法にも抵触する専守防衛を捨てていいのか、もし日本が先制攻撃したときどうなるのか、攻撃対象を、そのときの判断と、あいまいにしたまま、全く議論がぬけていることです。
改憲しなくても憲法がどんどん蝕まれていっています。私達は野党に憲法を守るべく一票を入れて託しているのです。自民党より右寄りの維新の党は別として野党は静か過ぎます。今からでもいい、もっと過激に発信していって欲しいものです。
過去に戦争を仕掛けた苦い経験から誓いあった武器は持たない、持っても専守防衛に徹するという国民総意は今、捨てられようとしているのです。

いつの日か米軍に加わって、近隣の国にあたりまえのようにミサイルを打ち込んでいる自衛隊のさまがリアルに想像できます。
〈過ちは繰り返しません〉先の戦争で無残にも殺されていった兵士にどう説明できますか。
内閣支持率31%、防衛費増大反対 66%（12月19日朝日）で国のかたちを大きく変えられてはたまりません

ふるさとの山、人の情（2023.2）

山口洋司（狩場台）

〈青空の発車のベル 冬の山〉

友人の82歳、現役演出家の句です。

昨年末、疎開先の田舎へ久しぶりに出かけました。京都から山陰線で2時間、山、山に囲まれ、その中を由良川の源流、和知川が細く這う和知というところです。

昭和19年から28年まで、戦争が終わっても10年近く暮らしたので、思い出いっぱい、幼馴染みも多く、人に問われれば〈ふるさと〉と勝手に称しています。

師走の青空。地元の人が運営する閑散とした和知駅に軽トラックで迎えてくれたのは85歳の同級生F君。

かつて知和川の鮎の漁を仕切っていた乙見屋のコレクションにぼくの父の絵があるので見にこないかと誘われてのものでした。

今は娘さんの時代になっていましたが、見せてもらったのは水彩画の何枚かの鮎の絵と油彩の和知風景。こんな自然の中に暮らしたのだ、と懐かしさでいっぱいになりました。

絵もさることながらやはり圧倒されたのは、F君の軽トラから見る今、そこにある山。

茶色がかったむらさきの冬の山がどーんと裾を広げて目の前に鎮座しているのです。冬日を受けてのくすんだ色といいボリュームといい圧倒的な量感をもってこちらに有無を言わさず迫ってくるのでした。感動のあまり車をしばし停めてもらって見入りました。まさに啄木が詠んだ＜ふるさとの山に向かひて言ふことなしふるさとの山はありがたきかな＞の心境です。その山の前には人間の小さな営みなどすべてが吹き飛んでしまうような存在感でした、

たった3時間あまりの滞在、軽トラは田舎のくねった道をスピードをあげ引き返す。2時間に一本の列車に乗り込もうと発車ベルを背に駆け込んだのですが小さな段差につまずいて前のめりに転倒しました。血だらけの両手の甲をハンカチで押さえながらもぎりぎり間に合ってほっとしたところ隣の席に座っていた老婆が袋の中から、バンドエードとガーゼを取り出し、ガーゼをペットボトルの水でひたし、拭け、と手渡してくれる、終始淡々と馴れた手つきで＜誰かが困っているときに、と思っていつも一式用意しているのです＞といい、次の駅ですっと何事もなかったかのように下車していきました。

ふるさとの山に感動し、人の情に感激、この世に戦なんてあると思えない一日でした。

戦（いくさ）呼び込む＜抜本的な軍備増強・敵基地攻撃能力保持＞に断固反対します。

恐い夢を見ました（2023.3）

山口洋司（狩場台）

先日こんな夢をみました。
出征する会社の同僚の兵士を見送るために新大阪駅に駆けつけたのですが、プラットホームいっぱいの見送りの人が繰り返すいっせいのバンザイ！にどうしても呼応できずどぎまぎしている自分が居り、つづいて突然、映画『キャタピラ』(若松孝二監督)の場面に移り、歓呼の声とバンザイで戦地に送られた兵士が手足もぎとられ帰され軍神となって床の間に鎮座させられる場面になる、そこでハッと目が覚めました。恐ろしい夢でした。
夢はいつもすぐに忘れてしまう淡いものですが何故かはっきりと思い出され、しかも筋道がちゃんと通ったものでした。
夢か現実か。胸をなでおろしたものの限りなく軍事国家に傾斜していくわが国の先祖返りを暗示しているようでその日いちにち憂鬱でした。

折しも岸田政権は今、無茶苦茶なやり方で軍事増強を進めています。かっての首相は安倍さんをのぞいて、こと憲法に触れる微妙なことはまだ少しは抑制的なところがありました。ところが岸田さんは熟慮なく国是としてきた専守防衛を簡単に投げ捨てました。
憲法を棚上げして相手の国に自衛隊が攻撃をできるようにしてしまったのです。

これは中国を敵国に意識してのことです。アメリカが中国と対立をエスカレートさせてきて、アメリカだけでなく同盟国を束ねて中国に対峙しようとしている。日本はそれに呼応して中国をことあるごとに敵視、中国との敵対を日々広げてきているのが現状です。
対立している尖閣諸島の問題は以前のように棚上げにして経済的にも文化的にも切っても切れない隣国中国とは、敵対することより何をおいても、あらゆる分野で交流を深めて仲良くしていくのが大事で、これ以上アメリカの策略に乗っていくのは危険なことです。もしアメリカが中国と武力で衝突したら当然日本の自衛隊も巻き込まれ出撃です。
今、アメリカべったりは控えて中国と心ある対話が必要です。

わが国のあり方を考えると、戦後いちばんの危険です。周りの状況が厳しくなったからとの言いわけで、あの戦時につながるようなことを2度と繰り返してはなりません。
平和な国の最後の砦の憲法、そのなしくずしを受け入れていく先には悲劇しかありません。
先日の悪夢を正夢にしてはならない思いです。

異次元の軍拡にストップを。（2023.5）

山口 洋司（狩場台）

☆EUがウクライナに毎年、弾薬100万発！（3月23日）
☆ゼレンスキー大統領。武器供与してー、より新しい戦闘機の供与をー（3月23日）
☆プーチン。ベラルーシに戦略核兵器配備合意（3月25日）
☆岸田首相。敵基地攻撃用にトマホーク400発！

トマホークの値段１発５億円

NATOを通じてあらたにウクライナ支援
どこまでエスカレートしていくのか。
その先にあるのはいずれも破滅です。いきつく先は核です。

岸田さんはG7の国で現場へ行っていないのは自分だけだ、
〈議長国の面子にかけても〉と3月にウクライナに行きました。しかし問題解決のために、停戦のために、どんな努力をしたのか、何も伝わってきません。
G7のため、とそんな悠長なことを言っている場合ではありません、今すぐ何を置いても停戦への働きかけをしなければならないのです。
またウクライ支援だと言って岸田さんはNATOを通じて軍事装備品の提供を決めました。なぜNATOを経由してですか。NATOは軍事同盟です。そんなところを通じてしまえば名目はなんと言おうと武器そのものの供与になってしまうのは分かりきったことです。完全に憲法違反です。

岸田さんが今回突然新しく持ち出してきたOSA（政府安全保障能力強化支援）も問題です。“同志国”に日本が軍需関連の援助をするというものです。ODA の軍需版です。
アメリカのインド・太平洋戦略に与し中国を敵にまわしての戦略の一環です。フィリピンやマレーシアなど“同志国”の軍備強化を援助するということです。海外にも軍需介入する、憲法の精神を完全にふみにじるものです。自民党の国防族の面々はさらに武器輸出三原則を戦闘機や戦艦など直接殺傷の武器の輸出も認めろ、と圧力をかけています。
どこまで戦前に戻っていこうとするのか。

憲法9条は実質的に空洞化しています。安全保障環境が危機だ、という大宣伝のもとあらゆる軍事関連のことが異次元になってきています。そしてそのことにわれわれがだんだんと不感症になってきているとしたら恐ろしいことです。
今、異次元の流れをなんとしても止めなければ、えらい後悔となります。

分断をひろげたG7 （2023.6）

山口 洋司（狩場台）

大騒ぎしたG7 が先日終わりました。
ロシアの侵攻が非難されるのは当然ですが結果的には世界の分断を広げただけでした。
ウ・露戦争ではまずは何を置いても、どう戦争を止めるか、なんとしても戦争を止める！、そのために狂人プーチンとどう対応し、あるいはウクライナをどう説得し、テーブルに付かせるか、世界の首脳が方策をさぐり、どう行動していくのかが議論されなければならないのです。

しかしウクライナへの支援強化やロシアへの制裁圧力とロシアへの武器提供停止を求める声明を出すだけではなんら解決になりません。西側の結束を固めるだけではなんの解決にもつながりません。かえってお互いの距離をひろげただけです。

その間に多くの罪無き人々が死んでいっています。

今すぐ戦争を止めさせるため、プーチンをいかに懐柔するか、いちばん大事なことが抜け落ちています。

こうして分断がひろがって行く先は第三次世界大戦です。G7がそのきっかけにでもなれば取り返しがつきません。

※

★G7 の声明では「法の支配に基づく国際秩序の堅持」が掲げられています。

岸田さん！<憲法に基づく国内秩序を堅持>はどうなっていますか。専守防衛、集団的自衛権は秩序を乱し法の支配を逸脱していませんか。★広島ビジョンでは「すべてのものにとっての安全性が損なわないことを条件に核兵器のない世界の実現」、それに中国を念頭に核戦力の透明化がうたわれています。

岸田さん！<安全性を損なわないで>、のひとことがビジョンを無意味にしていませんか。

それに核兵器ではないですが国内の異次元の軍備増強、敵基地攻撃の長距離ミサイル、トマホークの400基はいいのですか。世界とくにアジアの国々に脅威を与えませんか。先の軍拡の国会の論議ではほとんどが、軍事に関することだからと答えられないと岸田さんは逃げていました。透明性が全くない中での決定でした。それでいいのですか、身の丈にあっていない軍拡、その経費（軍費）は所詮国民の懐。むしりとっていいのですか。

岸田さん！<日本にとって歴史的なG7になる>、と自負している場合ではありません。ひとり相撲の国内政治、世界はかってのように2分して分断を広げていく－その実情に大きな不安を覚えるものです

クラスター弾の嘆き（2023.8）

山口 洋司（狩場台）

わたしはアメリカ生まれのクラスター弾。

好き好んでこの世に御目見えしたものではありません。欲望深き権力者が欲望貫徹の手段として強引に誕生させた暴力装置です。

わたしは生まれながらお腹に数百発の爆弾を抱えています。空中で爆発して、いったん使われば想像を絶するほど広範囲に被害を広げます。不発弾も多く、至るところで後々まで市民生
活に影響を及ぼします。そんな事態はわたしの願うところでありませんが、それがわたしの役割なのです。

わたしの仲間は世界にいっぱいいますがあまりにも非人道的のため国際機関がわたしの使用を禁じています。しかしアメリカやロシア、ウクライナはそれに加わっていません。

そんなわたしをこのたびウクライナのゼレンスキーさんのおねだりに応えてわたしの母国アメリカが譲り渡そうとしています。しかしわたしには拒否することはできません。

わたしは今、役割といえど怯えています。お腹の中の子爆弾たちは拒否せよ、とあばれだしています。ずっとお腹の中で事を犯さず静かにしていたいのです。

どこであれ、わたしが使われたら断末魔です。待ってました。とばかりプーチンが核使用にはしるきっかけにもなります。

さすがに日本ではわたしたちの誕生や所持は2009年の国会で禁じています。民主党政権の時代です。安倍さんや岸田さんだったらアメリカに歩調をあわせて、そうはなっていないと思います。

軍拡内閣の岸田さんは今、わたしの仲間である武器をなんとしても戦争当時国であるウクライナに輸出支援したくあらゆる方策を探っています。異常としか思えません。欧米の軍事同盟であるNATOにも限りなく接近しているようです。一介のクラスター弾の身ですが日本はどこへ行こうとしているのか人ごとながら心配しています。

非人道的なわたしはなぜ此の世にいなければならないのか、いつも自問自答です。権力者の欲望のためだけの存在、かたみが狭い思いです。

ウクライナではわたしの投下が成功しないことを望んでいます。いっそのこと此の世からわたしは仲間とともに消えてしまいたい。

ちょっと待って！わたしの気持ちを吐露している間にロシアが先にわたしの仲間を投下したというニュースが入ってきました。悪魔のプーチンー。

わたしたちを使ってのやり合い、だれか止める者はないのですか！

〈過ちは繰り返しませぬ〉に逆行（2023.9）

山口 洋司（狩場台）

〈過ちは繰り返しませぬ〉。セミしぐれの熱暑の中、戦没者、原爆被爆者を追悼し、挙って非戦を誓う8月が去りました。
政府や市が追悼儀式をやり、マスコミも例年8月ばかりは戦争と平和についてちょっぴり大きく扱い平和がいかに尊いか、訴えます。
一刻、社会中そんな雰囲気に包まれます。

しかし何か、しらじらしいんです。空虚でちぐはぐな感じです。そうです。岸田総理が今やっていることが、政策が、この8月の思いと逆行しているのです。矛盾です。過去の過ちの方へ限りなく流れていって、過ちを繰り返そうとしているとしか思えません。

敵基地攻撃能力の保有を含む安保関連3法の改定
軍事予算の異次元の増額（NATO に合わせて2%、5年間で43兆円越に）
武器輸出制限の緩和検討（戦争当時国へ、殺傷力のある武器供与）
防衛産業支援法成立（これには立憲民主党まで賛成）
ODA 支援の軍需版（“同志国”への軍需インフラ支援）
欧米の軍事同盟 NATO への限りなき接近（会議に出席し、物資支援）
日、米軍オスプレーの低空飛行制限の緩和（150mから 60mへ）
南西諸島の軍事要塞化―（ミサイル配備）
麻生元首相の台湾関与（抑止力を機能させる覚悟が求められている。戦う覚悟だ！）
日米韓緊急時連携強化（先月3者確認。有事に対応。集団的自衛権を一歩踏込む）

ここ1～2年岸田政権だけでもこれだけ戦争への危険を身近に引き寄せています。
しかもほとんど議論なしで。

なぜ憲法9条がある国が世界3位の軍事国家にならなければならないのですか。まさしく8月の鎮魂の思いへの裏切りと逆行です。
先日の朝日新聞によると、バイデン大統領が岸田さんを指し「この男が立ち上がった」と会議で称賛したり、「広島を含めて3回会った。私が説得し、彼も自ら納得して違うことをしなければならないと考えた」と異次元防衛費増額を要請した言い方をしています。
政府は抗議したらしいですが、言うことをよく聞き米国に絶賛されている岸田さんです。
積み重ねていく危ない道―。かって昭和史の故半藤一利さんが何かに書いていたのを思い出しています。「戦争は突然天から降ってくるものではない長い間のわれわれの『知らん顔』の道程の果てに起こるもの、その都度ぷちんとやらねばー」「日常いくら非戦を唱えようが、それを無駄だと思ってはだめ、そうしたあきらめが戦争を引き寄せる」と。

そうです。晩夏、セミが同調しているかのように激しくしぐれています。

マッチに火をつけて！　（2023.10）

山口 洋司（狩場台）

まるで昔ばなしの「桃太郎」です。
バイデン大統領が猿と犬をお供にして鬼が島へ鬼退治に行く光景でした。韓国の伊大統領と岸田総理、核の傘という吉備団子をもらって、どこまでも付いていきます。

8月キャンプデービッドでの日米韓の首脳会議は安全保障を、〈前例のないレベルに引き上げる〉のを目的にした会談で、朝鮮半島と台湾有事の時は協力して戦うという意思を強固にしたものでした。世界の分断を広げ集団的自衛権の行使をさらに一歩踏み込んだものです。バイデンさん主導でわが国のかたちを決定的に変えさす恐ろしい企みです。
並行して国内では岸田さんは先頭に立って武器輸出の緩和を急いで進めています。自公の与党会議では非人道的な武器の輸出を緩和してよいものか、どうかの基本的な判断より、いかにうまく取り決めのスキを狙って輸出できるか、で議論しているようです。
なぜそんなに人を殺すのが目的の武器輸出にこだわるのか、すべて日本と軍事一本化を目指すバイデンさんの思惑どうりにことは進んでいます。

アメリカからの武器購入も安倍さん以来けたはずれ、諸経費合わせて一基十億近くするトマホークを400基も買ってどうするのですか。来年度防衛予算は7兆円越えの要求、目に余る大増額です。これらはすべて抑止力のため、とかたづけられています。中国や北朝鮮の脅威を煽って抑止力

といえば何でもありで、限度がない状態です。世界中に抑止力が膨らんだらどうなります。一触即発世界の破滅です。
そして、これらがいとも安易にきめられていっているのが現実です。

自民より右派の維新の党は別にして野党のセンセイ方、これでよいのですか。岸田さんになすがまま暴走させておいてよいのですか。
永田町にこもっている場合ではないのではないですか。暑い夏でしたがどれほど国のかたちが変わることにからだをはりましたか。国民にアッピールしましたか。
マッチに熱い火を付けてください。
マッチ湿っていませんか。国民に異常を大きく投げかけて下さい。今いちど憲法9条を利用して戦前回帰の軍拡を止める行動を起こして下さい。軍事が最優先になる国策はもうごめんです。最大の抑止力は憲法9条です。さんざんボディブローを受けていますが不滅です。
そして、―桃太郎に付いて浮かれている首相を引きずりおろそうではありませんか。

いのちの軽視　（2024.1）

山口 洋司（狩場台）

2023、昨年の1年間ふりかえって見ると、なんと人の命が軽んぜられた1年、と改めて思わずにはおれません。
ハマスが突然イスラエルを襲撃し、千人以上を殺す、その報復でイスラエルがガザ地区に10万回を越える投爆と地上攻撃で、すでに2万人を超える人々を殺害している。
イスラエルはガザの住民をむりやりに南地区に追いたて、今度はその追い立てた南部へ攻撃を仕掛ける。そのあまりにも理不尽な修羅場。＜ガザへの原爆使用も選択肢のひとつ＞とイスラエルの閣僚の発言まで飛び出しました。
ウクライナでは戦争は泥沼化して、日々兵士や市民の死傷者が積み重なっています。

アメリカの上院議員が＜生か死か、ひとりになるまで戦うことだ！アメリカもそうやって自由を得た＞とけしかけ、バイデン大統領は人を殺す武器を際限もなくウクライナに提供します。ウクライナのゼレンスキー大統領は世界に武器をねだり、こちらから停戦することはない、と豪語して＜少々の犠牲はやむを得ん＞と突っ走る。
なんたることですか。“少々の犠牲”は大義のためにしょうがないとは。権力者はいつも“少々の犠牲”の中には入っていないのです。

“少々の犠牲”は名もない市民です。みんなひとりひとりに人生があります。それが大義のために消えてしまうのです。人々でなくひとりの人、親もあり、子もあり、生活があるひとりひとり、それが大義のためにふみつぶされるのはあってはならないことです。人を犠牲にする大義など価値なき大義です。
人の命を軽んじる。こんな危険な方向へ日本も昨年は突っ走りました。敵基地攻撃をするのを目的に巨額の軍事費を積み上げました。防衛対策を転換して人を殺すための武器をつくる防衛産業の支援も本格化させました。政府はアメリカの強い要請のもと国内で生産した強力な殺傷力のあるミサイル、パトリオットの輸出を国会の議論も経ず年末ぎりぎりのどさくさまぎれに決定しました。アメリカからウクライナ、ガザに供与される可能性があります。オーストラリアやフィリピン、韓国、マレーシアなどとの軍事連係も一気に進みました。
アメリカの対中国戦略のもと日本のこれら政策は紛争に巻き込まれるリスクを格段に高めます。この施策の果てにわたしたちのいのちの軽視、生活の破壊が連なっています。

＜人のいのちは地球より重い＞と言った人がいましたが、その言葉を今あらためてかみしめたいと思います。

カナリア諸島の九条の碑　（2024.4）

山口 洋司（狩場台）

アフリカの西にあるカナリア諸島、その中心グランカナリア島に憲法9条の碑がある。

どうしてこんなところに9条が―。知人で構成作家の疋田哲夫さんが2014年夫婦で世界一周の船旅に出掛けたときその碑に遭遇したのです。

疋田さんは「11PM」や「夜はクネクネ」など人気番組に構成作家として携わってき、構成作家というジャンルを開拓した第一人者です。構成作家集団からなる「オフィス自由本舗」を主宰し、その機関紙『自由本報』に航海記を書いています。
9条の碑は島のテルデ市の「HIROSHIMA・NAGASAKI」広場の一角にあり、9条条文はスペイン語で書かれ、平和という漢字も大きく書かれていたそうです。
テルデ市は国のNATO加盟に異議をとなえ市議会は非核地帯を宣言。非核、平和を求める市民の間で日本の平和憲法が話題になり、市長が日本領事館の協力を得て与野党満場一致で実現したとのことです。
タイル張りで高さ3メートル、幅2メートルの碑が出来上がったとき市民、市長、議員、在留邦人らが集まり、除幕式のあと全員ベー

トーベンの第九「歓喜の歌」を合唱したと言います。さぞ感動的な場面だと想像されます。その後の広場の改修作業の式典でもテルデ市の市長は9条を持つ日本に敬意を表す、と挨拶し、称えます。

疋田さんは地元の人たちと交流を重ねます。
この島に住んで42年、日本料理店を経営していた邦人の方が密かに疋田さんに心のうちを打ち明けます。「この島の人は70年近く憲法で定めた平和を維持してきた日本国民を心から尊敬してくれているんですよ。それなのに今、日本国内では政府が先頭に立って平和憲法を改悪しょうと躍起になっているんでしょうー。そんな現状を恥ずかしくって彼等に言えませんよ！」。疋田さんも複雑な気持ちになります。

憲法9条は世界の宝なんです。ずっと前に疋田さんから届いた『自由本報』、テルデ市のいい話、ずっとぼくのこころに残っていました。
この時より、憲法9条はさらに痛め付けられています。集団的自衛権を容認し、さらに今まさに岸田首相は、殺傷能力のある武器、次期戦闘機の輸出をごり押ししました。歯止めをかけるから問題ない、と言います。この件だけに限定する、とも言います。このご都合主義、誰が信用しますか。
このていたらく、日本に畏敬の念をもっているテルデ市に弁明のしようもありません。

恐ろしいアメリカの軍事ブロック入り　（2024.5）

山口 洋司（狩場台）

「アメリカに平和憲法捨ててくる」（兵庫県 徳本公子）
4月12日朝日新聞の「朝日川柳」です。そのものズバリ、今回の岸田さんの訪米はこの句に凝縮されているようです。

満面の笑顔のバイデン大統領と岸田首相、ともに支持率低下で風前の灯火のふたり、必死です。国内向けに支持率上がるよう、まわりの演出どうりに動いています。
国賓という扱いに岸田さんは有頂天にも見えます。破格の待遇、裏返せば相当な無理、覚悟を押し付けられているのです。ちょっとした喜劇です。

しかし笑っている場合ではありません。岸田首相はそれに応えてアメリカから強要されていた敵基地攻撃能力や防衛費の異次元な軍事増強をちゃんとやりました、と胸をはり、さらにこれまで以上にアメリカを支えどこまでも付いていく、と擦りよっていきました。

切り絵『NO WAR』山口洋司

約束した自衛隊と米軍の指揮統制の強化は、やがて軍事の日米統合となり、アメリカに指揮権を委ねることになります。自衛隊はアメリカの1部隊になり、全てのアメリカの戦争に関わっていくことにつながります。くしくもアメリカの高官が言いました。「60年の日米安保条約改定以来の最大の変化」。
また岸田さんは、世界の警察官としてちょっと陰りの見えてきたアメリカの役割を日本も分担して積極的に引き受けていくと宣言、さらに踏み込みました。リトルアメリカになってその役割を引き受けていくということです。

恐ろしいことです。アメリカの軍事ブロックに完全に入り込む宣言です。
これでは中国に絶交状を叩き付けているようなものです。いろんな確執があっても隣国中国と話しあってうまくやっていくというこれまでの道を狭め閉ざしてしまうものです。
軍事同盟 NATO のアジア版をつくりその盟主になろうとする下心もすけて見えます。
こんな危険な道をふたたび日本は目指したらおしまいです。
そんなことより今のアメリカとの屈辱的な地位協定を改定して、対等な2国間関係にあらためるべきです。憲法改悪に猛進するより先です。

岸田さん！もういちどアメリカに行って捨てた憲法をとりもどして来てください。

岸田さん、法の支配に従って－　（2024.6）

山口 洋司（狩場台）

10人のうち2人、多くても3人しか支持していない岸田政権です。
10人のうち7～8人、ほとんどの国民が支持していないのです。
それなのに岸田さんは全権を国民に付託されていると勘違いしているような振舞いです。

切り絵『NO WAR』山口洋司

4月にアメリカに行った岸田さんは、アメリカの負担を分かち合い、アメリカの役に立ちます、と日本の国の未来を投げ出してきました。軍事協力には魂まで預けてきました。
フィリピンが南シナ海で中国とトラブッたら、一緒になってアメリカとともに支援すると、日米比で約束もしてきました。軍事衝突した ら自衛隊が関わるということです。
フランスのマクロン大統領とも武器弾薬の持ち込み等手続きを簡略化し軍事連携強化を約束してきました。
国内では武器輸出規制を緩和したり、予算設計もできていないのに異次元の軍事費アップ、ひたすら軍事強化に走ってきています。

いくつもの軍事連携を束ねていく新しい安全保障戦略を進めるアメリカや、自民党右派の言いなりに進んでいます。

また、岸田さんは大幅の軍事費増額を建設国債で賄おうとしています。国債で軍事費を処理するのはさきの戦争で際限なく軍事費がふくらんだ経緯から、絶対にやってはならないことと、安倍さんは別として過去の政権は肝に命じてきたことです。
これらはいずれも国会で十分に審議することなく進んでいます。10人に2～3人の支持しかない政権のなすがままです。ほとんど私たちの意見はおいてきぼりです。

ことあるごとに外向きには、＜民主主義と法の支配が脅威にさらされている。国際秩序を一＞と強調する岸田さんです。しかし国内では国会軽視や自民党の多くの議員の裏金、脱税問題、統一教会問題など民主主義は脅威にさらされているではないですか。
陸・海・空の戦力は保持しない、国の交戦権は認めない、永久に戦争を放棄する、とする憲法に違反して軍事強国への道を突っ走っていませんか。法の支配に従って下さい。

一線を越え異次元の軍事強化を続けて、日本をどこへ連れていこうとしているのですか。
10人に2～3人だけの支持です。あぶくのような政権です。やることことごとく空疎です。
＜改憲、先送りできない＞と叫ぶより今すぐ退陣して信を問うべきです。

ケンポハップの思い出　（2024.8）

山口 洋司（狩場台）

なんとなくの不安

青い空、入道雲、8 月になると思い出すのが和知での疎開生活です。

山陰線で京都から2時間余、今は観光地と知られる美山の隣り村の和知です。居ごこちがよかったのか、わが家は終戦になっても8年間居つづけていました。
よく疎開でいじめられたという話を聞きますが、そんなことはいちどもなくみんな仲良く上半身はだかで、草いきれの中、昆虫やいなごを追ったり、毎日川泳ぎや魚とりに真っ黒になって、ぎんぎらに明け暮れていました。
野菜作りや田植え、わらを使ってのぞうりづくりなど田舎でのいっぱいの暮らしを経験することもできました。
しかし戦後の食糧難はひどく、田舎にも波及、父は百姓のおじいさんやおばあさんの肖像画を描いてそれをお米に変え、母も着物をお米に変えてもらうため苦労しました。

楽しみといえば、村祭りや地蔵盆、盆おどり、それに小学校の講堂で青年団の演じる股旅ものの素人芝居を見るのが唯一の娯楽です。
たまに外部からの催しがあります。共産党の農村工作隊の「共産党の紙芝居」やのち総理大臣になる芦田均の演説会などです。農村工作隊は京都の共産党代議士河田賢治の世直しのお話と紙芝居、テーマソングもありました。芦田均は当時再軍備の議論かまびすしく、国会の新憲法小委員会の委員長芦田さんの戸締まり論です。戸締まり、つまり軍備をまとって外敵の泥棒を防ごうというものでした。
憲法が施行されるのが昭和22年。5年生のわがクラスでは、何か珍しい貴重品を扱うようにケンポハップ、ケンポハップと言い合っていたのがしばらく続いていたのを覚えています。先生もこれまでと違う新憲法の人権主義、永遠の戦争放棄、平和主義を何度も何度も説明していました。新聞も大きく扱い、子どもながらに生活は不自由でも何か新しいことが始まっていくのだなあ、という感覚で聞いていました。
集団登校して校庭の天皇の写真が祭られてある奉安殿に最敬礼をしていたのが、何だったのか、との思いも深くするのでした。

疎開から神戸へ帰ってきたのが高校の2年でした。ケンポハップで貴重品の誕生のようだった憲法が80年近くになっての今、とくに9条は邪魔もの扱いから壊憲の仕打ちを激しく受け続けています。

わが疎開は幸いにして恵まれていた方でしたが、2度と疎開をするような事態があってはならないとの思いを、8月がくると特に深くするものです。

青空と笑顔　（2024.10）

山口 洋司（狩場台）

世の中でいちばん美しいものは、と問われれば、迷うことなく花や絵画でなく、青空と笑顔と答えたい。
青空の青は四季によって色合いが変わるが、ことに夏のまっ青な青空は何もかもが永遠、と感じさせる。まさに平和の象徴のような深さである。
阪神タイガースが勝ってもオリンピックで誰かが優勝しても、勇気や元気をもらうことはない。しかし青空をじっと見ていると、永遠の何かがあり、何かに通じるようである。希望が湧いていき、元気が湧いてくる。安らぐ、どんな辛いことも青空が吸い取ってくれるようである。

瞬間湯沸かし男

♪夕暮れに仰ぎ見る輝く青空／恋しい家こそ私の青空ー。昭和初期にエノケンが歌ったオールドジャズ「マイ・ブルーヘブン」はその青空を小市民の幸せに托し大ヒットした。

笑顔、人の笑顔ほど素晴らしいものはない、赤ちゃんがうまれて、初めて見せた笑顔に人はみんな感動する。ずっとしあわせであれ、と思わずにはいられない。
誰であれ人の笑顔はほんとに美しい、笑顔にちょっぴりその人の人生が表れる、花も美しいが表層的、人の笑顔こそが深い。社会に笑顔があふれて欲しい。みんなの笑顔、こんな素敵なことはない。作り上げられた創造物で人間の笑顔ほどの傑作はない。なにげない人の笑顔に接して、我が、生きていることのしあわせを感じるのである。

ところが笑顔にもいろいろある、偽善の笑顔なんてものもある。
その最たるものがこの間の総理大臣を選ぶことになる自民党の総裁選び。
大勢賑やかに、お祭りにして裏金犯行問題を拭い去る、という自民党の大戦略にメディアも人々も完全に乗せられてしまった。
候補者は普段はやらないことに駆けずり回る。突然グローブを手にキャッチボールをやるかと思えば、稲刈りを手伝う。墓参をしたり安倍さんの亡霊もウロチョロ。＜てっぺんまで国力をあげる＞とにたりの党内右翼の気色悪さ、みんな心にもない偽善の笑顔をふりまく。これでもか、というつくり笑顔、国民をばかにしている笑顔、背筋が寒くなる。

いったいモリカケに桜の問題、統一協会はどこに消えたのか、底無しに膨れる軍備、日本をどこへ持って行こうとしているのか、偽善の笑顔ほど見にくいものはない。

美しい青空とほんとの笑顔が邪悪な祭りにふっとんでしまった今年の晩夏でした。

キケンな石破新政権　（2024.10）

山口 洋司（狩場台）

日本被団協にノーベル平和賞が贈られました。災害に戦争、物価値上げ、忌まわしいことか続いてきている2024年ですが唯一明るいニュースでした。

これはテレビを見てのことでしたが、石破新総理のお祝いの電話を受けて代表委員の田中熙巳さんが礼を述べたあと、＜われわれの言っていることと反対のことになっていくのを、懸念しています。核共有や非核三原則をないがしろにするようなことを言っているのを危惧します＞と毅然として

総理に返している、これを見て被団協の人々がいかに地に足のついた活動をしてきているのかが見てとれ印象的でした。

石破茂新総理、きわめて危険な人です。座を競った高市さんもそうですが、自民党員何故こんな人達を支持して選び出すのか不思議です。知人で大阪の自民党の活動家にこの原稿を書きながらひやかし半分に電話をして聞いたのです、だれに投票したか問い詰めても口を閉ざしましたが、＜こんな恨みつらみが残っているのは初めてで、長くは続かないだろう＞多少シラけていました。

石破さんはアジア版NATOの設立が持論です。先日防衛、外務大臣に議論を進めるべく指示をだしました。何を考えているのか、NATOはそもそも米・欧の国々が旧ソ連に対抗して結束する軍事同盟です。
アジアで中国に対抗して軍事同盟をつくるなんてのはもってのほかです。どこかの国が中国とトラブルと、みんなで反撃しょうというものです。中国を想定して軍事同盟をつくる、その考えそのものがアジアを危険にさらすものです。戦時のスローガン“八紘一宇” を思い浮かべました。天皇を中心にして家を築く、日本を中心にしてアジアをひとつにする、というものでアジアを侵略するためのスローガンでした。平和と全く逆の考えです。
普通の常識では考えられない思考です。石破さんはちゃんと戦後の教育を受けてきた人なのか、そんな人が総理になったことに寒けがします。

被団協の田中さんが指摘したように、核共有、それに核三原則も議論して見直す、と石破さんは不敵な笑いを浮かべます。安全保障の強化を声高く叫びます。安全保障は軍備強化と同義語です。岸田政権で倍増した軍事費がさらに増えることは目に見えています。

日本原水爆被害者団体協議会の田中さんの危惧はわれわれみんなの危惧です。

（改憲論議をめぐって）

これはえらいこっちゃ（2016.12）

山口洋司　（狩場台）

神社で手を合わせてお参りします。自然な感謝の気持ちです。神道を信じるとか、宗教がどうのこうのというより感謝の気持ちを託しているのです。
が、先日、神社の賽銭箱に賽銭を入れようとしてふと思いとどまりました。神社本庁のことが頭をよぎりました。
神社本庁にお金が渡ると、それが憲法改正運動資金の一部になる。＜これはえらいこっちゃ＞です。

メディアはあまり報じませんが、日本会議という右派の組織があって、全国の神社の多くを束ねている神社本庁はそれに加盟する有力グループです。宗教団体の「生長の家」や神社本庁、それに右派文化人、経済人、政治家などが任意に寄り集まっています。
日本会議は戦後の民主教育の廃棄や“自主憲法”を制定することを最大の目的にして、日本を取り戻そうという見過ごすことができない極めて危険な右派の任意運動体です。
安倍さんはじめ自民党政治家の多くが日本会議政治懇談会に属しています。安倍さんが任命する閣僚の多くもそのメンバーです。恐るべき組織なのです。

その組織、日本会議に神社本庁がいくばくかの資金を提供しているようです。つまり末端の神社の賽銭などが、平和憲法をつぶすための資金にも使われているのです。
神社本庁はまた特定の自民党の政治家を選挙で送り出しています。憲法改正など宗旨を実現させるためです。かなり政治的な動きです。
憲法を踏みにじる安倍さんの行動も当然日本会議の方針と共振しながら進んでいます。
なにげない私達の普通の生活の中には憲法をないがしろにする結果になりかねないものがいっぱい潜んでいます。

神社の前で手をあわせても、賽銭を入れることはやはり拒みたいと思います。自然な感謝を神社に仮託することと神社を仕切る組織体の思惑は分けて考えたいと思います。
それが現憲法を生かす考えに通じるのだと考えます。

アクセル踏んで血迷う安倍さん（2017.6）

山口洋司　（狩場台）

血迷っているとしか言えません。ことに、このところの安倍晋三さんの行状がです。
右翼の「日本会議」でのメッセージや読売新聞のインタビュー、それに与野党の憲法審査会を反故にして自民だけで今年中に改憲案をまとめ、それを元に推進せよと強弁したり、目に余るものがあります。
何をそんなに急ぐのか、憲法をまるでおもちゃのように弄んでいる。安倍さんは祖父・岸信介が壊したかったがかなわなかった、9条のある憲法をつぶすことだけが最終目的の総理なんです。

今、憲法改悪を進める与党議員が、残念ながら国会に3分の2以上います。何が何でもこの間に祖父の思いを果たしたい、という自己目的のために安倍さんは国民を引きずり込もうとしているのです。
その今のうちに、の思いが維新の党や公明党に蛇のようにすりより、要求の一部を掬って有無を言わさないよう取り込み、憲法を取引の材料にしているのです。
国民にはお金と権力をフルに使って“印象操作”を繰り広げています。北朝鮮と中国を必要以上に挑発して、緊張状態を高め、その緊張をこれ幸いとばかりに危機感を煽り、軍事力を増強して9条をないがしろにします。なりふりなんか構っていません。

ほんとうにえらいことです。9条に3項をもうけて9条の精神をぬぐいとり、しかも2020年まで、と期限まで切ります。政権と与党が一斉に安倍さんの言うとおりアクセルを踏みました。ブレーキをかける勇猛な人は安倍さんの周りには誰もいません。恐るべき状況です。
政権と私たちはいつも綱引きの状態にあります。少しでも手をゆるめればダダダッと引きずり込まれます。気がつくと悪夢だった時代に＜日本が取りもどされ＞ます。
＜遅かった＞は繰り返させません。みんなが綱をしっかりと握って、＜カイケン！カイケン！＞と正常さを失って叫ぶ安倍さんに騙されてはならない、改めてその思いを強くしています。

前にちょっと書きました『木津川計ひとり語り劇場』は6月18日（日）午後3時から元町・風月堂ホールであります。今回は「私は貝になりたい」です。

トランプ＆安倍（2018.1）

山口洋司（狩場台）

憲法に欺いて安保法案をなりふりかまわず成立させた安倍さんが今度は開き直って＜8割の憲法学者が違憲だというので、憲法を変える＞といいます。何たる欺瞞、邪魔な法律は変えたらしまい、と言わんばかりです。

エルサレムを首都と宣言したトランプさんは英仏独はじめ中東の同盟国や世界からいっせいに激しい反対の抗議を受けています。百%トランプさんと寄りそうのを誇る安倍さんは懸念はすれど反対表明はしません。出来ないのです。対等の同盟でないのです。日本はすでにジョーカーをつかまされて、トランプさんと同体なのです。

北朝鮮問題にはトランプさんと圧力を圧力を、と安倍さんはくりかえすだけです。圧力の末、追い詰められた後の想定には国会で問われても答えられません。トランプさんから敵地攻撃が出来る長距離ミサイルを買わされ、自衛隊の犠牲を無くすためと詭弁、これまた憲法違反です。
百か国以上世界を回り数々の首脳と会談して優れた実績、とお友達議員にまるでやらせのような質問をさせて、ご満悦の安倍さん、予算委員会の質問時間を野党から奪い取って、結果こんなことなのか、外交のほとんどは武器商人の役割です。

森友、加計問題、恐るべき暗闇でのはからいです。会計検査院の検査報告、財務省が適切と言ったから、そう答えたまで、と自らの責任に向かい合おうとしない無責任体質。民主主義が音を立てて壊れていっています。これこそ“国難”です。

新しい年、憲法の骨抜き論議が加速してくることと思います。9条の3項で自衛隊の認知を改まって入れてしまえば最後、安倍政権はトランプさんに要請されるまま、海外派遣はあたりまえになってしまいます。犠牲者が出てくると、自衛隊入隊は敬遠されます。
そこで待っているのは徴兵制です。国家命令です。拒否できません。今年は大事な年です。

今度は放送で悪だくみ（2018.5）

山口洋司　（狩場台）

神戸市は今年から多くの疑問がある道徳教育を教科として格上げしたのですが、時期を合わせたように安倍さん夫妻をはじめ政治が今、限りなく不道徳の見本になって、反面教師になっています。まるで笑い話です。

その安倍さんですが、またこんな悪だくみをすすめています。多メディアになった現況を口実に放送法を全面的に変えようとしているのです。事実をまげず、政治的公平に報道をするという原則や“マスメディア集中排除原則”規制などを撤廃してしまおうというのです。放送法は戦時中の国民を一方的に煽った反省からできた放送の規範です。憲法でかかげられた言論の自由と番組編集の自由を保証したうえ、公共の電波のもと、資金を持つものが独占したり、不公平放送を防ぐものです。

アメリカは少し前に公平原則をとっ払っています。その結果今、193の地方局を持つ巨大メディアの「シンクレア」という保守的な放送局がトランプさんの主張と歩調を合わせて＜フェイクニュース批判＞の統一メッセージを一言一句変えずにそれぞれの局のアナウンサーで放送するよう傘下の地方局に義務付け、問題になっているそうです。資金さえあればなんでもありになって、民主主義への懸念が広がっているようです。

日本の現在の放送法はひとつ間違えれば一昨年、当時の総務大臣高市さんが放送法をたてにして、番組にいちゃもんをつけ、電波停止の可能性をちらつかせて脅したように、政権に逆手に使われる危険性もありますが、辛うじて、資金力のある者や施政者の好き勝手にさせないための防波堤です。
多くの先進国では政治の介入を防ぐため放送は独立した機構が管理しています。日本も戦後すぐの一時期、電波監理委員会という独立組織が担っていたのですが、すぐに郵政省に権限が移され、今日にいたっているのです。

安倍さんは放送で政権が批判されるのが不満で、政治的公平の規制をなくした放送で世論づくりをしたい、というだいそれた目論見がありあり、です。憲法改悪に向けての下ごころでもあります。政権のこの悪だくみが表に出て、あちこちから批判が噴出し、当面は自重するようですが、時期を少しずらせて必ず出てきます。要警戒です。

（編集委員から）
「こうべまちづくり会館　地下ギャラリー」で「時空・港神戸」と題する絵画展が開かれます。

山口洋司さんも3点ほど出展されるそうです。案内カード　表　裏

2018年5月3日(木)～8日(火)10時～18時

こうべまちづくり会館　地下ギャラリー（元町通り4丁目2番）

首相案件まかり通って国滅ぶ（2018.6）

山口洋司　（狩場台）

そこのけ、そこのけ”首相案件”が通る。”首相案件”まかり通って国亡ぶ。

国を愛することを義務のようにわざわざ付け加えた新教育基本法、領土問題を教えることを義務付ける新学習指導要領、特定秘密保護法、共謀罪法、安保法制、武器輸出禁止三原則をひっくり返して輸出を認める防衛装備移転三原則、これらすべて、安倍さんがごり押ししてきた案件です。“首相案件”です。戦後の深い反省から、これだけはやってはいけない、とみんなで決めてきたことをことごとく“首相案件”でつぶしていく。これが安倍さんの＜日本を取り戻す＞の実態です。
ほんとうにひどい首相です。戦後紆余曲折を経ながらも築いてきた民主主義が崩れ去っていくようです。

今、国会ではその安倍さんの統治の公正さが問われています。官僚やお友達議員の忖度もまかり通り、危機状態です。これだけ問題がでてきたら、これまでならとっくに政権はつぶれているところですが、まだ倒れていません。国民がナメられているんです。韓国ならローソク革命です。うみだらけです。うみの海です. それなのに当のご本人は夫人同行でゴールデンウイークにはエルサレムに旅していました。
名目はパレスチナとイスラエルの和平の仲介だという。何を考えているのか。全く理解できません。そんな気があるのならば、まずは世界を敵にまわして暴挙を奮うトランプさんを説得することが先です。しかしトランプさんには何ひとつ言えません。

国民感情といつもズレている安倍さん、世論調査では今、どの調査も政権不支持が支持を上回っています。それに安倍さんという人間が信用できないというのがいつも高い割合をしめています。そりゃあそうでしょう、先の愛媛県の新文書で平然とうそをついていることが明らかになったことでも分かります。なのに秋には辞めるどころか、続けて首相の座を目指すという。国民にとってこれこそが“国難”です。

行く着く“首相案件”は憲法改悪です。これに対し私たちは安倍内閣退陣、をまずは“国民案件”としてつきつけねばなりません。

5月3日　　（2019.6）

山口洋司　（狩場台）

5月3日、憲法記念日でした。
この日は毎年、朝日新聞の労働組合が主催する「言論の自由を考える会」か、憲法を守る集会に出掛けます。今年は朝日の会が神戸から離れて尼崎に移ったこともあり、ちょっと遠いので東遊園地での「戦争させない、9条壊すな！～」に参加しました。
晴れわたったデモ日和でした。シンガーソングライターの川口真由美さんと作家の落合恵子さんの力強い歌とメッセージが会場を揺るがせます。聳えたつ市役所と関西電力の威容なビルが午後の陽ざしを受けてピカピカとメタルのように光ります。その谷間の東遊園地に色とりどりの集まりの幟がゆらぎました。

同じ時、安倍さんは憲法記念日を祝うどころか、右派の日本会議が主催する＜憲法改正を求める会＞に現行憲法を目の仇にしたビデオメッセージを送り、自分が先頭に立って憲法を変える、と檄をとばします。なんという憲法への、国民への造反行為か、ほとんど狂っています。で本人はゴルフです。朝日新聞の＜首相動静＞によると、連休中ずっと山梨県の別荘に篭ってゴルフ三昧です。

デモは元町まで、9千人が繋がります。ちらちらと街には日の丸の旗も見えます。天皇の代替わりの祝賀ムードです。ふと思います、憲法より＜君が代＞を何故変えようとしないのか、主権在民はどうなっているのか、この国家に起立しなかったら罰せられる恐ろしい世です。歩き過ぎて魚の目が出来た足がちょっぴり痛む。
うやむやになっているままの森友・加計問題。10連休はそれを国民に忘れさせるためではないか、と思いたくもなります。沿道の人たちが珍しげにデモを見やる。デモして抗議することがもう珍しいことになってしまったのか。じわっと汗ばんでくる。

間もなく本格的な夏がやってきます。今年は参議院選挙の夏です。
危機的状況の政治に、落合さんは言います。政権を容認する多くの若者を味方に！気が付いたときは遅い！と。議員の数の力を憲法改悪を企む人たちに渡してはなりません。　浮かれている場合ではありません。

（ワンダフルライフ）

画家　小松益喜さんのこと（2015.10）

山口洋司（狩場台）

30代の頃の一冊のスケッチブックを大切にもっています。思いついたように絵をやりたくなり、家の近くだった小松益喜さんのアトリエを訪ねた時のものです。面識のない闖入者を快く迎えてくれた小松さんは、早速着衣の女性のデッサンをやらせた後、そのスケッチブックに＜面は線である＞＜毎回発見を一＞など絵の心得をいっぱい太いエンピツで書いてくれました。

頭では分かっていても実際、絵として表す意味が分かってきたのは、やっと今になってからです。またその時に強く話されたのは社会をよく見ること、関心を持つことが絵には大事である、ということでした。しかし、日曜日なかなか休みが取れなくなり、残念ながら3回でやめたのですが、小松さんとはその後も大阪へ行く阪急でよく乗り合わせ、いろんな話を伺いました。小柄ながら大きな声ではっきりと話される姿は強烈な印象でした。

小松益喜さんは北野の異人館風景を中心に神戸の街を描いて著名ですが、美大時代からプロレタリア美術同盟に参加し、昭和7年反戦運動で検挙され投獄の経験もあり、2002年、98歳で亡くなるまでずっと国家権力と対峙してこられた画伯です。

その後ぼくは西区へ移住しましたが、六甲の実家へ行く度、電車から小松さんの蔦の這うアトリエを見ると、何故かほっとしていました。しかし、先の大震災ではアトリエが半壊状態になり、小松さんご夫婦は東京のご子息のところへ行かれました。しばらくそのままだったアトリエでしたが、今は解体され、沿線の風物がひとつ消えたようです。

震災の前年90歳の時に神戸市役所の市民ギャラリーで小松益喜画業70周年を記念しての展覧会があったのですが、その時は風景のほかにいかにも年季の入った使い込んだ辞書などの新しい静物の作品が何点かがあり、物事に関心を持て、知恵で工夫を、と作品が呼び掛けているようでした。

もし、小松さんが今の安倍政権の無茶苦茶ぶりを見たら、どんなに怒り嘆かれるだろう、古いスケッチブックを見ながらの感慨です。

編集子から
画家小松益喜さんの作品等が紹介されたサイトを見つけました。

それから、山口さんご自身の個展「 元町高架下界隈 by 山口洋司 」(神戸ビエンナーレ2015協賛)の案内カードをいただきましたので、紹介します。行ってみたーい！！

叙勲って何　（2017.12）

山口洋司（狩場台）

文化の日、新聞を広げると叙勲の記事でいっぱいです。
勲章、これって何？、いつも思うのです。

まあ、見事にランクづけされています。勲章　―。大勲位菊花賞や桐花章、瑞宝章などいかめしい意味不明の章がずらりと並ぶ。しかもそのひとつの章の中にも大中小と細かく分けられています。褒章というのもあります。紅綬褒章や紫綬褒章など分野に分けいくつもあります。受賞の仕方も天皇が直接手渡すものから総理や所轄の行政、とさまざまです。明治の初期にあらたに制度化されたものが手直しされ今にいたっているようです。
勲章といえば、ぼくなどは、戦時中の金鵄勲章（きんしくんしょう）が思い浮かんでしまいます。武功をたてた軍人に与えられる等級がいっぱいある章です。おぞましい記憶です。

叙勲は天皇の国事行事でもあります。天皇なり国家が國民に施しを与えるものです。国家にとっての功労をもとに等級に分けて国家が勝手にランク付けしてしまうのです。また施政者の手前勝手もいいとこで、大臣経験者、国会議員をはじめ地方議員、官僚らが高位で民はその下です。国家との関係においてまず功績よりポジションが第一になります。ほんとにおかしいですね。推薦できるようにもなっていますが、それは建前だけ。市政には国家のために尽くさなくても、目立つことなく人のために尽くしている人はいっぱいいます。

よくよく考えれば、勲章、褒章の制度はその時の政権が国を統治する安全装置，國民をコントロールして国家の威厳を保つためなのですね。
女優の杉村春子さんや沢村貞子さんはじめ実業家の石田禮介さん、政治家の土井たか子さんらさまざまな理由で叙勲を拒否したり辞退した人はこれまでたくさんいます。作家の大江健三郎さんも民主主義に勝る権威と価値は認めない、と拒否しています。
国家の価値観でランク付けして人の価値を決める制度は明治時代の遺物、差別的ですらあります。今の時代とかけはなれています。
文化の日は叙勲の発表より、みんなが文化を享受し、文化の力を再認識する日にしたいものです。

（子育ち、親育ち）

音楽会で（2015.12）

山口洋司（狩場台）

先日、小学校の孫の音楽会に誘われて行きました。1学年40人ほどが舞台に上がって合唱し、合奏します。ハレの日、ネクタイをつけた子、活発にもTシャツの半袖だが、胸にブランドのマークが見える子、さりげなくレースの襟元の子、花のブローチの子、皆それぞれ、いつもよりちょっぴりおめかししています。ひとりひとりを見ていると、お母さんのそれぞれの思いが伝わってくるようです。
楽器の後の合唱では、上を向いて大きな口をあけて身体全体で歌う子、直立不動の子、身体を左右にゆらせて楽しんで歌う子、間違ったらいかん、と緊張が全面に出ている子、これも皆それぞれ、100人が富士山を描いたら100の富士山ができるように、皆それぞれの個を全開させてそれぞれの自分を作り上げていることにすがすがしさを感じながら、ふと自分のこの子たちの頃は、とよぎります。

京都府下の山村へ疎開したのが小学校の2年生，卒業したのが新憲法が公布された翌々年の昭和23年です。襖の紙を破ってその裏側に日本の兵隊が米英の捕虜に銃を突き付けている絵を描いては閉じこもりがちのリトル軍国少年でしたが、敗戦後はその疎開先で食料は豊富ではなかったものの、夏は毎日由良川の渓谷で泳ぎ真っ黒になり、冬は竹の自作の箱橇で雪すべりに興じたり、1年中ほとんど野外で近所の仲間と遊びまわってワイルドな小学生でした。しかし1年に一度の学芸会だけは、今と同じように、よそいきの服を着てひどく緊張していたと思います。

子らの合唱を聞きながら、この子どもたちがそれぞれどう成長していくのだろう、越えねばならぬ辛いことや挫折もあるでしょう、全体でなく個々の子らのひとりひとりがどういう人生を歩むのだろうか。一人残らずうまくいって欲しい、と思わずにはいられませんでした。
まかり間違っても銃を持たされ、銃後を守らせられるような国になっていてはなりません。

（読んだ見た聞いた）

今も鮮明なラストシーン　映画「明日」（2015.9）

山口洋司（狩場台）

大阪西区の九条にシネ・ヌーヴォという小さな映画館がある。ときどきそこへ出かける。野球の京セラドームにほど近い下町の映画館です。150人ぐらいとその半分ぐらいの2つのスクリーンがあり、いろんな特集を組んでいます。

「女優原節子のすべて」「映画の天才、羽仁進」「李香蘭追悼」、山本薩夫、今井正らの「戦後独立プロ特集」などで、どれももういちど見てみたい映画の企画が目白押しです。また他の商業館では扱わないようなマイナーな作品もとりあげています。
「憲法に違反して安保法案を変えてしまおうという今の政権の蛮行をゆるしてはなりません。戦争を憎み、平和を愛し、貧乏と闘った映画人たちの心をスクリーンでお伝えしたい」と発信、映画館が志を高く掲げているのが嬉しいではないですか。

お盆のさなかに「黒木和雄監督戦争レクイエム」4部作（「明日」「美しい夏キリシマ」「紙屋悦子の青春」「父と暮らせば」）の「明日」をそこでみました。全部公開の時にみているのですが、「明日」はどうしても見たかったのです。今から30年前の作品で、長崎に原爆が落とされるまでの24時間を、戦時下の中でではあるが市井の人々の普通の生活を描いたものです。
出産や婚礼、失恋など出てくるのですが、特にストーリーはありません。最後、妊婦が夜明けに出産。家の窓を付きそう母が開ける。夜明けの空、小鳥がさえずる。やがて陽が昇って、洗濯物が青空にゆれる。工場に勤労動員されたモンペ姿の若い女性たちが頭に必勝のハチマキを巻き、手足を高々とあげて整然と行進する。母に抱かれた赤ん坊―。さっと画面が暗くなり，音もなく、原爆雲が空にひろがる。印象的なラストシーンです。一瞬にしてすべてが消えてしまう恐ろしさを黒木監督は抑制しながら静かに提示しています。最初に見たとき以上にこちらに語りかけてくるものがありました。

きなくさい現状の中、よけいに輝くのかもしれません。井上光晴の原作をまた引っ張り出してきて読んでも見ましたが、ちょっともあせていませんでした。充実したお盆でした。

時代と対峙する笑いを （2016.4）

山口洋司（狩場台）

1970年代、ぼやき漫才というジャンルがあって、人生幸朗・生恵幸子というコンビ（写真）が人気でした。<責任者出てこい！>、幸朗が肩いからせて激昂する。相方の幸子が <出てきたらどないすんねん！>と強くたしなめると、<謝ったらしまいや、ゴメンちゃい～>、一転してくだける、その落差がおかしく見ている方は分かっていて喝采したものです。
つじつまの合わない流行歌の歌詞の矛盾をとりあげ、60歳にして人気が出たのでしたが、本領は、世相、政治、官僚の腐敗へのぼやき、折しもロッキード事件で政治不信が高まり、インフレで物価はどんどん上がる、<総理はいったい責任を感じているのか！ うちの20年つけているソケットの電灯さえ手入れしたらピピッと感じよる>。痛快です。

人生幸朗
落語は人間を描きますが、漫才は、時代を切り取って、その時代の空気を笑いにしていくのが本筋の話芸だと思います。いろんな目で時代をとらえる、揶揄や風刺は笑いの大きなジャンルです。

人生幸朗の師匠でぼやき漫才の元祖の都家文雄は戦時中、痛烈に政治や行政をぼやき、何度も勾留されました。また1960年代に知る人ぞ知る奇人といわれる漫才師松葉家奴は、羽織、袴で出ばやしにのってさっそうと登場して挨拶したかと思うと、さっと羽織を脱いで後ろ向きになる、着物には大きく<原水爆禁止！>と縫い付けられてある。観客は一瞬どぎもをぬかれます。で、新派劇のパロディから持芸の哀調あふれる魚釣りのパントマイムとなるんですが、原水爆禁止運動が盛り上がっている時代の空気の中、見事に時代の中の松葉家奴が伝わるんです。

残念ながら今、お笑い芸人は溢れるほどいるのですが、時代の空気と対峙する漫才はほとんど見かけません。技巧に走ってけたたましいだけです。ぼやき漫才は人生幸朗が去ったあと消え失せ、継承されていません。世情は今、笑いの”宝庫“です。何が笑われ、何を笑うべきか、が求められています。
目に余る政権の横暴を今こそ <責任者、出て来い！>と笑い飛ばしてほしいものです。

国の盾にNO！（2016.8）

山口洋司　（狩場台）

敗戦の年を中心にその前後5年間の絵画を集めた企画展が、先月兵庫県立美術館で開かれていました。破滅と復興、激動の時代を生き抜いた作品群で、美術家がどのように時代と関わってきたかが浮かんでくるいい展覧会でした。

国策にそってそのまま戦意高揚を目的としたものから、不条理な中でのやりきれなさや苦悩がにじみ出ている作品など210点です。最後はひと部屋使って丸木位里・俊の大図絵「原爆の図」で締め括っていました。

中でもぼくが一番魅かれたのは、死んで横たわる兵士の顔に国旗が被されている幅2メートル超えの大きな一枚でした（写真右上）。小早川秋聲という画家が描いたものです。日の丸は多分出征する時に贈られたものでしょう。寄せ書きがいっぱいでした。それが人の尊厳を隠すかのように顔を覆い、軍服をきちっとまとった兵士はまるで物体のようでした。腰に差したままの刀の柄だけが異様に金色に輝いているのです。題して「国之盾」。

　これは強烈な反戦画ではないか。しばらく動けませんでした。

ちょうどその頃、リオ・オリンピックの結団式のようなものがテレビで伝えられていて、壇上でみんな日の丸をイメージした赤いブレザーで居並んでいました。もう消えたかと思っていた＜神の国＞発言のあの森喜朗さんが、我々は君が代と日の丸の下にある！と説き、君が代斉唱で口を開かない選手たちを大いなる上から目線で叱りつけていました。

こんな人が増えたら困りますね。しかし、あちこちで少しづつ個人より、国家が上になってきつつあるようです。もっとも危惧することです。国之盾はNOです。

想像力をもって一（2016.9）

山口洋司　（狩場台）

お盆を過ぎても猛暑が続く中、新開地へ『いしぶみ』という映画を見にいきました。
広島に原爆が投下された日，旧制広島第二中学の1年生321人が勤労動員中に被爆します。彼らの最期に残した言葉を遺族が手記にしたものを綾瀬はるかが朗読するというだけのものです。
川に飛び込み焼けただれた身をいやしながら、「海ゆかば」を皆でうたい、天皇陛下バンザイ！と叫ぶ。その中にまじって＜お母あさーん＞という声。その後生徒たちは病院で手当を受けるわけですが、数日後にはみな息絶えていきます。
もとは広島にある局の責務として毎年重厚な原爆にまつわる作品を制作してきている広島テレビが制作したドキュメンタリーの中のひとつです。それをあらたに映画（是枝裕和監督）にリメイクしたものです。47年前です。その当時と較べると今の状況はさらに悪化しています。是枝監督は、今、戦争の予兆に敏感になるべき時、だと言い、綾瀬はるかは＜広島へ来たら、生徒の名前を刻んだ川のほとりのいしぶみを是非見てひとりひとりに思いを馳せて欲しい＞と語り、締めくくっています。

オリンピックで常軌を逸するほどの取り上げ方をしているメディアですが、その隙間に大事なことがかくされています。核の先制不使用宣言を検討しているオバマ大統領に安倍晋三さんは異議を唱えた、という記事がアメリカの新聞に出ました。安倍さんは否定しているようですが、オバマさんの考えに賛成を表明してはいません。そればかりか、国連核軍縮作業部会で、法的禁止を協議する会議を開くよう国連総会に勧告する、という報告書の採択に大多数の国を裏切り日本は棄権しました。
どんな形にせよ、核で攻撃される先には広島で経験したように人間がいる。綾瀬はるかが締めくくったひとりひとりに思いを一、は想像力をもって！一、ということです。安倍さんは想像力が無さ過ぎます。これは私たちの不幸です。

こどもの絵画展から　（2017.1）

山口洋司　（狩場台）

年末には毎年きまって神戸大丸へ出掛けます。
兵庫県の小・中・高生の絵画展を見るためです。厳しい審査を通ってきた作品が特設会場いっぱいに並び圧倒され、いつも強い刺激を受けます。
ここでは見事に大人のカチカチの概念がひっくり返されます。大人の考えもつかない角度から対象を捉えたり、色、形からも自由、子供の感じたままの感性で対象にぶつかっていって、それが見事な作品になっているのです。奔放に一枚の画用紙に自分の世界を作り上げていっているのです。

以前、こんなものもありました。誰も居ない放課後の教室にずらっと机と椅子だけが並んでいて、その向こうに黒板がちらっと見える。上から見た赤茶色の机と下から見た緑色の黒板、遠近法も視点の基本からも離れている。しかし机や椅子は生き物のように生き生きとリズミカルに画面をかたち作っていて、なおかつ静謐。画面からたった今までの子供たちの授業風景と喧騒が聞こえてきそうです。想像力を限りなくひろげてくれます。見ていて子供の自由さがうらやましい思いをしたことがありました。

これも平和な時代ならこそ自由に絵が描けるのです。僕は小学校1年か2年生の時に描いた一枚の絵を今も“大切”に持っています。戦争末期、ふすまを破って、その裏側にクレヨンで描いたものです。鉄カブトの日本兵に銃を突き付けられ、両手をあげて降参している米英兵の絵です。後ろには戦艦や軍用機が並んでいます。（下写真1、2）
戦時中は、僕だけでなくほとんどの子供が、時局にそったこんな絵を描いていたのですね。＜一億一心＞＜鬼畜米英＞＜撃ちてし止まん＞　－　子供まで完璧にマインドコントロールされていました。

集団的自衛権が行使され、自衛隊が相手兵と交戦することになると、戦闘場面が現実となります。子供も徐々に洗脳されて＜ニッポン勝て！＞一色になります。国家が前に出て個人は消えていきます。こんな中で自由な絵は成りたちようがありません。

自由に子供はのびのびと感性を発揮してほしいものです。今、大人の責任は重大です。

木津川計さんのひとり語り舞台をぜひ（2017.3）

山口洋司　（狩場台）

今回は舞台のおすすめです。舞台といってもたった一人で語る芸です。
『木津川計のひとり語り劇場』がそれです。

48年間、200号、昨年惜しまれつつ終刊した季刊誌『上方芸能』を発行してきた木津川計さんが立命館大学教授を定年退職した10年前、念願だった語りの芸を旗上げしたもので、今年で11作品を数えます。マルセ太郎が映画の語りをやっていたのに感銘を受け、ならば芝居を中心に、とマルセ太郎亡きあと語りだしたのです。
名作を中心にその時代背景や登場人物の意識などを深く分析してストーリーとともに語り、今の時代を木津川節で鋭く斬りこんでいくという作務衣を羽織った、たったひとりの1時間半の舞台です。
「王将」の坂田三吉がなぜ高度成長期にフィーバーしたのか、「無法松の一生」の無法松の慕情が検閲で無茶苦茶な目にあう真相、「父帰る」では大正デモクラシーと教育勅語が対立したんだ、という解釈です。

僕は三回目からすべて見ていますが、一番印象に残るのは「私は貝になりたい」です。初期のテレビドラマの傑作です。上官の命で米兵の捕虜を殺した罪で戦犯として絞首刑になった元二等兵の

悲劇で感動的な話ですが、昨品に何かが足りない、どうしたら被害者意識を超えられるか、イタリアの名匠ロッセリーニの映画と比較したりしながら探っていきます。
戦争がなければ平凡な散髪屋のおやじの元二等兵、戦争は気がついた時には遅い、その遅いをくりかえしてはいけない、と木津川さんの鋭く熱い警鐘があります。

＜がめつい＞＜根性＞のレッテルを貼られた大阪の文化に異を唱え、そのイメージからの脱出を目指し関西文化を先頭に立って牽引した木津川さん、権力や権威におもねずいつも弱者の側に立っての発信です。そのひとり語り芸はますます研ぎすまされてきています。（元町の風月堂ホールで春、秋に公演、次回は6月18日（日）です。）

忘れられない一冊『死の商人』（2017.7）

山口洋司　（狩場台）

少年期、青年期に読んだ本で後年になっても心に残る忘れられない一冊、というのが誰にでもあると思います。僕の場合は、高校1年生の時の“教科書”だった岩波新書の『死の商人』です。

国際政治学者岡倉古志郎さんの著で、世界のどこかで紛争を起こし、どちらが勝とうが関係なく武器を売りつけ莫大な利潤を得て大財閥になる武器商人、つまり死の商人が政治を揺すり、世界を動かしている実態を書いたものです。大砲王クリップや火薬王デュポンらの暗躍が手にとるように描かれています。
のほほんと疎開先で中学時代をすごしていた少年にとってはカルチャーショックでした。急にこれまでの何倍にも世界がひろがった感じでした。世界を見る目が変わった思いでした。

高校の社会科の授業の初日だったと思います。おかっぱの長髪に度のきつそうな大きな黒縁目がねの松本先生は「教科書は使いましぇん。これでやります」と、買うのを求めた『死の商人』でした。
先生は九州の出身で“皆シャン”“シェンシェ”（先生）と地方弁丸出しだったことから“シャン”というあだ名が付けられ、人気先生でした。
この一冊から、＜戦争と資本主義の構造＞へと授業はどんどん広がっていき、松本シャン先生からはものの見方はじめ、はかり知れない大切なことを教わりました。
2年で神戸に転校したこともあって、高校時代のことはほとんど覚えていないのですが、よほど強烈だったのか、シャン先生のことは風貌から語り口まで、今でも鮮やかです。メモ書きいっぱいのその“教科書”は黄いばんでいますが、今も大切に持っています（写真）。

こんな先生や授業、がんじがらめにしばられた今の学校では考えられないのではないかと思います。幸運な出会いでした。

『死の商人』の世界は今、さらに過激です。次から次へ紛争は絶えません。変わりなく武器商人が世界を動かしています。
政治と武器は表裏一体。武器輸出三原則を緩和した安倍さんは自らせっせと外遊して軍需用品を供与し、売り込んでいます。かの国のトランプさんも初外遊で莫大な武器のセールスをしています。
武器は人を殺すのが目的のものです。

日常が一瞬になくなる　野坂昭如『一九四五・夏・神戸』（2017.9）

山口洋司　（狩場台）

夏になるとなにげなしに、本棚からひっぱりだして読んでいるのが野坂昭如さんの『一九四五・夏・神戸』という自伝的小説です。内容は何度も読んで分かっているのですが、何故か、つい手がのびて再読してしまうのです

小説は、省線（JR）の六甲道と石屋川にはさまれた灘区中郷町での戦時下の銃後の生活を少年（野坂）の目を通して描かれます。養父母と妹と祖母の日々、隣組の集会、いくつものバケツを底をぬいて紐で吊るし、そこへバケツの水をリレーして正確に通す防空演習、防空壕堀り、町内の人々の職業や生活ぶりなどつぶさに克明に日常がつづられます。

ここは軍需工場からも市街地からもはなれているからそんな心配はない、と皆んな切迫感を持っていなかったのですが、6月5日の神戸大空襲の日、焼夷弾で中郷町が壊滅してしまいます。火の雨、多くの人が焼死する中、生きのびた人々は石屋川へ逃げるも、川床は火のたまりでそこも死体が累々、まさに地獄です。
戦時下でもそれなりにあった普通の生活があっという間にゼロになる、日常が壊滅する。戦争とは前線も銃後も関係なく全てが崩壊する、と小説は描きます。

この本に執着するのは、僕も野坂さんとは学校は違えども、石屋川沿いの高羽国民学校の生徒で少しは接点があるからなのだと思います。学校の帰りに石屋川で友達と手ぬぐいを引っ張りあってメダカを掬ったりしていて警報が鳴るととんで帰って防空壕に飛び込んだりしていました。しかし、大空襲になる前に疎開をしたので助かっていたのです。

今、世界に暴力的な発言があふれています。韓国の文大統領がトランプに自制を求めるのと対照的に安倍さんはひとつおぼえのように北朝鮮に「圧力」を、とアメリカを煽りつづけています。野坂さんが描く状況が再び繰り返されない、という保証はありません。今夏も再読しながら、戦争を知らない、想像力のない安倍さんたち無謀な政治家によって悪夢の日本を取り戻されてはならない、という思いをいっそう強くするのでした。

新開地に出来る落語の定席（2018.4）

山口洋司　（狩場台）

この7月、新開地に落語の定席「喜楽館」が出来ます。大阪・天満の「繁昌亭」に続いて関西では二つ目の落語の定席となります。明治、大正から昭和の初めにかけて関西には小さな落語の席がいっぱいあり賑わっていましたが、昭和5年、人気の初代春団治がなくなり、エンタツ、アチャコの新しいかたちの漫才が登場したあたりから上方の大衆娯楽は漫才が中心となっていきました。戦後、上方の落語家はたった8人、もう廃れいく、と言われる中、当時若手でのち戦後の上方落語四天王と呼ばれる6代目松鶴、米朝、5代目文枝、3代目春団治が奮起して、弟子たち後継を育てて来ました。
今、上方の落語家は250人を越えました。一昨年の春団治を最後に四天王はみんな去り、世代がかわりましたが、それぞれが芸を磨き、みんな勢いがあります。そんな中での今度の定席です。

落語の魅力はなんといっても人間を描くことです。人間の欲や、性（さが）、人間の持つ弱さ、そんなものを表出し、滑稽、笑いにしていきます。また落語はいつも弱者の味方です。けっして強いもの、権威、権力の側に立ちません。それが一貫しています。
女性がいつもしっかりしていて強い立場でもあります。しかし優しさに溢れています。亭主はどこか抜けていて翻弄されるんです。安倍晋三さんに似て権力をかさに着て、傲慢にペラペラ、軽薄な男もいますが、そんなのはたいがい軽く笑いとばされます。

義理人情や武勇伝を語る浪曲や講談も面白いんですが、やはりフツーの人間、庶民がおりなす落語にはかないません。落語は表現の芸というのも僕の惹かれるところです。
これは生前、桂米朝さんがよく言っていたんですが、路地で屋台を出す客待ちのうどん屋が夜空を見上げてつぶやく＜今日は星が高いなぁー＞のひとことで冬のキーンとした空気、寒さ、それに主人公の寂寥感を伝える、これぞ単なる説明でなく表現です。

ともあれ、いつ行っても新開地で落語が聞ける、こんな嬉しいことはありません。権力や権威を大いに嗤って神戸の新しい文化の拠点になってほしいものです。

少数派に思いを　（2018.7）

山口洋司　（狩場台）

今年のカンヌ映画祭で最高賞のパロム・ドールに輝いたのが「万引き家族」です。その監督の是枝裕和さんがこんな発言をしていたという新聞記事を見ました。
文部科学大臣が直接対面してお祝いをしたい、というのを「公権力とは距離を保つため辞退したい」と言い、映画はかって『国益』『国策』と一体化して不幸を招いたことから過去の反省にたつならば『平時』においても距離が必要、と。久しぶりに聞く映画人の心意気です。小さな記事でしたがスカッとした思いでした。
お上からの表彰や祝意に、どう対応するかでその人のすべてが分かる、と言われます。その人の生き方が問われる究極の場です。

しかし文化助成金をもらっているのに何をいうか！という批判もあるようですが、これは違うと思います。国が文化に助成するのは国民への文化振興で、潤うのは国民です。本来なら真っ当な予算をつけるべきものなのです。教育でも福祉などにもある助成金です。
もらったからと言ってお上に忖度したり、言うことを聞かなければならないということは全くないと思います。

是枝さんはテレビマンの出身で、制作会社のテレビマンユニオンでドキュメンタリーを担当した後、映画を手がけ、「幻の光」にはじまって「そして　父になる」など、いずれも高い評価を受けてきている監督です。
映画を自由に制作するため、「特定秘密法案に反対する映画人の会」に加わったり、政治の横暴には極めて敏感で、たえず少数派や目に見えない部分を大事にし光をあてる作品を創っています。
何年か前、どこかで是枝さんはこんな発言もしていました。少数派をどう納得させるかが本来の政治、少数派への想像力が必要、なのに今の安倍政権は多数なら何でもあり、少数派を切り捨てていく、と少数派への思いは是枝さんの作品づくりの考えとダブリます。
昨年亡くなったフランスの名優ジャヌ・モローは「いつの時代も少数派に理がある」と言っていました。少数派とものごとに勝敗があるとすれば敗者への思いです。想像力です。

「万引き家族」は先日出かけたものの満席で見ることが出来ませんでしたが、久しぶりに強い発信する映画人に心強い思いです。

地方局がつくる映画「はりぼて」（2020.12）

山口洋司（狩場台）

このところ地方のテレビ局のドキュメンタリーが注目されています。名古屋の東海テレビが数年前から日頃の取材を映画にして「ヤクザと憲法」「さよならテレビ」など話題作をつくり、今また富山のチューリップテレビが富山の市会議員の政治活動を調査報道した映画「はりぼて」を制作し、全国を巡業公開中です。

「はりぼて」は入社して2年目の記者とキャスターが議員報酬を大幅に上げようとした自民党の実力議員の議員活動を資料請求をして調べ、その膨大な資料の中から不正を見つけ出し、それがきっかけで14名が辞職するにいたった顛末を映画にしたものです。カラ出張や領収書の改竄、架空の市政報告会など次々との政務活動費の悪用、それを記者が証拠をもって議員に問い詰める。言いくるめられたり、開き直られたり、謝ったら許してくれる、と土下座しての謝罪。市長も“答える立場にない”と逃げ回る、まるで喜劇を見ているようです。

映画はこの記者とキャスターが自ら監督をして不正を暴いていくのを描くのですが、問題はここからです。補欠選挙が行われ、その投票率は27%、極端に低い、あれだけ富山の人々が報道を通じて高揚したにもかかわらず、一段落してみれば、この政治的無関心、この無関心さが富山の腐敗した市制を支えている。出直し選挙の後も新しい自民党の実力議員は、まだまだ出てくるだろうと豪語する。
自分たちの報道は何だったのか、何が変わったのか、記者たちふたりの無力感がつのります。
やがて記者はたの部署へ異動になり、キャスターは会社の姿勢に疑問を投げかけ退職します。そこに何かの圧力があったのかは不明ですが思わせぶりです。
ラスト、局の報道フロアにある“報道！　正々堂々”のキャッチフレーズの超大きなポスターがスタッフによって外されて終わるのが印象的でした。

はりぼて、外見はよくみえるが中身はスカスカの見かけ倒し、市議会も有権者もそして腕章つけて特権のように取材する自分たちメディアも―、映画は自らメディアの非力も自照するようです。
地方のテレビ局が厳しい業界状況の中、日頃の丹念な取材をもとに、その積み重ねらではの映画の制作は素晴らしく大きな拍手をおくりたい思いです。

芸人マルセ太郎のこと（2022.3）

山口洋司（狩場台）

もう5年程も前だったと思いますが新聞の情報欄に＜マルセ太郎文忌・DVDとお話し＞という小さな記事を見かけ、すぐ予約をしました。
マルセ太郎のことは何度も当時、『上方芸能』の発行人で立命館大学の教授だった木津川計さんから聞いていたのですが見る機会がないままでした。
DVDは「スクリーンのない映画館」と題して映画『泥の河』(監督小栗康平)を映画とほぼ同じ時間、芸人のマルセ太郎が語るものでした。落語でもなく講談でもなく、映画を作務衣姿のマルセがひとりで語って再現するのです。ひとことの言葉の崩れもなく少年の出会いと別れの情景がくっきりと浮かび上がりそれは、圧巻の語り芸でした。
さらに得意としている猿と鶏の形態模写や＜パリでは民衆から国歌が自然に湧き上がってくるが日本では上から“起立！”の号令がかかって初めて歌い出す＞と、眼光するどく、凄みのあるしゃべくり。批評精神が貫かれていて、スピーディで動きの形も美しい。生の舞台を見なかったことがひどく悔やまれました。

その後毎年1月に行われる文忌に出かけています。今年は1月23日でした。DVDは『中村秀十郎物語』で歌舞伎の黒衣の悲哀を描いた有吉佐和子の小説を語ったものです。
語りに続けてこれはいつもですがマルセ太郎の次男で人権派の弁護士として活躍する金竜介さんと長女の梨花さんのお話になります。マルセと憲法など徹底して弱者の立場にたった生き方、考え方をエピソードを交えながらのお話です。

在日朝鮮人2世として大阪の猪飼野で生まれ育ったマルセ太郎は、若くして上京して演劇を勉強、日劇ミュージックホールでパントマイムでデビュー。その後演芸の世界に入り、スタミナトリオなどを結成して、浅草演芸場などに出演、トリオ解消後、ピン芸でライブハウスで演じていたのを作家の色川武大が注目し、永六輔に伝わり、永六輔が御膳立てした渋谷の「ジャンジャン」での公演が絶賛され人気に火がついたのです。
苦労人で人気が出ても浮わつくことはなく、いっぱいの批判精神を交えながら「スクリーンのない映画館」という独特の芸のジャンルをつくりあげたのでした。
＜思想のないお笑いは見たくない！＞＜氷山の底に沈んでいる部分を感じさせないパロディは安直な粗製品＞数々のマルセ語録を残して 2001 年亡くなりました。

そのマルセに触発されたのが木津川計さん、「木津川計一人語り劇場」を演じはじめ16年、16作。今年で幕引きです。その最後の公演『私は貝になりたい』が4月10日灘区民ホールで開かれます。

藤山寛美33回忌に寄せて（2022.5）

山口洋司（狩場台）

今年は藤山寛美の33回忌で明後日から松竹座で松竹新喜劇の追善公演が開かれます。

今、大阪の喜劇といえばドタバタの吉本新喜劇ですがほんの少し前までは松竹新喜劇でした。泣かせて笑わせて哀愁いっぱいの松竹新喜劇の笑いは日本中を席巻していたのです。
いっとき、予定調和的だ、マンネリだと言われたときがあったのですが、それも寛美の絶妙の間と当意即妙の芝居の面白さが吹き飛ばして名実ともに日本一の劇団になったのです。

久しぶりに聞く藤山寛美の名前に遠い昔を思い出しています。
寛美を人気ものにしたのはテレビの連続ドラマ「親バカ子バカ」でした。60年安保の年、昭和 35 年のことです。ADとして最初にぼくが仕事についたのがこの番組だったので寛美に人気が出てくる過程をつぶさに見ることが出来ました。
寛美・天外の名親子コンビ。父でもある社長に対して息子のあほボンの純粋な言動が俗まみれの世間を浮き上がらせる。それを笑いの中で描くものですが、寛美のあほ息子のキャラクターが受けてあっという間に視聴率が急上昇、全国的人気になったのです。
寛美の芝居は間とリアクションの面白さです。けいこ中徹底して自分がどんなサイズで撮られているのか、アップか2ショットか、フルショットか、それをセリフを覚えるより先につかみそれに合わせた自分の芝居を組み立てていくのです。
ほかの役者にはないことでした。舞台と違ってどう演じたら見ている人の心にまで入っていけるのか、テレビという新しいメディアにどう自分をマッチングさせていくか、いつも格闘しているようでした。

やがて寛美は渋谷天外の後をうけて松竹新喜劇を背負うようになっていきますがタクシーの運転手やキャバレーのホステスらにぽんと破格の祝儀を振舞ったり、いたるところで荒い金遣いの末、莫大な借金が重み大きなスキャンダルになっていきました。
寛美にしてみたら宣伝の一環で、噂さを口伝で広げて劇場にお客が広がるのを一途に望んでのことでした。世間の常識から外れているものの寛美流の“哲学”があったのです。

一貫して〈見せてあげる芝居〉でなく〈見てもらう芝居〉の精神を貫くものの 180 ケ月無休で公演を続けたり、強引に劇団を引っ張って批判も多かったのです。常識はずれのエピソードもいっぱいありました。しかし徹底していたのは〈お客のため〉〈お客がどう喜ぶかー〉でした。

好き嫌いは別として、こんな破格の役者はもうでてこないだろうと33回忌に密かに思うものです。

戦時と演芸（2022.10）

山口洋司（狩場台）

昭和１７年新興演芸チラシ
国家総動員のキャッチ入

戦時から戦後にかけて活躍した漫才に千歳家今次・今若という兄弟コンビがいました。ひょうひょうとして、とぼけたしゃべくりで人気がありました。
兄の今次がなくなった後弟の今若さんは大阪の新世界にあった新花月という寄席の頭取をやっていましたがそのとき聞いた戦時中の話です。

エンタツ・アチャコの「早慶戦」のヒット以来、芸人にも野球がはやりだし今若さんもそのメンバーで活動、やるだけでなくプロ野球もよく見にいっていたそうです。 ある折り西宮球場でオリオンズと阪急戦を楽しんでいたら。 突然〈大阪〇〇村の村田安太郎さん（本名）招集になりましたのですぐ御宅へ帰ってください〉と球場アナウンス。思わず立ち上がるとスタンドからウワーッと拍手が沸き上がり一斉に今次さんの方を見て野球そっちのけ。 一瞬、人並みや、という気持ちともう舞台へ上がれない、という無念さがこみ上げてきて、げんくそ悪いから帰らずそのまま意気消沈して見ていたそうです。

三行削除し、検閲合格印

しかし、拒否するわけにいかず出征、たまたま海軍砲術学校の大尉が花月で見た今若を覚えており<うちの部隊に入れ>と引っ張られ漫談風なことを話ているうちに終戦になり最前線に出ることはなかったとのことでした。これはまだ比較的ましなケースですがが芸人を含めて多くの人が招集令状いわゆる赤紙一枚で日常が突然断ち切られていったのです。

当時多くの芸人は軍需工場などへの巡回公演や前線へ

「わらわし隊」という慰問団を組んで出かけたりして国家総動員体制のなかに組み込まれていきました。
国内の演芸場では<欲しがりません勝つまでは>＜米英撃ちてしやまむ>のスローガンのもと笑いで国策を訴え、国民の尻を叩き軍国漫才、軍国浪曲があふれたのです。
昭和17年新興演芸チラシ
国家総動員のキャッチ入
演者は演じる前にすべての内容を提出させられており、検閲を受けます。問題個所があれば朱線で抹消され、その上演芸場では臨官席で監視がついて事前提出以外のことをしゃべったら即「ストップ」、出頭して始末書を書かされていました。

漫才のいとし・こいしのこいしさんは湊川神社近くの新開地に出ていたことからアドリブで「楠公の父子別れ」にふれただけで「忠君をちゃかした」と厳しく叱咤され始末書を書かされたと。生前言っていました。

中田ダイマル作　副本
検閲を受けサインと印

今、笑いは自由です。お上を笑うことも出来ます。
しかし個人情報保護法の制定や刑法の改正で侮辱罪の罰則強化がささやかれたりきな臭いことが積み重ねられてきています。
赤紙、もうごめん、国策の宣伝はもうごめん。自由にお上を笑うことが出来る社会こそ民主主義の社会、いつまでも続いてほしいものです。

大義よりひとりひとりの命（2022.11）

山口 洋司（狩場台）

移転のため、図書館がしばらく休館になるということで10冊ほどかためて借りてきました。その中の一冊に辺見庸さんの『1★9★3★7』というのがあり、今年読んだ中でいちばんこころ騒がせた本で今のウクライナを重ねずにはおれないものでした。

1937 年という年は日本の皇軍による南京大虐殺のあった年、殺人、略奪、強姦、東京裁判での数字によると20万人以上の中国人を犠牲にして人間が獣になった年。一方で来日したヘレン・ケラーの講演に人々が感動し、ケラーの財布が何者かに盗まれ、それが報じられると全国から謝罪の手紙やお金が寄せられ、慈悲の心があふれた年。獣性と慈愛、人間の中にある両面、ということから書き出され、南京大虐殺を軸に少尉として南京攻略に関係した自分や父や堀田善衛、武田泰淳、石川達三、映画監督の小津安二郎、評論の小林秀雄など中国戦線に関わった作家の著作を省察していくー。
この大虐殺にどう関わるか、もし自分かそういう状況にいたら上官の命にそむけたか、天皇陛下バンザイ！を叫ばずにすませられたか、大義と個人、ずっと今も尾をひく天皇制、戦争に負けて天皇に謝罪する“ニッポンジン”、“ニッポン”とは何か、厳しく自己を問い、加害の責任をおろそかにしてきたからナラズモノの安倍政権を生んだのだと。

今、ウクライナで南京と同じような非人間的なことがいっぱいおこっています。獣になった人間のもと、人間の尊厳がボロぎれのようになっています。狂人プーチンは言語道断ですが、ウクライナの大統領が〈地域を奪還した、我々は勝つ〉と日々成果を誇ってコメントしているのも気になります。そのかげにひとりひとりの人生をもった多くの人々が殺され、犠牲になっているのです。〈今の状態で停戦交渉はしない〉と勇ましいことを言っている場合ではないと思います。このままでは犠牲者が増えるだけです。妥協も含めて、あらゆる手を使って停戦交渉のみに全力をつくすべきです。
民主主義は人の命までかけて守るべきものなのか、と誰かが言ってました。またひとりの命は地球より重い、と言った人もいます。どんな大義よりもひとりひとりの命です。

魔性の 1937 年、兵器は進化すれど人間はなんら進歩していません。同じことを繰り返しています。“戦争法案”が強行採決され、危機感を持つ辺見庸さんに「おまえはどうすべきか」をつきつけられているようです

60年ぶりの夢（2023.4）

山口 洋司（狩場台）

先月号で米田哲夫さんが井上ひさしの『父と暮らせば』のことを書いておられましたが、それを読んで10数年前のことが甦ってきました。
ある折り一枚の芝居の案内状が届きました。木田くん、通称ボクさんからで、大阪の劇団息吹の『父と暮らせば』の案内でした。驚いたことにそのボクさんが父娘だけの芝居の父を演じるというのでした。
ボクさんは長年テレビで小道具やセットデザインをやっていた美術の裏方でした。何度も一緒に番組をつくってきた仲間です。ちょっと頑固なところはあるが、朴訥でコツコツと誠実に仕事をし、皆に信頼された裏方です。しかし、表の役者をやるなぞこれまで聞いたこともなく想像もしていませんでした。

雨の降る日曜日の夜、ほんまかいなという思いと、これだけの芝居のセリフがこの年代で覚えられるのだろうか、という不安を胸に大阪の野江の会場に向かいました。
幕が開きました。雨の中を駆け込んできた娘の前に現れた父役のボクさん。まさにボクさんがそこに居ました。原爆で死んだ父が幽霊になって現われるのです。淡々とした父娘の芝居、原爆で死んだ人たちに自分だけが幸せになっては申し訳ない、と引っ込み思案になる娘を叱咤激励して恋を成就する前向きな気持ちになるのを見届けて去るのです。去るボクさんを背に娘がトントントンとゴボウを刻むのがとても印象的な舞台でした。

見違えるようなボクさん、ボクさんのひょうひょうとした演技、肩肘張ってきば っていないのがよく朴訥で誠実なキャラクターがにじみ出ており、ときおりおど けてのユーモアたっぷりの軽さが娘役の岡部紀子さんをも活かしていました。
僕は宮沢りえと原田芳雄が演じた黒木和雄監督の映画も見ていました。『明日』『美しい夏キリシマ』と黒木さんの3部作のうちでは『父と暮らせば』が一番よいと 思ったのですが原田芳雄の父が重厚すぎたのが少し不満でした。ですからボクさんがどう演じるか気になっていたのでした。映画もよかったですがこの原作の狙 いからすれば原田芳雄の父よりボクさんの父の方に軍配を上げたいほどでした。
カーテンコールでは胸があつくなり、送りだしの時は真っ先にボクさんの手を 握り、思わず涙が込み上げてきました。

高校時代に部活で演出などをやってはいたが主役をやるのが夢だったそうで、60年ぶりに夢がかなったそうです。そんなことこれまでおくびにも出さない人でした。

選挙のシーズンになると、今もボクさんから電話がきます。今の政権を変える、憲法を守る〇〇さんを、と。いつも前向きです。

政治を身近にしたワイドショー（2023.7）

山口 洋司（狩場台）

新聞のテレビ欄を見てあらためて驚いたのですが、朝から夕方まで民放局はすっかり情報番組、つまりワイドショーで占められていることでした。
事件事故からお天気情報、政治、大谷翔平の打球の分析、とありとあらゆる話題をいしょくたに長時間しかも生放送。テレビの特性を生かしたもっともテレビ的展開です。

ワイドショー的なものがはじまったのは1964年の「木島則夫ショー」からだと記憶します。アメリカの番組がモデルでした。続けて各局編成されていきますが。当初は生番組といってもファッションや芸能ニュース、嫁・姑問題など、多くの主婦に関心がある話題をVTR取材して取り上げるようなのが多かったように思います。
社会や政治の問題を積極的に取り込むようになったのはリクルート事件あたりからで、政治問題はこれまでは視聴率が取れない地味な領域でした。ところが政治は政局や政策実現過程含めて、ペテンや闇の中でのかけひき、不正、眠る巨悪、ドラマ以上にドラマチックな世界、どんどん視聴率も上がってきて今やワイドショーの主役です。先の「桜を見る会」の公私混同などは格好の素材になりました。

ハード面の変革も相まってワイドショーの進化を支えます。以前なら中継車を出して大がかりな取材体制をとっていたのが今は小型のハンディカメラになり、電波も2段3段中継の必要なく衛星に直接電波を上げることができ、格段の進化です。直近ではスマホですべてこと足りるようです。
それに局としてもいくつか番組を積み重ねて編成していくより、制作費が安上がりです。そして何より何かが起こった場合番組を変えることをせず簡単に取り込めることが大きいのです。

功罪いろいろあるワイドショーですが、極論すれば将来ドラマやスポーツはBSに移って、地上波は1日中ワイドショーを展開しているようになるのでは、とさえ思ったりします。

そんな中にあっては今後、各ワイドショーが特色を強く出していくことが必要だと思います。ズバズバ斬り込むMCがいたり、事件に強かったり、話題性がなくなっても未解決の問題を徹底的に追っていくのがあったり、新聞でいう調査報道のようなことに力を注いだり、MCや出演者のキャラクターと内容に強い特色が必要になってくると思います。
いずれにしろワイドショーは政治を身近にしたことは大きな功績です

3本のドキュメンタリーを見ました（2023.11）

山口 洋司（狩場台）

このところ映画をよく見ています。先月は「国葬の日」「原発、全部ウソだった」「テレビ沈黙」と毎週たてつづけでした。いつもながら見だしたら続きます。
3本とも大作ではないが社会性がつよいドキュメンタリーです。

「原発、全部ウソだった」は東京電力と経産省にだまされた、と退任後ヨーロッパで核処理問題などを調べに行き、今の政権の原発政策に疑義を唱える小泉元首相。「テレビ沈黙」は放送の自由をめぐって政権が解釈の変更をたくらむのを追求する立憲民主党の小西洋之議員。
このふたりにそれぞれ田原総一朗がインタビューするのを軸にした作品です。いずれも優れたテレビ番組を手掛けてもっとも信頼されているテレビマンユニオンの制作です。

小泉元首相の今の心意気はわかるのですが、首相ともあるものが原発は安全でクリーンで、しかも低コストという売り文句を簡単に信じ込んだというのはあってはならないこと、新自由主義的政策で格差を広げ、アメリカに強制されてイラク派兵したことも、だれかにだまされていたのではないか、作品の趣旨とは別に思わずにはいられませんでした。
「テレビ沈黙」はおりしも集団的自衛権を認める安保法制が俎上にのぼってきたとき、メディアを脅す政権の画策が内部文章で浮かび上がってくる恐いものでした。小西議員の追究で後刻、放送法の解釈変更は取り下げられましたが、憲法に関わる案件で取り下げられたのはこれが初めてだそうです。 しかしながらメディアは終始沈黙していたと、小西議員は、メデ

ィアのこんな重要な問題に対する対応を怒ります。政治の闇の部分に踏み込み嘘をはがしていこうとするこういったドキュメンタリーには大いに共鳴するところですが、インタビューする田原さんの椅子にふんぞりかえっての傲慢さが気になります。

「国葬の日」は国葬が行われる同じ日、全国あちこちにカメラを置いて、今の日常をとり切り、国葬についてインタビューをしていくものです。“今のニッポン”を捉えたかったのでしょうが、手法はおもしろくわくわくしながら期待したのですが残念ながらいまひとつ監督の意図がつたわってきませんでした。

賛否、意見がまちまちで大きく分断されている状況が未整理で、それを監督がどう感じたのか、当惑していたのならその当惑ぶりを見せて欲しかったです。

小品ながらこういったジャーナリスティックな作品がどんどん出てきて政治、社会を変える一助になってほしいものです。

唐十郎と大島新　（2025.2）

山口 洋司（狩場台）

今年に入ってすぐ、元町映画館で大島新監督の「シリトリアル～唐十郎と劇団唐組の記録」を見ました。

唐十郎が昨年亡くなったこともあって17年ぶりに再上映したドキュメンタリーです。

作品の流れは『行商人モネ」』という芝居を作り上げていく唐と14人の唐組の団員のまるで宗教団体の一団のような共同生活が描かれていきます。唐の妻や子どもも含めての飲み会が頻繁にあり、それが稽古の延長です。唐を中心に笑い炸裂したと思ったら、 突然唐がキレて団員に怒り出す。監督の大島にも興味本意で撮っている、と怒りをぶつけ、ベテランの座員が中に入って静めたりします。

ぼくは若い時、演劇界の異彩といれる唐十郎に強い関心をもっていて東京へ出張した折りは何度か花園神社で紅テントを組んでにわか劇場をつくる唐組を見にいき、十年ほど前は神戸新開地の湊川公園にやってきた時も見ました。舞台の水槽に飛び込んだりの身体をはって

の芝居や奇抜な発想が新鮮でした。ラストはいつもテントの後ろ、背景がパーッと開かれ、現実の町の風景がそのまま飛び込んでくる仕掛けは鮮やかなもので感動したものです。
17年前の初回上映は残念ながら見ていませんでしたが再上映でその唐十郎を監督がどう捉えているか、大いに興味をもって見ました。世間からエキセントリックで偏執者、と見られている唐です。唐かその唐十郎を演じているのではないか、といっ監督の狙いはよく出ていたのですが、なにかいまひとつドキュメンタリーとして物足りなさがありました。監督の被写体との関わりが希薄なのです。

上映後、舞台挨拶に来た大島監督かひとこと重要なことを言いました。「唐さんはこの作品の完成試写を見て激怒して帰った」というのです。作品を否定したのです。
ここかドキュメンタリーの肝です。再上映にあたって監督はこのことを取り込んであらたな作品に再構成するべきでした。唐か唐十郎を演じることのしんどさもあるはずです。
何故唐は激怒したのか、演じていることを映像で見破られたからなのか。ドキュメンタリーは監督と被写体の間の激しい葛藤があってはじめてもうひとつ上のレベルの作品になるものです。表現になるのです。
質疑で監督にそのことを言ったのですが、賛同しながら、カメラを回してなかったとのことでした。
『国葬の日』など素晴しい発想のドキュメンタリを作っている大島監督なだけに残念な思いがぬぐえませんでした

噺家 桂米朝師生誕百年　（2025.4）

山口 洋司（狩場台）

落語家、桂米朝師匠が亡くなって10年、生誕百年になることからこのほど居住地だった尼崎の総合文化センターで記念展が開かれていたので見てきました。

満州から姫路に引き揚げ、東京で学生生活をおくりながら寄席研究家で作家の正岡容の門下生になり、その縁で4代目桂米団治の弟子になるわけですが、その当時の師匠からの手紙のやりとりや後年、磐石な一門をつくるもとになる京都の安井金比羅会館での桂米朝落語研究会の資料など米朝さんの輝かしい足跡が一望できるものでした。

師匠米団治の＜芸人になった以上は末路の哀れは覚語の前やで＞を終生の戒めにしてた米朝さん、＜若い時は自惚れも必要ー＞　＜コンディションを考慮に入れてもなお不満＞と記される当時のハガキは師弟間の生々しいものを垣間見させます。

師匠のもと修行を積んで、米朝さんは松鶴、文枝、春団治とともに消滅しかけた上方落語の復興に尽力します。 米朝さんの功績はいっぱいあります。くまなくの地方巡業とホールでの大落語会を通じての分かりやすい表現で地区限定的に近かった上方落語を普遍的な全国的なものにし，品位をたかめたこと、「地試八景亡者の戯れ」など、うずもっていた多くの古い噺を仕立て直して現代的なものにしていく噺の発掘、後継の噺家養成への尽力、加えて古典大衆芸能の研究者としてもたかく信頼されていました。

核の傘

ぼくが米朝さんをはじめて見たのはかなり古いんです。戦争が終ってもしばらく疎開先に留
まっていた中学生の時、京都の従兄弟に京極の「風紀」という寄席に連れていってもらった時
です。

米朝さんまだ入門して3年目ぐらいです。落語家といえばラジオで人気の金梧桜や林家三平の崩れた顔が相場と思っていたのですが米朝さんの端正な顔とたたずまいにびっくりしたのを覚えています。その後仕事で本芸の収録ほか、いろんな上方ものの企画に相談に乗ってもらったりするなんて思ってもみないことでした。

一門の弟子育成の京都での米朝落語研究会、会が終わってからの反省会にいちど立ち合ったことがあるんですが、一人一人の芸を細かくチエックしたノートを手にアドバイスをしていきます。＜こんちはー、と清やんがやってきて旦那に声かける、そのひと声でこの家の間どりや広さが聞いている人に分からないとあかん、これが表現や＞と、厳しい。

枝雀、ざこばはじめ直弟子22人、孫、曾孫、その下寄せると百人近い一門を率い、数々の功績、没後10年、もし米朝さんがいなかったらの上方落語はどうなっていただろうと、思わずにはいられませんでした。

（エッセイさまざま）

必勝、日の丸の鉢巻　（2015.8）

山口洋司（狩場台）

たまらなく不愉快になることのひとつです。
スポーツ大会の応援席でよく見かけることですが、日の丸に必勝と書いた鉢巻き姿で声をはりあげている一団の光景です。これが出てくるとどんなにいい試合でもすぐテレビのスイッチを切ってしまいたくなります。

この光景は、疎開派のぼくにとっては、かって子供ごころに日常、目にしていたものです。消し去ってしまいたい光景なのです。兵隊さんもそうでしたし、銃後の人たちもそうで、いわば戦時の正装みたいなものです。みんながこの必勝のもとに意見をひとつにされて必ず勝つ、神風が吹くと信じて突走っていったのです。

バレーボールの＜ニッポンチャチャチャ＞のホッペに日の丸をつけての合唱もなんとなくいやな雰囲気です。選手よりニッポンが表に出て、教育の現場でごり押ししている日の丸、君が代のイメージにつながってしまうのです。
それくらいは、まあ、いいやないか、という人もいます。しかし、疎開派としてはやっぱり許せないのです。キケンな匂いなのです。
国際的な試合などでよく見かけるのですが、レース後、選手が国旗を背負ってグランドでパフォーマンスする光景に至っては目を塞ぎたくなります。まるで選手の成果より国家を誇示しているようです。応援するのはあくまでも個人に対してです。個人の肉体への厳粛な挑戦への賞賛なのです。しかし、メダルをいくつ獲るか、だけが先行して、国威の発揚の場になっているのが今日のスポーツの姿ではないでしょうか。

選手も応援する我々も今一度考えたいものです。必勝と日の丸の鉢巻きは、個人より国が無意識のうちに浸透してくる架け橋みたいです。＜個人よりまず国だー＞と、かってないほど乱暴に振るまう現政権の思惑と重なります。

自転車への思い（2017.11）

山口洋司（狩場台）

自転車が好きでいつも愛用しています。ちょっとした用たしや西神中央の駅へは雨でも降らないかぎり、たいがい自転車です。

なにがいいかって、季節の移り変わりをじかに全身浴びるのがたまりません。春はそよ風、夏は青い空、秋には枯れ葉をふみ、冬は白い息を吐きながら　ー　ペダルの重さで健康状態も分かるというものです。それに何よりエコにも満点です。

自転車が乗れるようになったのは、小学校3年の頃、疎開先の遠戚の農家で借りてやっと足がペダルに届いて前へ進んだ時の感覚は今でも鮮明です。しかし借りるのも度重なるとあまりいい顔をされません。おそるおそる借りていました。当時自転車は高級品、今なら車を買うようなものです。やっとわが家に入ったのは、高校生になって通学の必需品としてでした。ですから自転車はずっと憧れの乗り物でした。

また、自転車は僕にとっては民主主義のシンボルのようでもありました。
汽車で30分あまりのとなり町の小さな映画館の前をたまたま通ったら、石坂洋次郎の「青い山脈」が封切られており、そのいくつもの宣伝写真が杉葉子と女学生らが自転車に乗って地方都市の野をはつらつと風をきって往くものでした。キラキラしていました。自転車が主役のようにも見え、まぶしいほど新鮮でした。
＜古い上着よさようなら、寂しい夢よさようなら　♪ ♪＞、スピーカーからは主題歌がエンドレスでながれていて、その軽快な明るいメロディーと歌詞は戦争が終わって新しい時代が、民主主義という時代が言葉だけでなく本当にやってくるんだ、民主主義という風がふくんだ、というのを少年ながらに身をもって感じ、自転車はその象徴でした。

しかし、平和憲法のもと、まがりなりにもひとつひとつ積み重ねられてきた民主主義が今いっきに、数々の強行採決をする安倍政権の横暴で破壊されてきています。
秋の小路の枯れ葉を踏むわがペダルに思わず怒りの力が入る、というものです。

森友・加計問題はどこへ行った（2018.2）

山口洋司（狩場台）

東欧、バルト三国行専用機の機上からニヤリ手を振る安倍さん。寄りそう昭恵さん。“国難”と騒ぎ立てて、選挙をやるほど国内に問題が山積しているにもかかわらずの外遊です。それも経営者を多数引き連れての諸国漫遊大名旅行みたいなものです。
昨年の予算委員会で自民党のお友達議員にこれまでの訪問国の回数を讃えられた安倍さんです。その数をさらに積み上げてることに意気を感じているようにしか見えません。

こんな光景をみていると、森友、加計学園問題はまるで何もなかったようです。これでほんとに収まっていいのでしょうか。昨年、委員会をやるごとに新しい証言や証拠が出てきています。根はとても深いのです。官僚と政権の究極の国民背信の慣れ合いの悪だくみはここに極わまれりなのです。ことに総理大臣安倍晋三夫妻の動向が核心です。
いうところの丁寧な説明は何らされていません。詭弁を使って言い逃れをしているだけです。国民の大多数が安倍さんの説明に納得していないのです。

「森友・加計は小さなこと」と切り捨てる自民党の執行部の人がいました。とんでもないことです。民主主義の根幹にかかわる問題です。これをうやむやにして国民の大事な生活のかかっている新年の予算をたてることはあってはならないと思います。今、政権への信頼の基盤が崩れているからです。
予算審議の前に徹底してこの問題の決着をはかるべきです。やましかったら辞めると安倍さんは豪語しているので、決着して辞めるべきは辞めてもらいたいものです。
そのために、昭恵さんも国会に求められている参考人に逃げずに出てくるべきです。へらへらと外国旅行に出かけているなんて恥ずかしいこと、と自らおもうことです。
野党もあの、去年の熱気はどこへいったんですか。民進党から希望の党にいったあれだけ熱心に追求していた人たちは、ここでも「安保法制反対」を撤回したように、考えを変えたのでしょうか。
＜排除します！＞に身をひそめているのでしょうか。

ともあれ機上から手を振っている場合ではないのです。安倍さん夫妻は森友・加計問題の解明に自ら先頭に立って徹底した調査を指示し国民の疑惑を晴らすことが先なんです。

オリンピックの浮かれから現実に（2018.3）

山口洋司（狩場台）

連日オリンピックの熱気につつまれた日々でした。結構なことですが、浮かれている間にも大事なことがいっぱい起こっています。

冬のシジミ漁の湖に米軍機が燃料タンクを事故投棄し、いつもと同じように防衛大臣が「再発防止を米軍に申し入れる」と、シラけたコメントをします。録音しておいたテープを再生するように繰り返します。
裁量労働の問題をめぐって国会は安倍さんのでたらめ答弁で大揺れです。この法案は残業代を抑えたい経営者の思惑を、同一労働同一賃金という、本来あるべき法案などと一括して無理押しをしようとするものです。安倍さんはめずらしく発言を撤回して陳謝しながらも、厚労省が悪いんだ、といつものように責任逃れです。
森友問題では政権と財務省が問題解決を放棄しています。虚偽答弁をしていた佐川さんもぬけぬけと国税庁長官に収まって、ちゃんと税金納めなさい、と呼び掛けます。
国会は今、予算編成の最中、何百億、何千億の“戦艦”“戦闘機”が、かの国のトランプさんに押し付けられて計上されています。一方で社会福祉に必要な予算は悪玉のように扱われ、切り詰めを迫っています。

大事な時です。テレビや新聞はオリンピック報道のパレードでした。世界のアスリートが挙って繰り広げる速さと技の限界への挑戦は感動的ですが、周りはちょっとはしゃぎ過ぎです。メダルが幾つになった、メダル、メダルと絶叫のような叫びが紙面でも画面でも続きました。それにまつわる美談も満載でした。これが高じてニッポン、ニッポンの合唱です。みんな日の丸振っていっときのナショナリストになります。必勝のはちまきの応援団にいたっては戦時中、もんぺ、必勝のはちまき姿で銃後のバケツリレーの防火訓練をした婦人会の姿と重なり、ぼくには不愉快でした。

オリンピックの陰に追いやられてきた日常にかかわる大事なことを一刻も早く現実に呼び戻したいものです。裁量労働問題がそのまま通れば働き方の大改革になるんです。

放浪の俳人ぼうふらさんのこと　（2021.3）

山口洋司（狩場台）

《 寒空に酒屋にはしるほかはなく 》

無名の放浪の俳人松本子子（ぼうふら）さんが詠んだ句です。酒は飲まない僕でも心境分かります。伝わってくるものがあります。
ぼうふらさんは東京の帝国大学の法学部を出て、若くして会社勤めを辞め全国を放浪している俳人です。春を告げる沈丁花の香るころになると、白く長い眉毛に無精髭をたくわえ雲水姿でわが家に現れ、父と縁側のわずかな陽だまりでお茶をすすりながらぼそぼそと話しあっていたのが思い出されます。帰り際、布袋から筆を取りだし一句色紙にしたため、わずかな礼金を懐に木賃宿を渡り歩いていました。
絵描きや寄席の楽屋などぼうふらさんを理解してくれる人のところへ出没していたのです。一度落語の桂米朝さんに聞いたら、「正岡容（師で演芸作家）のところに出入りしてたんやなぁ」とのことでした。
母はぼうふらさんが老躯をおして現れると、ここで死なれたら困ると警戒し、招かざる客でした。ある折り、ぼうふらさんがダンプカーにぶつかって頭に血だらけの包帯を巻いて現れました。「死ねばよかった」と、ケッケッケと顔を歪めて笑ったのが強烈な印象です。

その年の2月に父が死に、いつものようにふらっと現れたぼうふらさんが詠みました。
《 謹弔　在りし日のままの窓より春風が 》
父の死後も何度か訪れました。応対する僕がまだ高校生のころです。しかし行乞、反俗、ぼうふらさんの生き方の不思議さを探っていこうとしていた最中、ぶつりと足が途絶えたのです。どこかで野垂死にしているのではないか、今だに気になっています。
効率がすべて、全てデータで刻まれる今の社会、ぼうふらさんの生き方は埒外です。時代が変わってもこんな生き方も許容される多様な社会であってほしいものです。

孤独感は大かん酒をかくて飲む
郷愁のすて場と扇また開く
蚊を叩く気もせず朝の茶をもらふ
土筆野にあから引く空ありにけり

俳優田中邦衛さんの思い出　（2021. 5）

山口洋司（狩場台）

俳優の田中邦衛さんが亡くなりメディアを賑わせています。
しばらく表に出てこなかったので気になっていましたが、それにしても88歳で老衰というのには驚きました。

古い話になりますが、ぼくが最初に演出したテレビドラマの主人公はまだ30代の田中邦衛さんでした。『夫婦百景』シリーズの一本として『ちんどん屋の涙』という作品です。『若者たち』などで独特のしゃべり方でへんに存在感がある邦衛さんが使いたくて、それに合わせて内容を作りあげたようなものでした。
大阪は下町が舞台。最近引っ越してきたちんどん屋夫妻（田中邦衛と市原悦子）にバイク盗難の嫌疑がかけられる。下町の住人はよそ者の夫婦を陰で監視したり、噂を広げたり盗人扱いをしていく。その嫌疑を徹底して晴らそうとする夫に妻は事をあらだてないで、と夫婦喧嘩になっていく。弱者どうしが足のひっぱりあい、傷付けあいをする。
ひょんなことからバイクは出てくるのですが、嫌疑は宙に浮いたまま、♪～　清水港の名～物はょお～お茶の香りに～♪　妻のクラリネットに合わせて大売り出しの看板を背に鉦、太鼓を叩きながら道化ける夫。足の引っ張り合いで、結局喜ぶのは誰！、といったものでした。

本読み一日、立稽古一日、カメラを入れての稽古と本番の一日、その合間に本職のちんどん屋さんにちんどんの指導をしてもらう。今では考えられない贅沢なスケジュール。

大方収録しホッとしたところで休憩。邦衛さんと社員食堂でカレーをすすりながら、小さなことだが照明のあたり方でちょっと気になったとこがあった、となにげなく話したら、邦衛さん、カレーのスプーンを放り出し、もういちどやりましょう、と立ち上がる。しかし些細なことで、その上、全員の緊張感を取り戻してもういちどやるのはとうてい無理なので引き止めたが、それでも、やりましょうとぼくに説得するのに涙がでるほどでした。　市原さん共々テーマに大いに共鳴してくれ、いい一刻を持てたのを思い出しています。

邦衛さんも市原さんも俳優座。民芸に文学座、関西は関西芸術座 ― 。5社協定で映画の人たちが使えないテレビの草創期、テレビドラマの供給源は当時はほとんどが新劇の俳優さんでした。舞台で徹底して鍛えられた人たちの芝居はみな凄みがあり、ぎらぎらしていて、政治にも深い関心を持ち、敏感であったのが懐かしく思い出されます。
（山口洋司さんは読売テレビの元制作局プロデューサーです。山口さんを知る貴重かつ話題豊富なインタビュー記事をインターネット上で見つけました。ご本人の承諾を得て紹介させていただきます。編集委員）

オリンピック、マインドコントロールを解いて ！（2021.6）

山口洋司（狩場台）

「日本は忍耐力があるから大会は可能。世界は日本の美徳に感謝している」。IOCのバッハ会長がおだてる。科学を無視した精神論を乱暴にぶちあげる会長。そのおだてに乗ってまだ、開催すると言い切る菅首相。

国民の80％あまりが中止か再延期をしたほうがよいという中、なぜ開催にこだわるのか。各国の選手を拘置所へ留め置くように閉じ込めて、人権を無視するようなことをしてでも開催をすると言う。体力の限界に挑戦する選手とそれを称賛する観客が一体となって喜び合う平和の祭典の意義がもうすでに崩れているのに、大きなリスクを犯してでも開催するのは、もう誰がみてもやぶれかぶれの論理です。

選手だけでない、多くの直接関係するスタッフのほか、掃除や食事や運搬などそこへ民族大移動がおこるような膨大な関係者が関わります。オリンピック後、現在のインドのような状況にならないと誰が保証できるのか。ウイルスはしたたかです。いくら安全の対策をした、と思っても、すきあれば忍び込んできます。いくら緊急事態宣言の対策を繰り返しても収束できていないのが証拠です。あまりにも楽観的です。

菅さんは「選手や大会関係者の感染対策をしっかり講じて安心の上参加出来るようにするとともに国民の命と健康を守る」の繰り返し、国会や記者会見で様々な角度からの疑問が出されても全く同じフレーズ、マインドコントロールされているようにしか見えません。　丸川担当大臣も橋本聖子さんも「コロナを克服した証しの大会にする」と口を開けば同じことを繰り返すだけです。恐るべき虚言です。緊急事態宣言のもと、入院もできず多くの人が死んでいっている足もとの現実を政治家としてどう考えているのでしょうか。
オリンピックを一度パスしたからと言って大局的に見れば世界は変わりません。マインドコントロールを解いて人々の命とてんびんにかけてください。

止めるにも賠償の問題があってIOCとトラブルが発生する可能性もあるという人もいますが、そこはオリンピックの理念で平和的話し合いができるはずです。
今、だれかマインドコントロールされていない権限を持った人が中止を提言する最後のときです。

いのちは平等（2021.7）

山口洋司（狩場台）

目がうつろで泳いでいます。まるで聞きわけのない子供のようです。何がなんでもオリンピックを観客を入れて開催する、という菅総理。
賭博打ちが大儲けにでるように見えます。オリンピックで世論をもりあげ、きたるべき秋の総選挙に勝って政権を維持したいという一念、国民のいのちを取り引きにされてはたまりません。
抽象的に国民のいのちと健康を守るとしか言わない菅さん、オリンピック開催が原因で、もし、ひとりでも感染していのちを落とすようなことがあったらどう言いわけするのか。

この理不尽な政権の横車のもと、怖いことにいのちの選別も横行しています。
誰もが気にかけるワクチン接種がまだどうなるか不安定の時、オリンピックの選手と関係者を優先して接種すると発表しました。いくらIOCが提供する別口のワクチンだからと言って特別に優先順序が変わることはあってはならないと思います。オリンピックという国家的事業に貢献するからということでの優先は論外です。
大阪府の医療監のトップが入院事情の逼迫する中、＜当方の方針として年齢が高い人については入院の優先順序を下げざるを得ない＞と府内の各保健所にメールをおくりました。役に立たない高齢者、公に貢献することはない高齢者の切り捨てです。まさにいのちの選別です。
愛知県の市ではこんなこともありました。スギ薬局の会長夫妻に便宜をはかって不正に優先接種しようとしたのが発覚、市の責任者の言い分が驚きます。＜市に日頃貢献してくれているから＞。

こんな事態を見ていると、太平洋戦争中、ドイツのヒットラーが遺伝的にドイツの民族の優秀なのを誇って、これ以外を抹殺したり、戦争遂行に邪魔になる病人など弱者を排除した恐るべき優生思想に通じるものがあります。

＜役立つ者から生かせ＞、権限を持った人によるいのちの選別はあってはならないことです。いのちはどんな場合にあっても平等です。

拡大導火線になったオリンピック　（2021.9）

山口洋司（狩場台）

＜モーツアルト、バッハに弱い日本人＞友人が読売新聞に投稿した川柳です。
＜感染者が減少したら観客を入れよ＞＜菅首相が止めると言ってもオリンピックはやる
＞と豪語した“五輪貴族”のバッハさんが優雅に銀座を散策して日本を後にしました。パラは強行中ですが、何でもありでまかり通ったオリンピックはやっと終わりました。

振り回された菅さんですが、もしオリンピックを止める英断を早期にして、コロナ対応を先手先手に打って徹底していたら、ひょっとしたらコロナは収束していたかも分かりません。すくなくとも今ほど爆発的に悪化はしていないはずです。オリンピックが導火線になっての今の状況であることは間違いありません。
選手を含め大会関係者だけで500人近い感染者を出して、バブルは成功し、安心安全の大会が出来た、とはどういうことなのか、その感覚は理解に苦しむところです。無観客になっても競技会場や開閉会式は、関係者だけで密そのものでした。ハグする光景も日常茶飯事、それがテレビの映像で連日垂れ流されてくる。
そんな中、＜不要不急の外出はやめて！　三密はさけて！＞、といくらメッセージを出しても届くはずはありません。官制のオリンピックを祝祭気分でやっているなら、と緊張感はどこかへふっ飛んでしまいます。

会期中、官邸では菅さんを競技観戦させてその映像を流し，高揚感をあおって、支持率を上げ、自民党総裁選に継げようと企んでいたが、さすがにそれは、ということでとり止めたそうです。そう、すきあらば政権は考えます。オリンピックは利用の対象なのです。メディアのとりあげ方も気になりました。メダルが何個、アナウンサーの絶叫、ニッポン、ニッポン、ついてまわる美談。

さらに違和感を覚えたのは、＜やってくれました＞です。＜やった、でかした＞でしょう。選手が体力の限界に挑戦してよくやったことに私たちは賛辞をおくるのです。わたしたちのために＜やってくれた＞ではないのです。

内閣の支持率は朝日新聞によると28%、支持しないが53%、菅内閣組閣以来最低です。なんとコロナを巡るこれまでの政府の対応を、評価しないが66%です。早く“祝祭気分”から目をさまして日常に戻ってほしいものです。

もうすぐ総選挙です　（2021.10）

山口洋司（狩場台）

私たちは忘れてはならないことがいっぱいあります。 まもなく4年に一度の衆議院選挙です。 自民党の総裁の顔が変わったからといってだまされてはなりません。

安倍、菅政権の8年あまり、どんなに国がおかしくなっていったか、不正は日常茶飯事で、国はあてどなく右へ右へと流され、憲法の精神がとめどもなくシロアリが蝕むように侵食されてきました。
集団的自衛権の行使を容認する新安保法制、機密保持法、共謀罪法等と戦前回帰の法案がたてつづけに安倍政権によって成立、軍事費は肥大化し、アメリカの武器を爆買い、富国強兵への道へまっしぐら、内では歴代の内閣が封印してきた教育勅語を教材として使用することを容認する閣議決定をするなど、ひたすら国家主義化。一方では法の番人であるべき法相河井夫妻のまれにみる大がかりな政治資金規正法違反、吉川元農林水産相の収賄罪疑惑、IR誘致汚職の秋元議員、極め付きは総理である安倍さんの森友・加計疑惑、桜を見る会の夫妻での公私混同と政治資金法違反容疑など直近のことだけでもきりがありません。

安倍政治を継承する菅政権は就任早々から学術会議の委員を政府の政策に反対していたからと思われる理由で6人を認めなかったり、国会を開くよう野党から再三要請されても無視、国民に説明責任を果たそうとしない姿勢が浮き彫りになりました。国民の多くが待った、をかけるオリンピックも強行しました。もし止める決断をしてコロナ対策に集中していたら爆発的な感染は防げたと思います。

そして何より安倍、菅政権はコロナ対策では、ワクチン対応にみるように決定的に後れを取りました。対応がすべて後手後手で泥縄式です。病床不足、自宅療養、抜本的な手が打てていません。

これらは安倍、菅個人だけの問題でなく政権を推進している自民党にこそ問題があるのです。のうのうと今回の総裁選では4人とも敵基地攻撃の必要性に言及していました。恐ろしい限りです。

私たちは選挙の一票でこの不正だらけで憲法に背を向ける党を阻止することが出来るのです。

つながり過ぎの不安（2021.11）

山口洋司（狩場台）

元法務大臣が懲役刑で牢獄入り、自治体では庁舎の自室にサウナを備え付けた市長ら、自民党、維 新の会の懲りない人たち。怒り通り越して滑稽な光景が今年も満開でした。

今回は通信の話です。みんな手に手にスマートフォン、通 信 とコンピューターが連動して画期的 に便利で進化した社会 になっています。産業革命にも匹敵する科学の進歩です。

ほんこの間のことを振り返ってみます。わが家に固定電話がついたのが昭和40年頃 、ぼくが社会人になってからでした。それまでは急な用件は近くの雑貨屋さんで借りかかってくれば雑貨屋のおばさんが家まで呼びにきてくれたりして悠長なものでした。
昭和38年父が急死した時、雑貨屋さんが閉まっていたので近くの六甲小学校の職員室に飛び込んで電話を借り、父の友人に連絡をしたのを覚 えています。わが家だけでなく多くがまだこんな状況でした。固定電話をひく手続きも複雑でした。今 、隔世の感です。
後年、東京へ単身赴任したとき、生活必需品を整え、最後電話をひくわけですが電話がついて初めてホッとしました。一本の線で外の世界とつながっているという安心感だと思います。

しかし 、その逆ですが 、ポケットベルなるものが出てきて、会社からそれを持たされた時は閉口しました。いつでも仕事とつながっているのです。仕事から切れる時がないのです。
休日、遊びに出掛けているときにも容赦なくつながってくるのです。 安心どころか 、つながり過ぎの迷惑です。まるで監視されているようです。
知人の作家福田紀一さんが「VIKING」誌に固定電話は家の中へ断りなく土足で踏みこんでくるようで許せない、と黒い小さな電話機への不満をたらたら書きました。 同じく知人ですが、突然、周辺のデスクの電話の線をハサミで切りまくった人もいます。

容赦なくつながってしまうー。通信の進化、社会の発展に大いに寄与するスマホ、携帯電話ではありますが、その便利さ手軽さゆえ負の一面もあるのではないですか。

つながり過ぎることの不安、犬が鎖をつけられているように絶えずしばられ、管理されかねない不安。
コンピューターと通信と、デジタル技術の結合、これがもう現実になった未来像ですが、科学の進歩によっての管理、監視だけはされたくありません。

教科書、これでよいのか　（2021.12）

山口洋司（狩場台）

楊貴妃メダカ

教科書が少しずつおかしくなってきています。この間の戦争の反省からどんどん背を向けていっているようです。

この4月に菅政権が従軍慰安婦と強制連行に関するいい方の変更を閣議決定しました。従軍慰安婦は単なる慰安婦に、また強制連行といういい方は適切でない、としました。
右派の団体として知られる「あたらしい歴史教科書をつくる会 」がいい方を問題視し、それを受けた維 新や自民の議員の質問に対する答弁書として答えたものです。
文科省は即刻民間の教科書出版社を集めて説明会を開き訂正申告を求め、7社が早速記述を変更しました。このすばやい対応は異例のことだそうです。
あまりにも姑息です。事実あったことを何故、認めようとせずいい方をぼやかして逃げるのか。何故おおいかくそうとするのか。政府の教科書への介入です。

この春、区民センターで来年の教科書が並べられていて小学6年の社会をぺらぺらめくっていたんですがあまりにも平和に関する記述が通りいっぺんなのには驚 きました。
国民主権、基本的人権、平和主義の憲法を説くもののどこかよそよそしい、まるで先の戦争がどこかの国の出来事のようで、戦争をしていた国がわが国であったということがぬけおちているのです。かってあった原爆ドームの写真も消え、式典のみになっています。
無謀な日中戦争、太平洋戦争を直接しかけていったのは日本です。その事実がいっさい記されていません。どんなにアジア近隣の国々を苦しめ、国内では人々の日常が破壊 されていったかが教科書では何もふれなくなっているのです。
あの戦争の加害と軍の暴走、多くの人達の被害の歴史を具体的に学ぶのが原点です。いかに我が国が狂っていたか、原点を踏まえてこそ憲法や平和の問題にリアリティが出てくるのです 。
教科書はその点が抜けています。不備です。自虐史観だ、とことあるごとに都合の悪い事実を排除する極端な右派の安倍前総理に寄り添ったようでもあります。

教育のベースとなる教科書の記述が事実を離れ、恣意的になっていくことはあってはならないことです。

社会をよくするにはまず教育、平和を大事にするのも教育からです。教育が全てと言 ってもいいと思います。
若者が昨今、保守的になってきているといわれるなか、つくづく思うものです。

存在感をなくしている野党（2022.6）

山口洋司（狩場台）

国会議員が国会に閉じこもっていてどうするんですか。
ことに野党の議員がです。
自民党の右派系の人たちがウクライナのどさくさに核共有、と軍事費を5年以内までに倍増したいと血迷っているようなことを平気で提言しました。それを受け野党のセンセイは即、街頭に出て糾弾して市民とともに世論をつくっていく。こんな行動的なことが最近ほとんど見かけません。森友・加計問題や桜を見る会のことにしても国会で野党がかなり追い込んでいましたが、これがもし、市民の運動を喚起し、市民とドッキングしていたら安倍政権はもっと早く退陣していたに違いありません。
参院選を前にして労組の連合にひきずり回されているのもこっけいです。自民党にすり寄っている連合などほっておいたらどうですか。
労働者ひとりひとりは賢明です。
今、参院選挙を前にして本当の野党はほとんど存在感を無くしています。影が薄すぎます。朝日新聞の調査でも<維新寄り>が立憲民主党を上まって、立憲の野党第一党の座を脅かしています。参院でも憲法改悪の3分の2が崩れてしまえばえらいことです。
批判ばかりというのを軌道修正して立憲の泉さんは提案型にこだわって批判を抑えました。提案は大事ですがいくら提出しても数の力、検討さえもされないのであります。政権に対する批判はかたときもゆるめてはなりません。まずは、政権監視批判が国会議員の最大の役割です。
ずっと昔ですがアメリカの原子力潜水艦エンタープライズが佐世保に入港することになり、反対・阻止運動が盛り上がりました。その時組合の書記長が連帯を示してルポを書いてこい、となりました。
この日は特別な行動はなかったんですが、小雨しのつく寒い日、コンクリートの足元から、冷気がはい上がってくるようでした。掘っ立て小屋のような拠点に数人がダルマストーブをはさんで雑談をしていました。その中に社会党の爆弾男と異名をとる楢崎弥之助さんがいて、その時、聞いた「議員は国会の外が、ほんとの戦いの場です」のことばが鮮烈で忘れられません。この闘争で楢崎さんは後日多分逮捕されたと思います。
そう言えば当時の議員は紛争あるところをかけめぐっていたような気がします。

本当の野党の議員のみなさん、批判の手網緩めず存在感をいっぱい出して下さい。

「いったい、どうなっているの」（2022.7）

山口洋司（狩場台）

いったい、この国はどうなっているのですか、怒りでいっぱいです。
不思議なこといっぱいです。

国民民主党が政府の予算案に賛成し、憲法改悪に前のめる。日本維新の会は予算案の賛否を棄権、改憲を率先して政府にせっつき、自民より右よりを猛進する。
両方とも、もはや野党ではありません。閣僚を出さないだけの与党です。政権を立憲や共産党の野党から守る補完勢力になり下がっています。どうして今、しかも野党が、改憲が優先、重要課題なのか、さっぱり分かりません。

与党の公明党もアクセルふんでいます。北川さんという副代表は敵基地反撃能力について〈全くダメという認識ではない〉と。それきた、いつもの公明党の手です。安保法制のときも、はじめ懸念をしているようなポーズをして結局はこの北川さんが自民にすりよって歩調を合わせていったのです。“平和の党”を自認する公明党、どうなっているのですか。
そして、不思議、軍事費の強化と憲法改悪、命（いのち）、のひと、安倍晋三さん。政府の骨太の方針案にも、なまっちょろいと、いちゃもんをつけ立ち回っています。
岸田さんは、アメリカのバイデンさんに軍事力の抜本的強化を日本の国会を無視して約束をし、その約束を取り入れ欠陥だらけの骨太方針案を作り上げたのですが、それでも安倍さんら右派に方針案修正をせまられました。
不思議なことです。いまさら首相をやめた人が大手を振って影響力を持つ、見ていていじましい。

それも悪さを重ねてきた人が悪さをそのままにして、振る舞う。それを自民の人らが受け入れる。このゾンビはまた核の共有、という恐ろしいことを言い出しています。受け入れる人たちもそうですが、このゾンビの精神構造はどうなっているのですか。
このまま進んでいけば日本は大軍事国家になります。専守防衛なんてことばはぼろきれのごとく捨てられていきます。
残念ながら国会では戦争を知る世代はほぼいなくなりました。憲法は、戦争の痛切な反省から議論を重ね生まれたのです。リアルな体験からの誕生です。それを変えて、軍事を抜本的に強化する

という人たち、いったい日本をどこへ連れていこうとしているのか、憲法を生み出した世代を冒涜するものです。
不思議なことが渦巻く日々です。軍事強化の先には何もない、ウクライナが写し鏡です。

安倍さんの国葬納得できません（2022.8）

山口洋司（狩場台）

民主主義をさんざんないがしろにしてきた安倍晋三さんが、民主主義をひっくりかえす暴挙に倒れたのは、皮肉なことです。
メディアは連日安倍さんの“功績”と銃撃した容疑者の背景を取り上げ一色になっています。安倍さんに批判的だったメディアもこぞって偉大な政治家を亡くした、と持ち上げているのがちょっと不気味です。
内閣の法制局長官をとりかえてまで集団的自衛権を容認した安全保障関連法制や戦前回帰の特定機密保持法など国民を分断してまで強行した施策、森友・加計問題、桜を見る会での不正容疑はどこへ行ったのか、と言いたくなります。

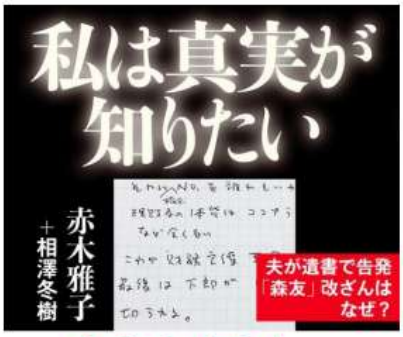
国が関わった首相経験者の葬儀

葬儀年		形式	国費
1967	吉田 茂	国葬儀	1810万円
75	佐藤栄作	国民葬	2004万円
80	大平正芳	内閣・自民党合同葬	3644万円
87	岸信介		4510万円
88	三木武夫	衆院・内閣合同葬	約1億2000万円※
95	福田赳夫	内閣・自民党合同葬	7334万円
2000	小渕恵三		7555万円
04	鈴木善幸		5449万円
06	橋本龍太郎		7703万円
07	宮沢喜一		7696万円
20	中曽根康弘		9643万円

※衆院予算と政府予算の合計額

容疑者の家庭を崩壊させる要因となった反社会的集団、旧統一教会の関連団体に安倍さんがビデオメッセージを寄せていたことが犯行の動機と報道されていますが、総理大臣名でそれがなされていたならば大問題です。
岸田首相、どこかピントがズレていませんか。安倍さん側近の右派の議員らのプレッシャーで熟慮なしに秋に国葬をするという。怪奇で、あいた口がふさがりません。

国民、皆同じ人間、それぞれの分野においてさまざまな功績があります。とりたてて政治家だけに国の費用で国をあげてするのはおかしいことです。
それを敢えてすると言うならば、功績、人格ともに優れ、大多数の国民が文句なく納得をしなければなりません。安倍さんをそれに合わせてみたら適否一目瞭然です。
桜を見る会で虚偽答弁を118回も繰り返した安倍さんです。検事総長人事を自分の都合のよいようにしょうとした安倍さんです。森友・加計問題など不審なことはいまだ未解決の安倍さんです。世論を分断してきた安倍さんです。
それに、憲法を変えることがいのち、という安倍さんを国葬にしてまで賛たえることはぼくには到底出来ません。安倍さ



んというひとりの命が絶たれたことの対しては追悼の気持ちを捧げます。しかし安倍さんの志に同意することは出来ません。
気になるのは右派の人達がさかんに安倍さんの改憲の遺志を引き継ぐと発言していることです。改憲の遺志を引き継がれてはたまったものではありません。

7月16日「朝日新聞」の川柳です
 忖度は どこまで続く あの世まで（佐藤弘泰）
 死してなお 税金使う 野辺送り（田中完児）

安倍さんの国葬、反対です （2022.9）

山口洋司（狩場台）

55年前の吉田茂元首相の国葬の日のことです。
午後2時、国民は黙祷を強いられ、街は半旗で静まりかえり死んだよう、歌舞音曲を自粛したテレビやラジオからは歌番組やドラマなど通常の番組は一斉に消えました。CMもスポンサー名だけに差し替え、ぎょうぎょうしい儀式の中継と吉田さんの功績を称えるドキュメンタリーや交響楽などで埋め尽くされ、ちょっと異様で、おぞましい一日でした。
余談ですが各放送局に自粛要請が出されていた中、Y局は青島幸男の「意地悪ばあさん」という連続ドラマを予定どおり放送しました。ばあさんが、当り前のようになっているおかしなことを、“いじわる”してひっくり返しドヒヒヒと乾いた笑いを放つ痛快なドラマで、権威や権力を笑い飛ばすものでした。視聴率が今ひとつ伸びなかったのですが、この日放送したことによって28%という驚異的な視聴率になり、それ以降人気番組になりました。ちょっぴり右へならえ、の世情を皮肉ったようでした。

さて、今回の安倍さんの国葬には反対です。旧統一教会の関連団体が韓国で大々的に安倍追悼会を催したのを見てもわかるようにいかに安倍さんが反社会的な宗教団体と深いつながりがあったのかが見てとれます。また選挙のときに安倍さんが旧統一教会のまとまった票をコントロールしていたとも伝えられています。このことだけを見ても、こんな人を、なぜ国葬にしなければならないのですか。

各メディアの世論調査はいずれも国葬に反対が賛成を大きく超えています。それでも岸田総理は撤回しません。このまま強行するならば分断を煽るだけです。これまでずっと分断をつくり出してきた安倍さんが死してさらに分断をひろげることに加担することになります。岸田さんは国葬の

場での弔問外交を国民に見せて求心力を高めて政権を盤石なものにしようとする下心ありありです。安倍さんの死を政治的に利用しようとしているようにしか見えません。
国民の反対の方が多いという不思議な国葬、真の追悼という目的から遥か離れてしまっています。安倍さんの遺族としても政治に翻弄されることに耐えられないと思います。
本当の追悼を考えるならば、ここは安倍さんのご遺族が辞退をされることだと思います。

自粛して服喪、ひたすら“功績”を一方的に賛たえるおぞましい一日を2度経験したくありません。
多額の税を使ってあまりにも政治的な国葬はまっぴらです。

ディレクターKさんのこと（2023.12）

山口洋司（狩場台）

10 月に入っても続く真夏日の最中、一枚の訃報が舞い込んで来ました。
社友会からで 90 歳Kさんの死亡連絡です。
茫然とそれを見ながら60数年前のきわめて緻密な演出をするディレクターの顔と労働組合の活動家の2つの顔が浮かんでは交錯するのでした。

Kさんは会社の第一期生の制作部のディレクターです。文学青年であり、映像作品にも深い造詣のある人でした。入社早々にぼくはKさんのアシスタントディレクターに付きます。土曜昼間の生放送の連続スタジオドラマの時などは前夜、一緒に定宿の旅館に泊まり込んで翌日の準備をするのですが、Kさんは撮影コンテづくりそっちのけでお酒をのんで熱情をもって映像を語り、翌朝本番の日も会社の隣の喫茶店でコーヒー代わりに酒を煽りリハーサルにのぞむんです。しかし、きちっと丁寧な演出で見事な番組の仕上がりです。
エキセントリックでいて面倒見はよく教わることはいっぱいあったのですが、ただあまりのストイックさに泣かされることは多々ありました。

昭和33年の会社発足から4年目に労働組合ができました。会社の上層部が民放連の会合で東京に大挙して出掛けているスキに発足大会を敢行したのです。初代の労組委員長に就任したのが Kさんでした。Kさんは新潟出身で紹介者が田中角栄です。当時は紹介者がないと入社試験が受けられない時代でした。即、直接角栄さんから、やめとけ、と電話があったそうですが、Kさんは拒否した猛者（もさ）です。
当時の民放はどことも労組がしっかりしていました。春夏秋冬、闘争をやっていたように思います。ベアや待遇改善と同じレベルで日韓条約反対！、沖縄を返せ！、政権打倒！等、政治的要求も

掲げていました。ストは日常茶飯事でした。スト破りに出ていく中継車の前に寝転んで阻止したり、無期限ストもやり、要所にピケを張って放送を阻止し、他局の組合員が逮捕されれば天満署へ取り返しに押し掛けたり、多局とも連係が密でした。
制作部員の活動が激しかったことから、会社がKさん含む8人の部員を配置転換する辞令を出しました。即、組合はスト権をたてて不当配転反対の長い闘争になったのですが、撤回はできませんでした。Kさんは閑職に追いやられたまま、元のディレクターに戻ることなく定年まで干されることになるんです。

総評も政権や経営陣とがんがんやっていた時代です。連合の会長が政権の実力者と馴れあって政権の実力者と会食したりなぞ考えられもしないはるか前、Kさんの訃報を前にちょっぴり思い出すのでありました。

ハガキ、手紙の文化をつぶさないで（2024.2）

山口 洋司（狩場台）

今年も年賀状をいっぱい書きました。ひと頃の半分以下になったのですが、それでも150枚ほど宛先はすべて手書きです。
一枚一枚相手の顔を思い浮かべ、元気かな、どうしているかな、と思いを馳せながらしっかりと書きます。面倒なことでなく至福のいっときでもあります。
年賀状だけでなく、日頃、ちょっとした用件でも、メールでなくハガキを敢えて使います。それも手書きです。こちらが書くときも、貰うときも無気質なメールを越えたなにかが行間のあいだから伝わる気がします。血が通っているというか人間的、というか、ハガキの字が乱れていれば、相手の状態を思いやったりもします。
小さなきまったスペースに挨拶やお互いの近況の報告にくるんで用件を伝えるそのおくゆかしさと、そして安い料金で全国どこでも2日後には届くハガキや手紙は素晴らしいコミュニケーション、伝達手段です。

調べるとハガキは明治6年が始まりで、馬車に乗せてハガキ一枚5厘だったそうです。戦後5円だったのを覚えています。昭和の終わりは多分10円、なにしろポケットの小銭で届く、それがいちばんのすごさだったのです。
全国すみずみに赤いポストがあり、郵便配達人がかけめぐる、年々サービスは悪くなってきているというもののハガキ、手紙のコミュニケーションは文化です。

そのハガキを政府は、今年から85円に手紙は110円に値上げしょうとしています。
つづく諸物価値上げに追いうちをかけるような仕打ちです。63円が85円に、笑うなかれ約33%、22円のアップ、なんとも大幅です。郵政事業が赤字だからと言って即、利用者に負わすのはあまりにも乱暴です。何を考えているのか、と言いたくなります。安くて早い、の基本的成り立ちをぶっ壊そうとする暴挙でもあります。
形式的に諮問委員会にかけて、ごりおしするのでなく、ハガキ、手紙の真のありようを徹底議論してほしいものです。

届いた年賀状をながめながら早々からのぼやきです。

価値観が変わった
～阪神淡路大震災（2024.3）

山口 洋司(狩場台)

能登の悲惨な状況を目にしながら阪神・淡路大震災のあの時、自分のなかのものの価値観ががらっと変わったのを思い出しています。

神戸市HPより

当時西区の桜が丘に住んでいました。あの明けがた、ぼくは大きな球が坂の上から転がり落ちてくるような豪音と揺れでなすすべなく茫然としていました。こんな折、日頃の性格がよく出るものです。高校生の息子は教えられてとおり自室の机の下にもぐって時がすぎるのを冷静に待ちます。社会人になったばかりの娘は何事もなかったように、鷹揚に構えてベットに横たわったままでした。

灘区にひとりで住まう母に電話しても通じない。3 日後やっと地下鉄が通じたので神戸電鉄で箕谷に出て、そこから新神戸に出ます。阪急もバスも動いてなく新神戸から歩いて六甲まで1時間、リュックを背に歩いている人がぞろぞろまるで終戦直後の風景でした。

焼け跡や倒壊した家並みが続きます。やっと着いた実家は中屋根が落ち大屋根は穴がぽっかり。半壊状態です。崩れた玄関をこじあけて部屋に入ると、仏壇から位牌が飛び出して転がっていました。なんということか。離れの小さな部屋で身をすくめる母の無事を確認して西区へ連れて帰ったのですが、帰り際、誰もいない崩れた部屋の電話が鳴っていたのが不思議な感覚でした。

庭の沈丁花がほのかに香りかける。なにごとも無かったかのようにいつものように早春の香をはこぶのが妙に悲しい思いでした。

盗難に合わないよう、位牌はじめ、ことに大事なものを持てるだけ持って帰るべく慌ててごみ袋いっぱいに詰めたのですが、気が付いたら先祖代々の大事な書類や物品、亡父があれだけ大事にしていた骨董品の数々、ぼくも実家に行くごとに愛でていた何より気にいっていたものなどはどうでもいいものに思え、それより母の日常使っている歯ブラシや下着の方が大事なものでした。状況が変わるとものの価値観が変わる。
しかし時が経つとまたもとの自分に戻っているのです。人間って不思議なものですね。

襲い来るふたたび3度（たび）の地震、能登の現実を前に、宇宙への探求や遺伝子科学、AIなど限りなく進む科学で地震を予測だけでなく防御する科学が生まれんものか、自然を前にだいそれたことを夢想するのです。

緊急異常事態の自民党　（2024.3）

山口 洋司（狩場台）

切り絵『平和を奏でてチンドン屋が往く』

多額の裏金をつくる、脱税する、口座を移しかえて不正に税の優遇を受ける、そして＜みんなもやっている＞と開き直る、これが今の自民党です。
明らかに犯罪行為です。その反省をうけての政治資金規正法改正案。当の自民党は追い込まれて少しは譲歩の姿勢を見せざるを得ませんが、いかにその案の魂をぬいていくかに血道をあげます。
岸田総理は＜政治活動の自由―＞、といつも同じ言葉を繰り返して政治家の特権をふりまわします。政治活動の自由のために政策活動費がすべてオープンにできない、と。
だったら市民の営業活動などはどうなんですか。＜営業活動の自由＞で確定申告で、何に使ったかの公表を拒否できるのですか。
そんなに政治活動は特別なものですか。金銭の隠しごとがあるんですか。ごくまれに外国との関係で明らかにできないことはあると思います。しかしそんなの希少ケースです。
そんなケースをたてに＜政治活動の自由＞などと声高に言いはるのはお笑いです。
まれな希少ケースを除いては政治活動に関わることはすべて公開すべきです。政治活動は特殊な特権的なものではありません。税金で運営されるので国民がいつでもチェックできなければなり

ません。岸田さんが＜政治活動の自由＞をふりかざして裏金の秘匿を暗に擁護することは許されないことです。

そんな総理のもと、自民党の多くの議員は感覚がマヒしているようです。政治家のさまざまな優遇特権にどっぷりひたり、考えているのは次の選挙のこと、保身です。今回の政治倫理審査会に出席を要請されても、説明さえせず逃げています。普通ならこれだけの不正です。組織をはぐれてでも、腐り切った集団に正気を取り戻そうと大きく声をあげる議員が出てきても不思議はありません。しかし誰ひとりいません。みな穴ぐらから首だけを出して嵐が通り過ぎるのを待っているようです。

異常な不正とそれに沈黙する議員群、こんな自民党が組織する内閣が進める政策には正当性はありません。こんな内閣が強行する異常な軍事増強路線は到底支持できません。
いま異常事態です。緊急事態です。自民党が緊急事態で議員任期を延長するのを憲法改悪の突破口にしようとしていますが、そんなことより今自民党による政治そのものが緊急事態です。

オリンピック気になることいっぱい　（2024.9）

山口　洋司（狩場台）

なんとなくの不安

19 日間、社会を一色に染めあげたパリオリンピックが終わりました。それぞれの選手たちの肉体を通しての限界への挑戦、記録への挑戦には崇高なものがあり、喜怒哀楽がはじけドラマチックな日々の連続でした。
花の都パリは連日お祭りの騒ぎ、日本国内でも社会全体が祝祭ムードでした。
一方で、もし、今も戦渦に見舞われるガザ地区の人々の立場だったらこの祝祭をどう見ていただろうとひとり想像をひろげるものでした。

オリンピックでは気になることかいっぱいあります。そのひとつがあまりにもメディアか熱くなりすぎていることです。各社、各局が現地に乗り込み、リポーターは雰囲気にのまれます。日本の逆転優勝を見て、必勝ハチマキのリポーターが＜人生観が変わった!＞と絶叫する始末、対象にのめり込んで冷静さがふっとんでいる状況がしばしばでした。
ワイドショーのMCやコメンテイターは選手の活躍にくやってくれました!＞と興奮する。記録に挑戦する選手の奮闘に拍手を贈るものであって頼んでいるのではないのです。
新聞は次々に選手の美談をつくります。揃って優勝を目指す柔道の兄妹選手の兄妹愛などというエピソードをつくりあげ結局そのプレッシャーに潰されるという始末でした。

いたるところで“国”がはじけていたのも気になりました。日本のメタルが何個、というのが最大の関心ごとでした。ニッポン、ニッポン、ナショナリズムが目いっぱい顔を出します。戦争末期を銃後で経験した世代としては日の丸の国旗を背にする選手を見たくはありません。ましてや寄せ書きをした日の丸なぞ破いてしまいたいほどです。
日の丸は軍国日本の象徴でした。徴兵された人々が寄せ書きの日の丸を持って戦地へおもむき帰ってこなかったのです。敗戦直後、一時掲揚を制限されていたほどです。必勝のハチマキもおんなじです。
＜日本を背負って走れたのが嬉しかった＞というマラソン選手がいました、オリンピックは国家の対抗でなく、あくまでも個人です。スポーツの持つ力を活用して世界平和や人間の尊厳を実現することがクーベルタンの言う近代オリンピックの精神だと思います。
いっそ、表彰式の国旗掲揚や国歌などやめたほうが理念にかなうのではないでしょうか。

そして一ちょっぴり危惧もします。祝祭一色の社会、もし何かで有事になったらメディア、国民、国家が冷静さを投げ捨てひとつのニッポンに暴走していってしまうのではないか、と。

国民民主党、パフォーマンスはやめて！　（2024.12）

山口 洋司（狩場台）

この間の衆議院選挙の結果、国民民主党がキャスティングボードを握るような結果になったのですが、その国民民主党の振舞がちょっと不可解です。

国民主党が与党と対峙している“103万円の壁”は野党第一党の立憲民主党や維新、共産なども同じように強い認識を持っています。それどころか社会保険料の負担が発生する106万円や130万円の壁も大きな課題と捉えています。
ならば小異があったとしも大同に就いて、野党で一丸となって与党に交渉していくのが政治手法の大道だと思いますが国民民主党はそれをさしおいて単独で与党と取引を重ねていました。財源をどうするのか、地方税の収入が減るなどの問題もいっぱいあります。
野党が単独でなく揃って政権と対峙して議論していけばより大きな力になる、野党が揃えば内閣不信任も可決できるようになったのです。
「山が動いた」と玉木党首は言います。しかし与党との合意書には〈本予算を早期成立させる＞という一項がはいっているそうです。結局自民党にからめとられて、自民と連立を組むのと同じことです。

どう見ても今の国民民主党のやっていることはパフォーマンスにしか見えないのは私の穿った見方でしょうか。それではせっかくの政策もだいなしです。玉木さんのスキャンタルもひどい。大事な時にこんな問題をおこしたらどうなるか、その判断ができなく浮かれ舞い上がってしまう、こんな党首ではきわめて危なっかしいです。ちゃんとした判断力は政治家にとっていちばん大事なことではないでしょうか。

マスメディアも挙って国民民主党のパフォーマンスを持ち上げるように報じました。もう少しジャーナリズムとして、この従来型の事前審査のようなありかたの是非を冷静に捉えてほしいものです。これまでは与党が議案を事前審査して、すべて決め込んでから国会に提示して、後は数の力で強行するのが当たり前になっていました。国会をないがしろにしてきたのが大きな問題でした。特に安倍政権以来で、民主主義がこわされていたのです。
与党過半数割れをして、与党だけの事前審査しての強行はさすがにできなくなりそうですが、それに替わって国民民主党が他の野党を無視して単独で事前審査ばりのことをしていたんでは同じ繰り返しです。

国民民主党はパフォーマンスを止めて、野党との連係を選択し、ぐちゃぐちゃにされた民主主義を取り戻すことに注力して欲しいものです。

裏金“センセイ”は即辞職を　（2025.1）

山口 洋司（狩場台）

昨年は裏金問題で明け暮れた一年、全く不毛な一年でした。
束になっての自民党議員の犯罪的行為があらわになったのです。

自民党の“センセイ”方は何千万、何百万という裏金をためらいもなく詐欺する――方、庶民はスーパーで10円でも安い大根に並ぶ。 少しでも安い米を探しまわる。食品からハガキ代まで、すべてのものが大波が押し寄せるように大幅に上がっていく―。未曾有といってもいいほどの狂乱状態です。家計は悲鳴をあげているのです。
“センセイ”方はまず何を置いても、目先のつぎはぎだらけでなく抜本的な物価対策を議論し対策をうたねばならないのです。なのに国会ではそんなことより政治改革、裏金問題が主要な第一の議題になっています。

“センセイ”方が普通の倫理感を持って襟をただしてさえいればこんな無駄な議論をする必要はないのです。 国会は物価対策など主要な問題よりまず“センセイ”方自身の問題に時間をついやせざるを得ない、全くもって不条理です。

不透明な政務活動費、議員全員に支給される旧文章交通費、企業団体政治献金、集金目的のパーティーこれらも“センセイ”方が長年いい加減にごまかしてきたことが問題になっているのです。自らを律しきれてないのです。先の国会では企業団体献金禁止の件が先送りになりました。何故即決められないのか、どう見てもぬけ道を考える時間稼ぎです。
本来これら政治改革一切は全て当の“センセイ”方自身でなく第三者委員会に託すべきだと思います。しかも“センセイ”方が選んだ委員でなく国民が委員を選ぶかたちをとるべきです。でないと信用できないのです。

政倫審で裏金の説明を厳しく求められながら逃げまくっていた旧安倍派の人たちが参議院選挙をこの春に控えて慌てて弁解しました。ほとんどがキックバックを秘書がやっていて知らなかった、とごまかします。安倍チルドレンで弁護士でもある稲田朋美さんは知っていたが違法だと思わなかった、と開きなおりました。こんな初歩的なこと知らぬは弁護士も失格です。
厚顔無恥、困ったものです。

ともあれ裏金に関わった“センセイ”方、何故そんなに議員にこだわるのですか。わたしたち市民から見たら100%“欠陥商品”なんです。即、辞職すべきです。

縮んでいく最後の安全網　（2025.1）

山口 洋司（狩場台）

憲法で明記された、健康で文化的な最低限度の生活を営む権利を保障する最後の安全網のひとつが生活保護制度です。 この制度が昨今歪んできているようです。生活支援のための支給額を下げたり、違法な運用で厳しくしたりです。
先日、朝日新聞で報じられていましたが、群馬県の桐生市は厚生省の要請もあって福祉事務所に元警察官を何人も雇用し、まるで犯罪者を扱うように厳しく脅すような資格審査をし、10年間で受給者を半減させたとのことです。給付額も本来の半分にし、分割払いにしていたことなどで市は謝罪に追い込まれました。
これは桐生市だけの問題でなく、全面的に最後のセーフティネットの生活保護制度がちゃんと運用されているのか、総点検する必要があるのではないでしょうか。
以前小野市で生活保護者がパチンコをしていた、として問題になりましたが,受給者の生活実態を監視していたんですね。まるで行政は受給者を人間扱いしていないんですね。

もうひとつの安全網は高額療養費制度です。治療費の自己負担が一定の額を超えたら生活が破綻しないように支払の限度をもうける制度です。生存権に直結しています。
怪我や病気になったら働くことも出来ず、高い医療費を背負います。それを少しでも緩和させる制度なんですが今国会で国は唐突に自己負担額を大幅に上げようと企みました。
大きな影響を受ける患者たちか声を上げ、立憲民主党などか強く廃案を求め、当面改悪案はかたちを残したまま凍結になるようですが、これは国の冷徹さが象徴的な施策です。
岸田政権で子育支援金制度創設の時、実質の国民負担はないが社会保障費枠全体の中で相殺するとのことからこの高額療養費制度の患者自己負担増額がやり玉になったのです。
一定の社会保険の枠の中だけでこんな大事なことを動かそうとするとどこかの世代とどこかの部門が犠牲になり分断のもとになります。
今回の案は200億あれば凍結できた案だそうです。アメリカに強要されて膨らむ防衛費、1 機120億位と言われている F35戦闘機を2機減らせば十分です。国民の命にかかわる安全網のほうがずっと大事ではないですか。しかし、将来的には医療費をすべて無料にするという大鉈が必要だと思います。多くの国民がいちばん不安に思うのは、いつ、どんな病気や怪我にあうか分からない、が最大の不安材料なのですから。

最後の安全網である生活保護、高額療養費制度をないがしろにしようとする国の施策、究極の福祉をわれわれはいつも注視し、声を上げていくことが必要です。

いま、安倍政治の検証を（2025.5）

山口 洋司（狩場台）

4 月の半ば、どのチャンネル見ても、万博とトランプの関税一色です。
万博は維新の会が安倍元総理を取りこんでカジノを含めたIRとセットの維新の威信をかけた政治的思惑いっぱいの負のイベントです。
気色悪い赤、青のキャラクターが画面を染めているのはうんざりです。赤い帽子の狂気のトランプも桜とともに満開、憂鬱の春です。

そんななか黒メガネの野坂昭如さんの最後の著『絶筆』を読んでいました。自他ともに認めるプレーボーイが脳梗塞で倒れ断酒して車椅子になっての2003年から12年間にわたる380ページにわたる闘病記です。

その日の天候から体調、食べたものが詳細に記されているのですが、その底流をながれている記述が神戸空襲で家を焼かれ、父母と妹を失い浮浪児になったいまわしい“あの過去”です。野坂さんの原点です。
そして、何より病の野坂さんをして目を離させないのが安倍政治の暴走です。新安保法制、特定秘密保護法への怒り、憲法を改悪しょうとする安倍さんへの異議です。
著は12月9日、息をひきとる数時間前まで夫人の口述筆記で綴られます。最後はくこの国に戦前がひたひたと迫っていることは確かだろう＞と、締めくくられます。
10年前のことなのですが菅、岸田そして石破、と安倍政治がより危険な方向で膨らんで今日にいたっています。

読みながら思ったのですが、われわれはアメリカべったりの安倍政治をちゃんと総括してきたのか、国葬までやって崇める安倍政治を検証してきたのか、何もやれてないのではないか。安倍さんの亡霊のようなのが政界にも社会にも跋扈している今日です。
＜若い党員は安倍さんを神聖化している＞、友人のベテラン自民党員の弁です。
アメリカに迫られ事前に約束して国会で強引に通す新安保法制、集団的自衛権一。それを通 すための歪めた人事、強引な国会対応、民主主義の破壊一。森友、加計問題、桜を見る会の不 正などもまだ宙に浮いたままです。悪夢の最悪の政権でした。

わたしたちは今、それぞれが安倍政治をちゃんと検証してきっぱりと安倍政治の延長を立ち切る、その方策をみつけださなければならない時なのではないでしょうか。 野坂さんを偲びながら改めて思うのであります。

＜お米政策を見直すべきです＞　（2025.6）

山口 洋司（狩場台）

米がない、あっても昨年の2倍3倍のむちゃくちゃな価格です。
米は日本人の主食です。何をおいても混乱なく安定して供給されなければならない私たちの食の根幹です。
石破さん! 何しているのですか、農水省の後手後手の無策が混乱に拍車かけているなか、リーダーシップをとって先頭に立っている姿が全く見えません。

櫨谷

米については国民はシビアです。 終戦翌年の昭和21年、米が手にはいらず餓死する子どもが急増、吉田

内閣の発足と同時に＜われわれは飢えている、この声を聞け！ ＞と、食料メーデー（飯米獲得人民大会）が皇居前広場で開かれました。25万人が集まり怒りをぶつけ、マッカーサーか警告を発したことがありました。
戦争が終わっても疎開地に留まっていたわが家、田舎といえど米の入手が大変で、母の着物と交換し売ったりしてやっとありつけた状態でした。麦ごはんはもちろん、大根、さつまいもでどっさりかさあげ、混ぜものの間にちらっと米がみえるような食生活でした。

米は人々のいのちです。政府の近年ずっと続いている米づくり政策は減反したうえに機械化して企業化し、農業従事者を減らし、足りない部分は輸入に頼るというものです。創作活動と並行して米問題に積極的に関わり、発信してきた故井上ひさしさんはこの政府の政策に真っ向から反対していました。日本の棚田状になった地形が果たす治水や養分をつくりだす独特の役割などから、耕田を大農家に集中させ産業化するのに疑問を投げかけ、輸入も政情不安のタイやベトナム、土の荒廃が進んでいるアメリカのカルフォニア米に頼れば安定した一定量が確保できないというものです。その上でガットやウルグァイラウンドなど自由化に強く反対していました。

井上さんの主張はその通りだと思いますがさらに踏みこんで、米だけは国が完全にコントロールすることが必要だと思います。
今、抜本的に米政策を考え直し未来に備えるいい機会です。
主食の米だけは何重にもある仲介を廃し集荷から小売りまで、政府が徹底的に体質改善したうえでの農協を通じてきちっと管理すべきです。減反政策を考え直し、農業従事者を増やし自給自足度を高め、その上で農家には一定の税金を投入すべきです。そして米はいつどこへ行っても安価な同じ価格で途切れることなく求められるー、これこそが食の安全保障ではないですか。

（5月19日記）